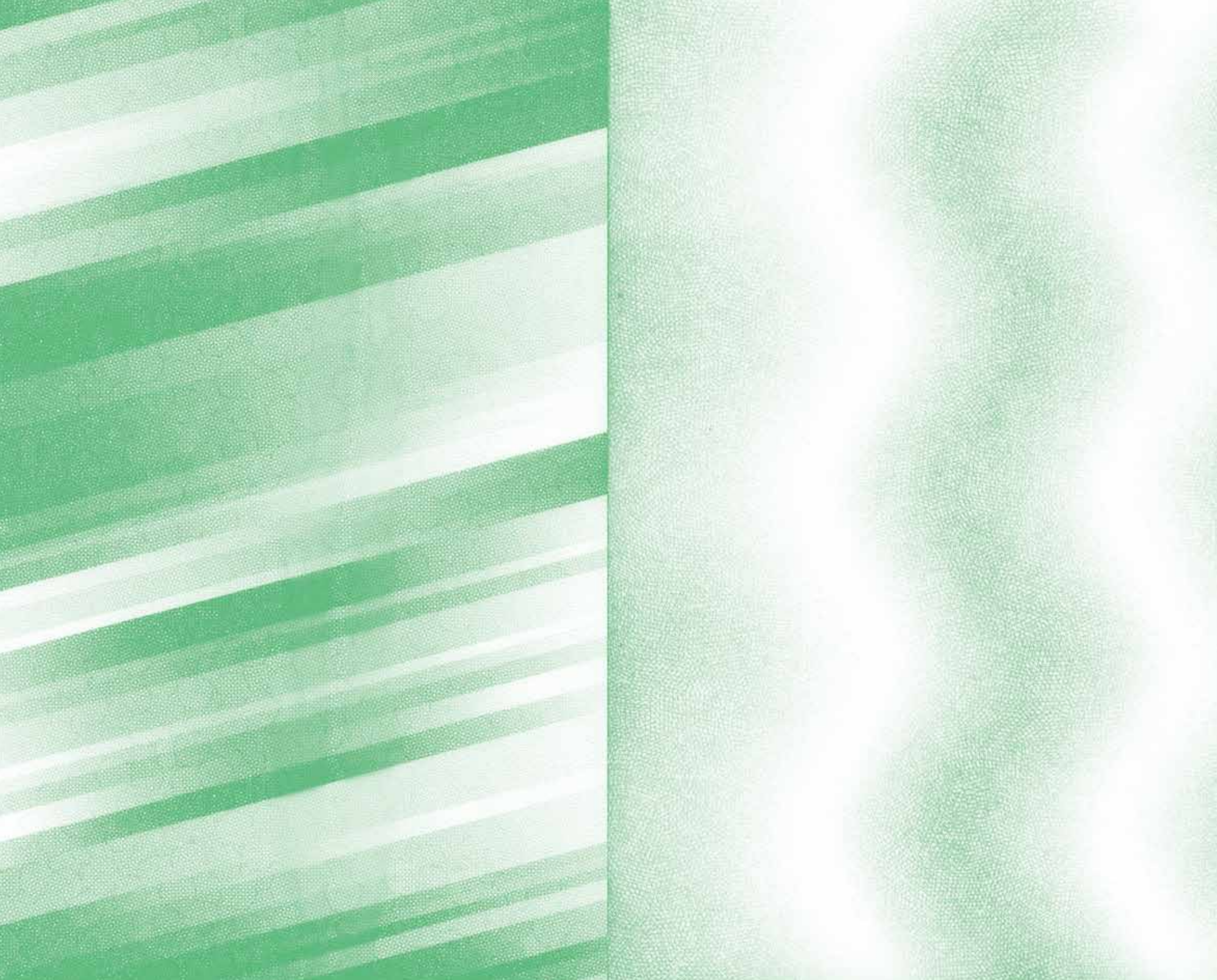


Kyoto International Performing Arts Festival 2014



# KYOTO EXPERIMENT





京都国際舞台芸術祭

KYOTO EXPERIMENT 2014

## 目次

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| ごあいさつ .....                     | 4  |
| 「チケット代が高すぎる」 橋本裕介 .....         | 6  |
| ティナ・サッター/ハーフ・ストラドル .....        | 12 |
| 高嶺格 .....                       | 16 |
| 村川拓也 .....                      | 20 |
| ルイス・ガレー .....                   | 24 |
| She She Pop .....               | 28 |
| 木ノ下歌舞伎 .....                    | 32 |
| contact Gonzo .....             | 36 |
| 悪魔のしるし .....                    | 40 |
| フランソワ・シェニョー&セシリア・ベンゴレア .....    | 44 |
| 地点 .....                        | 48 |
| 金氏徹平 .....                      | 52 |
| FRINGE「使えるプログラム」 .....          | 58 |
| FRINGE「オープンエントリー作品」 .....       | 61 |
| 関連イベント・提携プログラム .....            | 64 |
| フェスティバル・ミーティングポイント、ホテルプラン ..... | 66 |
| クレジット .....                     | 72 |
| チケット .....                      | 74 |
| 会場アクセス .....                    | 76 |
| カレンダー .....                     | 78 |

p1, p10-11, p56-57, p70-71

作品提供: 金氏徹平

写真: 守屋友樹

## Contents

|  |    |
|--|----|
| Greetings .....                                    | 4  |
| "Tickets are too expensive" Yusuke Hashimoto ..... | 6  |
| Tina Satter / Half Straddle .....                  | 12 |
| Tadasu Takamine .....                              | 16 |
| Takuya Murakawa .....                              | 20 |
| Luis Garay .....                                   | 24 |
| She She Pop .....                                  | 28 |
| Kinoshita-Kabuki .....                             | 32 |
| contact Gonzo .....                                | 36 |
| Akumanoshirushi .....                              | 40 |
| François Chaignaud & Cecilia Bengolea .....        | 44 |
| Chiten .....                                       | 48 |
| Teppeï Kaneuji .....                               | 52 |
| Fringe: The Useful Program .....                   | 58 |
| Fringe: Open Entry Performance .....               | 61 |
| Related Events .....                               | 64 |
| Festival Meeting Point .....                       | 66 |
| Credits .....                                      | 72 |
| Ticket Information .....                           | 74 |
| Access .....                                       | 76 |
| Calendar .....                                     | 78 |

p1, p10-11, p56-57, p70-71

Art work: Tepei Kaneuji

Photography: Yuki Moriya

## ごあいさつ

「旅は私にとって精神の若返りの泉だ」。

『はだかの王様』などの作品で知られる童話作家アンデルセンの言葉です。

住み慣れた地を離れて旅に出る時、私たちは人との一期一会の出会いを果たし、あるいは思いがけない発見をし、またあるいは深い感動を心に刻みます。同様に、日常を飛び出して新たな舞台芸術を五感で体験する“旅”は、皆様の心に鮮烈な印象を残すことと存じます。

国内外の新進気鋭のアーティストたちが集い、これまでにない芸術を創り出す果敢な挑戦を重ねてきた「京都国際舞台芸術祭」も今回で第5回。本年も盛大に開催できますことは大変嬉しい限りです。本芸術祭の取組は、世界からの注目も集めつつあり、今後もより一層の発展を期待します。

開催に御尽力されました、森山直人委員長をはじめとする実行委員会の皆様、関係者の皆様に深く敬意と感謝の意を表しますとともに、本芸術祭が御参集の全ての皆様にとって実り多い“旅”となりますことを祈念いたします。

京都市長 門川大作

今年も、関係する多くの方々に支えられて、このように、5回目のKYOTO EXPERIMENTを迎えることができますことを心から御礼申し上げます。

2010年、まだまだ不安も抱えたままスタートした第1回目以降、幸いにして、本フェスティバルは、ここまで順調に発展してきたと言ってよいと思います。昨年のオープニングパーティに、参加アーティストばかりでなく、京都内外からも数多くの舞台芸術関係者に集まっていたことを、私は忘れることができません。「京都」という場所の可能性を確信し、さまざまな困難を乗り越えてきたすべてのスタッフにとって、そのことは大きな励みとなりました。けれどもいいかえれば、私たちの活動は、まさしくそうした多くの「他者」の眼差しに開かれていることを意味しているはずで

私たちの「EXPERIMENT=実験」は、いったいどこに向かおうとしているのか? 「実験」とは、まさしく新しい価値を作り出すからこそ「実験」の意味があるのでしょう。奇しくも2014年は、第一次世界大戦勃発からちょうど100年目に当たります。しかるに、ちょうどこの大戦の前後は、あらゆるジャンルで「前衛芸術」の花が咲き乱れていた時期でした。当時のさまざまな「実験(精神)」があったからこそ、「世界戦争」という時代の激変を乗り越え、「芸術」はいまなおかけがえのない価値を私たちに与えてくれているのです。

さて、私たちの「実験」は、いままさに起こりつつある時代の激変に対して、それを乗り越える価値を生み出すことができるのでしょうか? できる、と信じ、あらゆることを試みること——5年目以降のフェスティバルの最大のテーマは、まさにそこにあるのだと言っても過言ではないでしょう。

京都国際舞台芸術祭実行委員長 森山直人

## Greetings

“To travel is to live” is a famous quote from Hans Christian Andersen, the author of *The Complete Fairy Tales*, which includes *The Emperor's New Clothes* and more.

When we travel, leaving our familiar environment, we treasure every encounter, which may never recur, discover the unexpected and stamp that excitement deep into our hearts. Leaving our everyday surroundings and going to see a performing arts production, bringing to life all our senses, is a kind of journey that can be just as inspiring.

It is a delight for Kyoto Experiment, a festival in which cutting-edge artists gather and challenge the expectations of art, to celebrate its fifth year this year. The festival has been gaining prominence internationally and will certainly develop further.

It is my great honor to express sincere gratitude to the executive committee, led by Chairman Naoto Moriyama, and all the people whose contributions have made the festival possible, while hoping the festival offers a fruitful journey to its audience.

Daisaku Kadokawa, Mayor of Kyoto

Kyoto Experiment is thrilled to kick-off the fifth year of its festival this year, thanks to all those whose contributions have made the festival a reality.

Since our first and anxious year of 2010, it's fair to say that the festival has blessedly sailed large before the wind. It was quite significant for us that many performing arts personnel from Tokyo, in addition to the participating artists, attended last year's opening party. As we have strived to overcome many difficulties, believing in the importance of having an international performing arts festival in Kyoto, it has been a great encouragement. Yet, this also means that we are under constant scrutiny.

Where is our “experiment” heading? An experiment is worthwhile only when it creates new value. 2014 marks 100 years since the outbreak of WWI. 100 years ago, the avant-garde movement was in full flower in every genre of the arts. The experimental spirit of the time enabled art to weather the social upheaval of the time, and to continue to pass down vital lessons to us today.

Could our “experiment” inspire lessons that will pull through the current upheaval? It wouldn't be too much to state that our ultimate theme for the upcoming festivals is to try everything we can, while believing that we might possibly be a bridge to the future.

Naoto Moriyama,  
Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Chairman

## 「チケット代が高すぎる」

KYOTO EXPERIMENTは今年で5回目を迎えます。参加アーティスト、関係各位、そして未知のものとの出会いに食欲な観客の皆さんに支えられ、継続することが出来ました。とはいえ、特別の感慨に浸っているわけではなく、ただひたすらこのフェスティバルの核心である、新しい取り組みに専心しています。むしろ、毎年新しいチャレンジが許され、そこに集中出来る環境にあることを感謝すべきかもしれません。

では、今年どんな試みを行うのか。観劇の仕組みに関わる取り組みなので、もしかすると日本の舞台環境に限った内輪話のように受け取られるかもしれません。しかし、運営側の一方的な想いだけでは意味がなく、実際に会場に足を運んでくださる皆さんの理解と参加があって初めて成立するため、敢えてここでご紹介したいと思います。

ひとつめの取り組みとして、「開場時間」を告知することをやめます。観客の皆さんは、開演時間にさえ会場へ来てくださればOKです。指定席の演目では、お客様の席は予め確保されているので、どのタイミングで入場されても観る場所は変わりません。自由席の演目では、開演時間の直前(ほぼ同時)にドアをオープンすることにします。自由席というのは、会場が小規模でどの席で観劇しても鑑賞の内容に差がないという想定で設定していますから、ドアのオープンと同時に座りやすい場所から席を埋めて頂きたいと考えています。この試みにはいくつか理由があります。

KYOTO EXPERIMENTの演目はこれまでもほぼすべて、緞帳(舞台と客席を仕切る幕)を使っておらず、それはすなわち、入場した瞬間から舞台空間が目に入るということの意味しています。つまり、劇の世界がその時点から始まっているに等しい。これは本来であれば、演出家がコントロールすべき時間にあたりますが、運営上の都合となんとなくの慣習から、開場時間が設定されてきました。ですから今一度、「舞台空間を目にする時間=開演時間」を基本にしたいと思います。開演までの時間は観客の皆さんにお返ししますので、どうかご自身の時間を満喫してください。

この取り組みを通して発生するちょっとした面倒は、観劇にともなう喜びに転化してもらいたいと考えています。おそらく開演直前には、若干の混雑は生じることでしょう。狭いドアを通過する際にはお互いに譲り合ったり、声を掛け合うことも必要になると思います。でもそのことが、「他人と一緒に何かを観る」という観劇体験の原点に立ち返るきっかけになるはずで、他の観客の息づかいや存在を意識しながら観劇すること。そして、客席を暗闇が覆い、「独り」になって舞台に向き合うその瞬間。それが劇場という場の生み出す、特別な時間ではないでしょうか。

もうひとつの取り組みは、チケット料金の設定です。KYOTO EXPERIMENTでは、今年から明確な料金体系とするため、会場ごとに料金を設定しました。京都芸術センターの演目はすべて同じ料金、春秋座の演目もすべて同じになります。つまり、ソロ作品かグループ作品か、あるいは若手かベテランかといった演目の内容で、料金に差をつけることはしないということです。これにどんな意図があるのか。

「チケットの対価は作品の価値ではなく、会場やフェスティバルの基本的な運営に対して支払われる入場料」と位置づけたいのです。美術館や映画館とほぼ同じ意味合いの料金体系をKYOTO EXPERIMENTに導入しようとしています。このフェスティバルを運営する実行委員会は、様々な組織から多くの金銭的支援を受けています。それは国際的なフェスティバルを実施するためであり、また、新しい作品を創造するためのサポートです。だとすれば、遠方から来るアーティストの旅費や作品制作にかかる費用をチケット料金に加味することは、厳密に言うと受け取っている金銭的支援の趣旨に反します。

別の角度からの説明も試みます。行政であれ民間の企業であれ、芸術に対して支払われる支援は「公的」なお金だと言えます。「公的」である理由は、社会全体に対して広く、かつ長期的なスパンで還元されることが期待されているからです。だから、社会の財産である芸術作品を、世界に広く紹介するための機会を支えているのだと思います。あるいは、未来の住人にとっても財産となり得る芸術作品を生み出すにあたって、現在の住人だけに費用を負担させるのはバランスが悪いので、「公的」なお金がいられるのでしょう。だからこそ、KYOTO EXPERIMENTでは、観劇の価値をチケット料金という金銭の対価から切り離したいのです。観劇の価値は、それぞれの観客の内側に生み出されるものであってほしい。つまりそれは、芸術鑑賞を消費行為から訣別させたいということなのです。しかし自省を込めて言えば、それにはまだチケット代が高すぎます。

今回からはじめたふたつの取り組みは、まだ道半ばであり完全ではありません。観客の皆さんの理解と参加があって初めて実を結びます。そんな環境が成立すれば、どれだけ贅沢なことかと夢見ています。アーティストにも社会状況にも触れることなくこの文章を終えることに多少気が引けていますが、5年目を迎えて、フェスティバルの初心に戻るための決意をお伝えることをまずは優先させました。ともあれ、魅力溢れるアーティストたちによる、今年のフェスティバルを存分にお楽しみ下さい。

KYOTO EXPERIMENT プログラムディレクター 橋本裕介とスタッフ一同

## “Tickets are too expensive”

This year is Kyoto Experiment’s fifth. We have been able to continue our festival thanks to the support of participating artists, colleagues, and our audiences, hungry for encounters with the unknown. Rather than immersing audiences in extraordinary emotion experiences, at the heart of the festival we have always dedicated ourselves to new projects. We were permitted to try new endeavors every year and perhaps we should be grateful for such an environment which allowed us to concentrate on our work.

And so what will our endeavor be this year? It relates to the framework for theatergoing and so will possibly come across as something internal or limited to the Japanese theater world. One-sided ideas about administration are pointless and as things only come about through the understanding and participation of our audiences who actually come to the venues, we’d like to try to introduce our thinking here.

Our first project is that we will stop announcing the time when the performance venues open. It’s fine if our audiences arrive at the performance start time. For performances with numbered seats, audience seats are fixed in advance and so the place from which you watch the performance is the same whatever time you arrive. For performances with unreserved seating, we will open the doors to the auditorium just before (i.e., almost exactly at) the start of the performance. Unreserved seating is based on the idea that in a small venue, whichever seat you sit in, your viewing experience will be essentially the same, and so we would like our audiences to enter when the doors open and fill up the seats starting with wherever is easy for them to sit in. There are several reasons for this.

Until now, almost all of the performances presented at Kyoto Experiment have not used a curtain to divide the stage and the audience seats, and the meaning of this is so that audiences will view the stage space as soon as they enter the venue. In other words, this is the same as saying that theater itself begins from this point. Fundamentally, the time should come under the control of the director, but in fact auditorium opening times in Japan are set according to the convenience of the venue operators and various conventions. For this reason, we would like to take things back to basics again: the theater “opens” when you see the stage space. We are returning the time between the venue opening and the start of the performance to our audiences. Please make the most of it as you please.

We would like to translate the slight trouble that will arise from this into the joy that accompanies watching theater. No doubt things may be a bit crowded just before the performance begins. Some give and take and verbal interaction will also be necessary as you pass through the narrow doorways. But this will be a catalyst for going back to the origins of the theater experience – watching something with other people. Audiences will watch theater while conscious of the breathing and presence of other members of the audience. And that moment when the auditorium goes dark, when you become “alone” and face the stage – this is the special time created by the place we call a theater.

Our second endeavor is about ticket prices. In order to make a clear pricing system Kyoto Experiment will set ticket prices from this year on a per-venue basis. Tickets to productions playing at Kyoto Art Center will all cost the same, as will all those at Kyoto Art Theater Shunjuza. What this means is that ticket prices are not differentiated by the content of the production, whether it be a solo work or a group piece, whether performed by young artists or by veterans. What is our intention here?

The ticket price is not the value of the artwork; it is entry price paid for the running of the venue and the festival. In this way we want to introduce a pricing system to Kyoto Experiment with almost the same meaning as an art museum’s or cinema’s. The Executive Committee operating the festival receives a lot of financial support from many different organizations. This support is for running an international festival and also for creating new artworks. In which case, adding the travel expenses of artists coming from far away and production costs to the ticket prices is strictly speaking against the spirit of the financial subsidy we receive.

Let’s try an explanation from a different approach. Whether it’s from the government or private corporations, the subsidy paid to the arts could be said to be “public” money. The reason it is “public” is that it is expected to be paid back broadly and over the long term to the whole of society. It is supporting the opportunity to introduce works of art far and wide to the world, artworks which are the property of society. “Public” money is employed for creating works of art that can also become the property of future inhabitants of society, since it is disproportionate to impose the costs only on current inhabitants. And that is why at Kyoto Experiment we want to cut the value of theatergoing free from pricing by so-called ticket costs. We want the value of the theater experience to be what is created internally in each member of our audience. In other words, we want the act of viewing art to bid farewell to the act of consumption. And yet, after a lot of heart searching, we have to say the tickets are still too expensive.

These two endeavors we are starting this year are only half the story; they are not complete. They will only bear fruit with the understanding and participation of our audiences. How wonderful it would be if this environment could come about. It feels a little poor to finish these sentences without touching on the artists or social conditions, but as we welcome our fifth year we wanted first of all to prioritize conveying our determination to go back to the basics of the festival. At any rate, this year’s festival has a packed line-up of superb artists, so please do enjoy it to the full.

Yusuke Hashimoto (Program Director, Kyoto Experiment)  
and the Kyoto Experiment team





# ティナ・サッター / ハーフ・ストラドル

## Tina Satter / Half Straddle

NEW YORK



photo: THEY bklyn

## House of Dance

70 min (日本初演 / Japan Premiere)

9/27 (Sat) 17:00-  
9/28 (Sun) 17:00-  
9/29 (Mon) 20:00-  
9/30 (Tue) 20:00-

英語(日本語字幕あり)  
Performed in English  
with Japanese subtitles

ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

とあるタップダンス教室を舞台に、  
この物語で描くのは、すべての些細で大切な事柄である

The ordinary, yet extraordinary world of a tap dance studio

ニューヨーク・ブルックリンを拠点に活動するティナ・サッターは、ニューヨーク・タイムズ紙から超新星とも評されるなど、ニューヨークの現代演劇シーンでその未来が囑望される若手劇作家のひとり。自身でアーティストック・ディレクターを務めるパフォーマンス・カンパニーHalf Straddleを率いて公演を重ね、中でも近年、最も高い評価を得ている作品のひとつが『House of Dance』である。

舞台は、とあるうらぶれたタップダンス教室。そこに集うインストラクターと生徒たちの4人は、それぞれ日々の暮らしや人間関係に身を砕きながら、ダンス大会の出場を目指してレッスンにいそんでいる。決してセレブでもゴージャスでもない、索漠としてナイーブな人生。都会での成功への憧れとは裏腹に、彼らの満たされない思いやはかない希望が、皮肉混じりに描かれる。人生の機微を知的に浮かび上がらせる対話から見事なタップダンスまで、パフォーマーの高い表現力も見逃せない。心揺さぶられ、謎めいて、それでいてありふれた瞬間を描き出すこの演劇体験は、まさに人生の一コマそのものだ。

Brooklyn-based Tina Satter is a promising playwright in NY contemporary theater. Named a New York Times Critics Pick in her 30's, Satter is the artistic director of the theater company Half Straddle and brings the company's recent critically acclaimed show, *House of Dance* to Kyoto Experiment 2014. At a small town tap studio, four dancers and their instructor prepare for a competition while struggling through their everyday lives and relationships. They are neither stars nor particularly talented. It is a story about their mundane and naive lives. Despite their yearnings for success in the big city, their reality - hope being unfulfilled and in vain, is depicted with irony. The very prosy dialogue and outstanding tap performance delivered by its extraordinary actors are a must see. Titillating, cryptic yet quotidian, this show is true to our real life experience.

京都芸術センター  
フリースペース  
Kyoto Art Center Multi-purpose Hall

脚本・演出: ティナ・サッター  
出演: ジェス・バーバガッロ、ジム・フレッチャー、ポール・ポントレリ、エイドリアン・トラスコット  
音楽: クリス・ジアルモ  
振付: ハンナ・ヘラー  
舞台美術: アンドレア・ミンシク  
照明: ザック・ティンゲルマン  
衣装: エンバー・チャカルタシュ  
字幕翻訳: エグリントンみか  
初演プロデューサー: リチャード・マックスウェル  
舞台監督: マウリーナ・ライオス  
インターン: エリック・ラールソン、ハンナ・レア・ノヴァック  
広報: Blake Zidell & Associates  
カンパニープロデューサー: アーロン・ローゼンブルム  
カンパニーアソシエイト・プロデューサー: サラ・ヒューズ  
共同製作: ニューヨークシティプレイヤーズ  
初演: 2013年10月アブロンアーツセンター  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Written and directed by: Tina Satter  
Performers: Jess Barbagallo, Jim Fletcher, Paul Pontrelli, Adrienne Truscott  
Composer/Music director: Chris Giarmo  
Choreographer: Hannah Heller  
Set design: Andrea Mincic  
Lighting design: Zack Tinkelman  
Costume design: Enver Chakartash  
Japanese subtitles: Mika Eglinton  
Originally produced by: Richard Maxwell  
Stage manager: Maurina Lioce  
Production interns: Eric Larson and Hanna Lea Novak  
Publicity: Blake Zidell & Associates  
Half Straddle producer: Aaron Rosenblum  
Half Straddle associate producer: Sarah Hughes  
A co-production with: New York City Players  
*House of Dance* premiered at Abrons Arts Center in Oct. 2013 and ran again in Coil in Jan. 2014.  
Presented by: Kyoto Experiment

## ティナ・サッター『House of Dance』に寄せて

高橋宏幸

いま、ニューヨークの演劇シーンの新しい波は、どこから生まれているのか。劇場をベースに考えてみると、かつてならば日本でも名前の知られた、ラ・ママ、キッチン、そしてP.S.122といった場所が、なにか新しい、実験的な作品が上演される場所としてあった。むろん、それらはいまも注目される、活動的な場としてある。だが、最若手が上演するというよりも、そこから一歩抜け出したものたちの場として機能している。むろん、すでに名前知られたものたちも、変わらずにそれらの劇場で上演している。

なので、より若い世代の才能たちは、たとえばブッシュウィック・スター、アブロン・アーツ・センター、かつてリチャード・フォアマンの劇場であった、インクベーター・アーツ・プロジェクトなど、はずれもあればあたりもあるが、それらに集っているのではないか。

ティナ・サッター率いる劇団ハーフ・ストラドルの作品、『House of Dance』は、とくに活動が著しい劇場である、アブロン・アーツ・センターで初演された。その後、1月のニューヨークのフェスティバル・シーズンを彩る、アメリカン・リアルネスのプログラムのひとつに加えられて再演された。彼らは、いままでそれらの劇場で上演していたのだが、次作はいよいよと言えるのだろうか、キッチンで上演するらしい。いわば、ニューヨーク演劇シーンの王道とでもいえる、小劇場から次のステップである、より大きな名のある小劇場へと移動しているのだ。

また、この作品の共同製作に名を連ねるのは、ニューヨーク・シティ・プレイヤーズ。そこをオーガナイズするのはリチャード・マックスウェルだ。かれはヨーロッパのフェスティバルにも幾度となく呼ばれる、世界的に名の知られた、実験的な、もしくは新しい可能性とでもいうべき、旧来にない演劇をつくらうとする、ニューヨークの演劇シーンを代表するひとりだ。

これらの情報だけでも、このカンパニーが注目される存在へと、階段を着実にのぼっていることが

わかる。そして、作品自体もいまのニューヨーク、ひいてはアメリカの現代社会のある一面を表象する。タップダンスの練習をする4人。(タップダンスというのが、またアメリカのカルチャーといえるが) 彼らは翌日にコンテストを控えている。そのための練習を彼らはして、そしてそれが描かれる。これだけ述べるとなげない、どこにでもありうるような風景ではある。

だが、この4人のキャラクターは、間違いなく、ニューヨーク、もしくはアメリカ社会のいまを表している。人種やジェンダーといった問題が、ここには端的に提示されるからだ。そして、ストーリーも多くはここでは語らないが、劇的になにかが起こっていくわけではない。しかし、そのような大きな物語性がないことこそ、現代を逆説的に照射している。いくつもの謎めいた行動はあるにもかかわらず、それはあるひとつのものへと回収されない。むしろ、散らかされる。小さな話が集積するような物語の構築方法は、翻ってみれば、日本でも、ヨーロッパでも、最近の作品の傾向と指摘することもできる。

ニューヨークとさまざまな場所で作られる作品が、傾向としてあれ、リンクする。その同時代性は、やはりこのカンパニーが、ニューヨークの演劇シーンを牽引する、もっともアクティブなひとつとなっていくことの証だろう。

高橋宏幸

演劇批評、日本近現代演劇研究。1978年生まれ。日本女子大学、桐朋芸術短期大学などで非常勤講師。2013年度は、Asian Cultural Councilのフェローを得て、ニューヨーク大学客員研究員。評論に「マイノリティの歪な位置一つかこうへい」(文藝別冊つかこうへい)、「プレ・アンダーグラウンド演劇と60年安保」(批評研究vol.1)など多数。また、演劇批評誌シアターアーツ35-42号の編集代表を務めた。

## Tina Satter *House of Dance*

Hiroyuki Takahashi

A new wave is sweeping through the New York theater scene. If we stick to theaters, there are places previously known even in Japan like La MaMa, The Kitchen and P.S.122, places where new experimental works were put on. Of course, these are still very much in the limelight, but today, not so much the work of the youngest artists, they function as places one step removed from this. And needless to say, those who have already made a name for themselves continue to stage work at these venues.

Due to this, the younger generation of talents are gathering, though it can be hit or miss, at places like the Bushwick Starr, Abrons Arts Center, and the Incubator Arts Project, previously home to Richard Foreman's Ontological Theater.

*House of Dance* by Tina Satter's theater company Half Straddle was premiered at the Abrons Arts Center, a theater that has been particularly striking. It was then revived as part of the one-month American Realness festival. Until now Half Straddle has been staging work at these kinds of venues but the word is that their next piece will go on at The Kitchen. This trajectory is said to mark the point when a fringe group comes into the big time, progressing up the ladder to larger theaters.

*House of Dance* is also co-produced by the New York City Players, inc., which is run by Richard Maxwell. A major figure in the New York theater scene, Maxwell has been invited countless times to European festivals and is known worldwide for creating experimental new forms of theater never seen before.

From this information alone we can see how Half Straddle is a company that is steadily moving towards the spotlight. And the play itself represents an aspect of New York, or even American society today. Four people practice tap-dancing. (Tap-dance is also something we might consider very American.) They are preparing for a competition the next day. They practice for the competition and this is what the play shows. Put like this, it would seem to be a kind of everyday scene we might find anywhere.

But make no mistake, these four characters repre-

sent New York and American society; issues of race and gender are succinctly presented. And while I won't give too much away about the story, needless to say nothing really dramatic happens. However, it is precisely this lack of a big narrative that paradoxically irradiates the contemporary. There may well be several cryptic actions in the play but these are not pulled together into one thing. Rather, they are scattered. This kind of narrative structure where smaller stories accumulate also seems to be a recent trend in both Japan and Europe.

Theater made in New York and many other places are linked by this tendency. And this contemporariness is surely further proof of how this company is becoming one of the most active and leading groups on the New York theater scene.

Hiroyuki Takahashi

Theater critic and Japanese modern and contemporary theater researcher. Born in 1978, he is an adjunct lecture at Japan Women's University and Toho Gakuen College of Drama and Music. He was an Asian Cultural Council fellow in 2013 and visiting research fellow at New York University. His writings include papers on Kohei Tsuka, and on Critical Inquiries. He was also editor for Japanese theater magazine Theater Arts for eight issues.

高嶺格

Tadasu Takamine

AKITA



絵：吉田晋之介

## ジャパン・シンドローム～step3.“球の外側”

Japan Syndrome ~step3. "Outside of the ball"

🕒 未定 (新作・世界初演 / New Creation | World Premiere)

📅 9/27 (Sat) 19:00-  
9/28 (Sun) 14:00-□, 19:00-  
9/29 (Mon) 19:00-

🗨️ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

🔗 関連イベント：アーティストトーク  
Related event: Artist Talk → p.64

📍 元・立誠小学校 講堂  
Former Rissei Elementary School  
Auditorium

構成・演出：高嶺格  
出演：柏木規与子、梶村昌世、目黒大路  
照明：高原文江  
音響：西川文章  
映像：中上淳二  
舞台監督：石田昌也  
テクニカル・コーディネーター：尾崎聡  
制作：小倉由佳子  
製作：KYOTO EXPERIMENT  
共催：立誠・文化のまち運営委員会  
主催：KYOTO EXPERIMENT

Concept and direction: Tadasu Takamine  
Cast: Kiyoko Kashiwagi,  
Masayo Kajimura, Daiji Meguro  
Lighting: Fumie Takahara  
Sound: Bunsho Nishikawa  
Video: Junji Nakaue  
Stage manager: Masaya Ishida  
Technical coordinator: So Ozaki  
Production coordinator: Yukako Ogura  
Production: Kyoto Experiment  
Co-presented by Rissei Cultural City  
Steering Committee  
Presented by: Kyoto Experiment

### 2011年から3年。

急速に変化する日本を見つめながら様々に形を変えてきた  
「ジャパン・シンドローム」シリーズ、完結編

**The conclusion to the three-year series examining  
a rapidly changing Japan**

美術家の高嶺格は、2011年から継続してKYOTO EXPERIMENTに参加し、ここでの作品は「ジャパン・シンドローム」というタイトルで統一されている。「ジャパン・シンドローム」とは、アメリカ映画の『チャイナ・シンドローム』に想を得た名称で、福島原発事故以降、大きく揺れ続ける日本の状態を言い表した言葉である。今後長い将来に渡って社会の根幹に大きなダメージを与え続けることが確実な放射能の問題、この問題に芸術がどう関わるか？

「ジャパン・シンドローム」は、政治状況や街の空気の変化を柔軟に反映しつつ、様々な表現スタイルをとりながら発展してきた。ブラジルという日本の“裏側”に位置する場所から、日本を対象化しようと試みたビデオ・インスタレーション「球の裏側」、及びパフォーマンス「球の内側」。取材をもとに、放射能が人々に与える影響を冷徹に可視化した「関西編・山口編・水戸編」の映像シリーズ。そして昨年、京都市役所前の広場をダンスフロアのような熱狂の場に変えた「ベルリン編」。

シリーズ最終章となる本年は、テキストを核とした舞台作品が予定されている。2014年秋に高嶺が語る言葉とは何か？それは、ずっと以前から存在しながら真正面から議論されることなく先延ばしにしてきた問いを突きつけ、単なる現状分析を超えて未来への意志を語るものになるはずだ。

Tadasu Takamine has developed his *Japan Syndrome* series throughout his participation in Kyoto Experiment since 2011. Inspired by the film *The China Syndrome*, the artist illustrates the ambience of upheaval in post-3.11 Japan in the series. What is it that art can do in relation to the radioactive issues which will most likely continue to damage the foundation of Japanese society for years to come? *Japan Syndrome* has adopted different styles in order to reflect the political as well as social atmosphere of the times. 2011's *The other end of the ball* was a video installation examining the Brazil that exists "behind" the Japan we think we know, a theme continued in 2012 with the performance *In-side of the ball*. The artist next coolly visualized the effects of radiation through a series of films shot in Kansai, Yamaguchi and Mito. And then in *Berlin version* in 2013, the plaza in front of Kyoto City Hall was turned into a wild dance floor. This year, as the final phase of the series, Takamine presents a theater play. His work for us in the autumn of 2014 will likely bring to the fore issues that have hovered in the background for sometime without being confronted and will demonstrate not just a present analysis but a message for the future.

## 「ジャパン・シンドローム」からの逃走

高橋瑞木

検閲という行為がやっかいなのは、それが人の心の中にうすばんやりとした恐怖をまよわせるからだ。その恐怖の対象は、検閲をおこなう権力機関だけでなく、自分と同じように検閲に恐怖する家族や友人にも及ぶ。畢竟、複数の視点からの検閲を恐れるひとは、おのずと目を閉じ、耳を塞ぎ、沈黙する。言葉の不在によって検閲はその存在の輪郭を表すのだが、ひとは検閲の恐怖に脅かされている限り、その輪郭を明示し、他者に伝達することはできない。

さらに検閲が罪深いのは、こうした恐怖に硬直した思考や身体に「だってしょうがないよね、思っていることを言えば周りの人にも迷惑かけることにもなるしね」と、囁きかけることで、私たちにエクスキューズを与えと同時に責任を保持するための内なる倫理を崩壊させることである。私たちはこの世界の問題に気が付いていてもそうでないふりをしているうちに、それらに注意を払うことすらなくなる。こうなると自己検閲がすっかり内面化された証拠だ。

高嶺格は作品を通して、この検閲のシステムに抗ってきた。例えば「球の裏側」(2011)。ブラジルでリサーチをおこなった高嶺は、過酷な環境のブラジルのスラムから生まれたダンスミュージック「Baile Funk」をモチーフとしたマルチメディアインスタレーションを制作した。このインスタレーションでは「Baile Funk」が流れるダンスフロアで観客がどのような反応をするのが試される。しかし、貧困の中に生きる辛さを束の間忘れるために生み出された音楽のリズムについていくことができない自分の反射神経を目の当たりにし、私は豊かな国で生まれた自分の身体の鈍感さについて考えざるをえなかった。

続く映像作品「ジャパン・シンドローム」(2011-12)では、福島第一原発の事故後の食品の放射能汚染に関する人々のやりとりの再演を通して、私たちの他者への共感の欠如や情報への盲信を露わにし、放射能数値の測定や開示のような実証的な方法だけでは解決できないこの問題の根深さを提示した。

ところで、症候群は特定の原因を突き止めるのが難しく、したがって治療が困難だという。2011年3月に発生した東日本大震災とそれに伴う福島第一原発の事故以降、ジャパン・シンドロームは加速度を増しながら、原発事故被害者や福島第一原発の労働者への東京電力や政府の対応、近隣諸国との外交摩

擦、議会の女性に対するハラスメント、熟議なき集団的自衛権の閣議決定、メディアと政治権力の癒着といった末期的症状を露呈している。そして長い時間放逐されてきた問題群が複雑に絡み合った結果、発症に至ったこれらの症状は、人々を分断してゆく。

この分断への危機感から生まれたのがブラジル人パフォーマーと共に制作された「球の内側」(2012)と京都市役所前広場で開催された「ジャパン・シンドローム〜ベルリン編」(2013)だった。前者では、公演の最後に観客全員がパフォーマンス空間の形を変化させ、そしてお互いに見つめあい、後者では屋外ダンスフロアとなった市役所前広場でDJのプレイに合わせて人々が自由に踊り、熱狂的な時間を共にした。しかしながら、奇しくも戦後日本の繁栄と平和の時代の潮目が明らかに変化したこの2014年に「ジャパン・シンドローム」シリーズは終了する。ゆえに、今回の公演はこの病への対症療法の最後の宣告となるだろう。

ひとびとが国旗と国歌を愛し、規律を守り、富める人はより豊かになれる国。繁華街に設置された大型スクリーンではアイドルたちが歌って踊り、大型ショッピングセンターの中にはいつも照明に照らされて、まぶしく光る。政府によると、放射能に汚染された土壌の除染は順調に進んでいるそうだ。少子高齢化が進み、男女格差は先進国の中で最下位だが、政治家たちは「女性が輝ける国」になるよう、日々努力を重ねている。2020年にはオリンピックの開催も予定されており、あらゆる面で国際化に余念がない。これまでより積極的に平和を維持することになるだろう自衛隊は、他国から大いに頼りにされており、アニメ、ゲームといったクール・ジャパンのコンテンツも海外で大人気だ。隣国との歴史や政治的軋轢に敏感な若者たちは、週末になれば隊列を作り、自分たちの主張を大声で道行く人に伝える。なんと誇らしい国、日本。この美しい国からのエクソダスの序章が、今から始まる。死ぬ前に、逃げろ！

高橋瑞木

ロンドン大学東洋アフリカ学院MA修了。水戸芸術館現代美術センター主任学芸員。主な企画展に、「ボイスがいた8日間」(2010)、「高嶺格のクールジャパン」(2013)、「拡張するファッション」(2014)など。

## Flee from Japan Syndrome

Mizuki Takahashi

What makes the act of censorship irksome is the way it wraps itself around the abstract fears lying in our heart of hearts. What we fear is not only the authority that censors, but also one's friends and family, who likewise fear it. After all, those afraid of a multifaceted censorship will shut their own eyes, block their ears, and fall silent. The absence of words delineates the presence of censorship. But as long as people live in fear of censorship, that presence cannot be made explicit and communicated to others.

The unforgivable thing about censorship is the way such fear makes the mind and body rigid, unbending. "But, it can't be helped; sharing my thoughts with those around me will just burden them"-we mutter, providing ourselves with a ready excuse, while also destroying the personal morals necessary for retaining a sense of responsibility. We pretend not to notice the many problems in this world, then eventually stop paying them any attention altogether. By that stage, self-censorship has clearly become completely internalized.

Takamine Tadasu has used his artwork to resist this system of censorship. For example, after conducting research in Brazil, Takamine created the work *The other end of the ball* (2011), a multimedia installation based on Baile Funk music, which was born in the harsh environment of the Brazilian favelas. The installation, comprising a dance floor on which Baile Funk is being played, was made to test how the audience would react to such music. Yet, when I noticed how my reflexes were unable to keep up with the rhythm of a music created to temporarily forget the hardship of its surroundings, I couldn't help wondering at my body's awkward dullness which has been nourished.

In the video work *Japan Syndrome* (2011-2012), reenactments of people discussing the radioactive contamination of foodstuffs in the wake of the Fukushima No.1 Reactor accident demonstrate our lack of sympathy towards others, our blind confidence in media reports, and the deep-rooted nature of a problem that cannot be resolved simply by empirical means, such as measuring and disclosing radiation levels.

Incidentally, it's said that due to the difficulty in locating the specific cause of a syndrome, they are difficult to treat. Since the March 2011 Tohoku Earthquake and subsequent Fukushima No.1 Reactor accident, the "Japan Syndrome" has been accelerating, revealing a terminal condition-including the treatment of Fukushima victims and workers at the No.1 Reactor by Tepco and the government, the diplomatic frictions with Japan's neighboring countries, the harassment of female politicians in the Diet, the cabinet decision on the right to collective self-defence without careful deliberation, and collusion between the media and

political authority. Moreover, as a result of the intricate intertwining of these issues due to long neglect, these symptoms have reached crisis levels, and continue to divide and isolate people.

Sensing the dangers posed by such division, Takamine was led to collaborate with a Brazilian performer on the works *Inside of the ball* (2012), and *Japan Syndrome - Berlin Version* (2013), the latter of which was held in the public square in front of Kyoto City Hall. In *Inside of the ball* (2012), at the end of the performance the entire audience joins in the space, everyone gazing at each other; while in *Japan Syndrome - Berlin Version* (2013), the public square turns into a dance floor as people dance around freely to a DJ's tunes, sharing a wild moment together.

However, the *Japan Syndrome* series will end this year, a year that has seen the tide turn definitively on Japan's prosperous and peaceful postwar era due to the decision on the right of the collective self-defence. This public performance may therefore amount to the last symptomatic treatment prescribed for its ailment.

A country in which people love the flag and the national anthem, where laws are obeyed, and the rich get richer. Where pop idols sing and dance across huge video screens installed above entertainment districts, where large-scale shopping malls are constantly illuminated, shining brilliantly. The government maintains that the decontamination of soil affected by radiation is progressing smoothly. Despite low birth rates and an aging population, and the worst gender disparity ranking among developed countries, politicians double their efforts day by day to make Japan "a country where women shine". With the hosting of the Olympic Games also scheduled for 2020, in all areas there is a focus on internationalization. Japan's Self-Defence Forces-which will presumably keep the peace even more thoroughly than ever before-will be relied upon to an even greater extent by other countries; while "Cool Japan" content such as anime and games remain extremely popular overseas. Meanwhile young people sensitive to the historical and political differences with neighboring countries line up in the streets on weekends, shouting their claims loudly at passers by. Ah, what a proud nation, Japan. The prologue to the exodus from this beautiful nation starts now. Let's run for our lives!

Mizuki Takahashi

Completed an MA at the School of Oriental & African Studies, University of London. She has been curator at Contemporary Art Centre, Art Tower Mito. Her recent exhibitions include: "8 Days - Beuys in Japan" (2009-2010), "Takamine Tadasu's Cool Japan" (2013), "You reach out - right now - for something : Questioning the Concept of Fashion" (2014).

村川拓也

Takuya Murakawa

KYOTO

## エヴェレットゴーストラインズ

Everett Ghost Lines

🕒 70 min (新作・世界初演 / New Creation | World Premiere)

📍 京都芸術センター 講堂  
Kyoto Art Center Auditorium

📅 10/2 (Thu) 20:00-  
10/3 (Fri) 20:00-  
10/4 (Sat) 14:00-  
10/5 (Sun) 17:00-

🗨️ 日本語(英語字幕あり)  
Performed in Japanese with  
English subtitles

演出: 村川拓也  
舞台監督: 浜村修司  
照明: 萩田野浩介 (RYU)  
音響: 齋藤学 ((株) STAX)  
映像: 小西小多郎  
演出助手: 山村麻由美、豊山佳美  
助成: 公益財団法人セゾン文化財団  
製作: 村川拓也  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT  
主催: KYOTO EXPERIMENT

🔗 関連イベント: アーティストトーク  
Related event: Artist Talk → p.64

Direction: Takuya Murakawa  
Stage manager: Shuji Hamamura  
Lighting: Kosuke Ashidano (Ryu)  
Sound: Manabu Saito (Stax.Inc)  
Video: Kotaro Konishi  
Assistant director: Mayumi Yamamura,  
Yoshimi Toyoyama  
Supported by: The Saison Foundation  
Production: Takuya Murakawa  
Co-production: Kyoto Experiment  
Presented by: Kyoto Experiment

現実の不確かさ、ゆへの豊饒さへ。

ドキュメンタリー作家がラディカルに追求する演劇の可能性

**A documentary artist explores the radical possibilities of theater in the richness of uncertainty**

京都造形芸術大学出身、ドキュメンタリー映像作家としてそのキャリアをスタートさせた村川拓也は、現実を素材にしながら、ドキュメンタリーやフィールドワークの手法を舞台作品にインストールして、実験的な作品を発表してきた。代表作『ツァイトゲーバー』では、障害者を介助する／される現場を舞台上に再現。観客1人をその場で舞台上に招き入れ、役を割り振ることで、戯曲、役者という舞台芸術の確固とした前提を揺るがせたまま、作品は淡々と進んでいく。

昨年上演された『エヴェレットラインズ』を下敷きにした今回の作品は、『ツァイトゲーバー』よりも一層、不確定性を強く打ち出した演出作品。村川が上演の数週間前に特定多数の出演者(候補)に手紙を出す。そこには、会場を訪れる時間、会場での行動すべてが指示されている。出演者(候補)は、ただその指示に従って行動すればよいのだが、ただし、全出演者(候補)が指示どおりに劇場へ現れるかは当人次第であり、当日誰が舞台上に現れるかわからない、いわば、出演者未定の舞台である。演劇の抛って立つところの寄る辺なさを衝くこの試みは、そのまま我々の生きる現実の不確定性を露わにするはず。一瞬たりとも落ち着かない、スリリングな舞台となるのは間違いない。

Takuya Murakawa, graduating from Kyoto University of Art and Design as a documentary filmmaker, has presented experimental works in which he applies the strategies of documentary film and fieldwork to performance. For instance, in his signature work *Zeitgeber*, Murakawa enacted scenes of helping disabled people on stage. Inviting the audience to the stage one by one and giving them a role, the work calmly progresses while obscuring the solid premise of performance: fiction and actors. Based on his production *Everett Lines* last year, *Everett Ghost Lines* takes a further step from *Zeitgeber* in its indeterminate reality. Murakawa sends letters to his actor candidates a few weeks prior to the performance. The letter includes the instruction for the performance such as time to show up and things they are supposed to do on stage. Thus, all they have to do for the performance is to follow instructions. However, it's entirely up to the candidates if they show up or not and Murakawa is unaware of who will be on the stage until the day of the performance. By questioning the preconditions of theater, the work reveals how indeterminate out reality is. Can we trust what we see? Or can we not even trust our own eyes? A beautifully paradoxical and thrilling work.

## ドキュメンタリーの演劇／演劇のドキュメンタリー

山崎健太

村川拓也の演劇作品は二つの意味でドキュメンタリーである。

近年の村川の演劇作品の多くは出演者自身を題材とする形で製作されている。2011年のフェスティバル／トークショー公募プログラムで注目を集めた『ツァイトゲバー』では実際に介助を仕事としている人物が作品に出演し、障害者介助の様子が舞台上に再現された。2012年の『言葉』では出演者の被災地での体験が、2013年の『瓦礫』では出演者自身が携わる仕事（飲食店従業員、映画館スタッフ、フィットネス・インストラクター）がそれぞれ題材として選択されており、芥川龍之介の同名作品を元にした2013年の『羅生門』でさえ、出演者の一人が外国人であるという事実が作品の重要なポイントとなっていた。現実の対象に取材し、それを作品の形で提示しているという点において、村川の演劇作品は正しくドキュメンタリーとしてある。

ところで、演劇でドキュメンタリー作品を作ることは常にある種の困難が伴う。現実の人物を舞台上に上げることはできても、現実の出来事をそのまま舞台上に上げることはできないからである。ドキュメンタリー映画であれば、現実の出来事の記録を無限に繰り返して上映することができる。だが言うまでもなく、演劇においてそれは不可能だ。舞台上での出来事が現実の出来事に取材したものであったとしても、それは現実の出来事の再現に過ぎず、現実の出来事それ自体ではあり得ない。その意味で、舞台上に提示されるのは常に嘘＝フィクションなのである。

演劇は現実と虚構の二つの層によって構成されている。多くの観客が舞台上に立つ俳優をその演じる役の人物そのものとして見るように、「実際にそこにあるモノ（＝現実）を別のモノ（＝虚構）として見る」というのが演劇を成立させる基本原理だ。上演されるのが純然たるフィクションではなく、ドキュメンタリーであったとしても変わりはない。村川は上演の中でそのような演劇の原理＝二重性を提示してみせる。

たとえば『ツァイトゲバー』では、観客は舞台上に障害者介助の再現を見るが、現実社会においては、障害者（介助）の様子を仔細に眺めることは一般的に言って不躰な行為である。『ツァイトゲバー』の観客が舞台上の介助行為を「安心して」見ることが可能なのは、それがフィクションであるというエクスキューズがあるからなのだ。同時に、フィクションは現実に対する目隠しとしても機能している。『ツァイトゲバー』において被介助者である男性の役は、協力を要請された観客の女性の一人によって演じられる。このとき、介助行為の再現によって生じる、見知らぬ男女間における肉体的な接触という通常ならば「不適切な」現実の出来事は、介助行為というフィクションを纏うことで看過されることになる。上演によって立ち上がるフィクションは観客に対し特権的に「見る」権利を与え、同時に舞台上で起きる出来事に対して行動を起こす義務を免除する。舞台上で起こる出来事はフィクションであり、ゆえに観客は高見の見物を決め込むことが許されるのである。村川はこのような演劇の原理をことさらに曝け出すことによって、観客の認識の枠組みに揺さぶりをかける。上演によって演劇の原理そのものを曝け出してみせるという点で、村川の演劇作品は演劇それ自体のドキュメンタリーでもあるのだ。

今回の新作は昨年上演された『エヴェレットラインズ』をさらに展開したものだという。前作では出演者の現実に依拠しない、新しい形での演劇のドキュメンタリーが模索されていた。演劇とは何か。上演の場で何が起きているのか。村川の思考／試行はいつもその場で起こる出来事へと向けられている。「ドキュメンタリー」とはその視線の謂いに他ならないだろう。

山崎健太

演劇研究・批評。早稲田大学文学研究科表象・メディア論コース博士後期課程。SFマガジン（早川書房）にて「現代日本演劇のSF的諸相」連載中。

## Documentary Theater, or Theater Documentary

Kenta Yamazaki

Takuya Murakawa's theater works are documentary in a double sense of the word.

Recently the subjects of many of Murakawa's theater works have been the performers themselves. In his *Zeitgeber*, which attracted attention at the 2011 Festival/Tokyo Emerging Artists Program, he cast an actual care-worker who then re-enacted the process of assisting the disabled on stage. 2012's *words* chose the experience of the performers in the Tohoku disaster zones as its subject, while 2013's *Gareki* (Rubble) was about the jobs the cast did, working in a restaurant and cinema, and as a fitness instructor. Even *Rashomon* in 2013, based as it was on the masterpiece by Ryunosuke Akutagawa, used the fact that one of the performers was foreign as a significant part of the work. In the sense that his work reports on real-life subjects and then presents these in the form of an artwork, Murakawa's theater works are genuinely documentary.

Incidentally, making a documentary work in theater is always fraught with a certain danger. Even if you are able to put real-life persons on stage, you are not able to put actual events just as they happened. With documentary cinema, you are able to continue screening a record of actual events forever. Needless to say, this is not possible with theater. Even if what happens on the stage is something reporting on real-like events, it will only ever be a mere re-enactment of actual events and can never be real-world events themselves. In that sense, what is presented on stage is always fictional.

Theater consists of dual layers of reality and fiction. In the way that audiences see the actors on the stage as the actual people they are playing, seeing something that is actually there (reality) as something else (fiction) is the founding principle of theater. And this remains unchanged even if what is being performed is not purely fictional but documentary in nature. During his performances Murakawa is presenting the duality of this theatrical principle.

For example, in *Zeitgeber*, the audience watches an on-stage re-enactment of caring for the disabled, but viewing (care for) the disabled in detail in the real world is generally considered discourteous. The audience in *Zeitgeber* is able to watch "with an easy mind" the act of care work on the stage because they have justification: it is fictional. At the same time, fiction functions as a blindfold to reality. The role of the male cared for by the helper in *Zeitgeber* is played by a female member of the audience, who is requested to take part at the start of the performance. The male-female physical contact from an unknown party, arising in the re-enactment of the care work, would ordinarily be considered "inappropriate" in reality but here becomes permissible through being draped in the fiction of the act of giving someone assistance and care. The fiction that arises through the performance gives the audience the privileged right to "watch" and simultaneously absolves them from the responsibility to act on what is happening on stage. These events are fictional, therefore the audience are allowed to watch and not get involved. By exposing the principle of theater in this way, Murakawa is shaking up the framework of the audience's understanding. And in this exposing of the very principle of theater through the performance Murakawa's theater is making theater itself into a documentary.

This new work for 2014 further develops last year's *Everett Lines*. That work was a search for a new form of theater documentary, one not dependent on the performers' realities. What is theater? What is happening during the performance? Murakawa's ideas and experiments are always directed towards the events that take place there. The "documentary" is nothing less than this perspective itself.

Kenta Yamazaki

Theater researcher and critic. He is currently completing a Ph.D. in representation and media theory at the Faculty of Letters, Arts and Sciences Department at Waseda University. He writes a column on science fiction aspects of contemporary Japanese theater in SF Magazine (Hayakawa Publishing).

# ルイス・ガレー

## Luis Garay

BUENOS AIRES



photo: Leandro Da Silva

## マネリエス | メンタルアクティビティ

Maneries | Mental Activity

マネリエス *Maneries*

🕒 70min (日本初演 / Japan Premiere)

📅 10/4 (Sat) 16:00-  
10/5 (Sun) 19:00-

メンタルアクティビティ *Mental Activity*

🕒 45min (日本初演 / Japan Premiere)

📅 10/9 (Thu) 20:00-  
10/10 (Fri) 20:00-  
10/11 (Sat) 13:00-

📄 ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

関連イベント: ルイス・ガレー ダンスワークショップ  
Related Event: Dance Workshop by Luis Garay →p.64

### 肉体と思考がせめぎ合う、濃密なる舞台 アルゼンチンの新鋭コレオグラファーに世界の眼が注がれる

**A confrontation of body and mind  
by an acclaimed new talent from Argentina**

ブエノスアイレスを拠点に活動する、コロンビア人コレオグラファー、ルイス・ガレー。彼の知的スリルに満ちた2作品を初来日にして連続上演する。『マネリエス』は、世界中の数々の都市で上演され、多くの観客を驚嘆させた話題のソロ作品。彼はダンサー、フロレンシア・ベシーノに、あえて精緻で厳格な振付を与え、彼女はそのスキルを余すところなく発揮し、限界ギリギリで応答する。表題『マネリエス (Maneries)』は、イタリア政治哲学の旗手ジョルジョ・アガンベン著『到来する共同体』の一節から採られている。躍動する肉体と先鋭的なコンセプトとの相克の中で、じりじりと舞台は進んでいく。

一方グループ作品『メンタルアクティビティ』は、「科学とは純粋な詩であり、逆に精神のはたらきは極めて物質的なものだ」という自身の仮説を舞台上で実証する意欲作。雑然とした空間に散りばめられたガジェット、それらと関係するダンサーたち。儀礼性と狂乱状態が渾然一体となった場で、知性の真の形態を探索する試みの行方は？ 才知あふれる南米の豪腕コレオグラファーの実力を目撃せよ。

Buenos Aires-based Colombian choreographer Luis Garay introduces two intellectually stirring performances for the first time in Japan. Intentionally giving an extremely rigorous choreography to the performer Florencia Vecino, Garay's solo work *Maneries* has dazzled audiences around the world for its exploration of testing the limits of one's formal capacities. The title *Maneries* comes from *The Coming Community* by Giorgio Agamben, a famous Italian philosopher. An accelerating body tries to embody a radical concept. The performance follows the trajectory of their entanglement. On the other hand, *Mental Activity* illustrates Garay's own hypothesis that "science is a pure poetry and, on the contrary, ritual is quite materialistic" on stage. Performers interact with the gadgets scattered on the stage. Is what awaits us after this exploration a real form of intelligence? The work of a brilliant mind from South America.

マネリエス *Maneries*

📍 京都芸術センター  
フリースペース  
Kyoto Art Center Multi-purpose Hall

🕒 16歳未満入場不可  
Suitable for 16 years older

メンタルアクティビティ  
*Mental Activity*

📍 京都芸術センター 講堂  
Kyoto Art Center Auditorium

『マネリエス』  
演出: ルイス・ガレー  
出演: フロレンシア・ベシーノ  
ライブミュージシャン: マウロ・パンジッロ  
照明デザイン: エドアルド・マジオーロ  
共同製作: Internationale Musikfesttage Martinu  
B. CH. Subsidy of Prodanza  
助成: Porto a Solo (ポルトガル)

『メンタルアクティビティ』  
演出: ルイス・ガレー  
出演: イヴァン・ハイダー、マルシア・レチシア・ラ  
メラ・アド、フロレンシア・ベシーノ、ブルーノ・ディア  
ス・モレノ  
制作協力: ディエゴ・ピアンチ、ルシアノ・アッチゴ  
ッティ、ヴァニナ・スコラヴィーノ  
照明: エドアルド・マジオーロ  
アーカイブ: テディー・ウィリアムス  
制作助手: ジュリアン・ソーター  
共同製作: FIBA, the International Festival of Bue-  
nos Aires, Nerinium Foundation, Basel, Switzer-  
land and CHELA  
助成: the International Art Show SESC, Sao Paulo  
Br.Con Prodanza support

主催: KYOTO EXPERIMENT

*Maneries*  
Direction: Luis Garay  
Performer: Florencia Vecino  
Live musician: Mauro Panzillo  
Lighting design: Eduardo Maggiolo  
Co-production: Internationale Musikfesttage  
Martinu B. CH. Subsidy of Prodanza  
With the support of: Porto a Solo (Portugal)  
*Maneries* took part of: Madrid Autumn Festival,  
Ballhaus Naunynstrasse (Berlin), Panorama Fes-  
tival (Rio de Janeiro), Queens Theatre in the Park  
(New York), FID - Fórum Internacional de Dança  
(Belo Horizonte, Brazil), Bienal Internacional de  
Dança do Ceará (Brazil), Festival Internacional de  
Recife, Bienal Internacional de Cochabamba (Bo-  
livia), Bienal SESC de Dança (São Paulo, Brazil),  
Fábrica de Movimentos (Porto, Portugal)

*Mental Activity*  
Direction: Luis Garay  
Performers: Ivan Haidar, Marcia Leticia Lamela  
Ado, Florencia Vecino and Bruno Dias Moreno  
Artistic collaboration: Diego Bianchi, Luciano  
Azzigotti and Vanina Scolavino  
Lighting: Eduardo Maggiolo  
Video Registro Documental Del Proceso: Teddy  
Williams  
Assistant: Julian Sorter  
Co-production: FIBA, the International Festival  
of Buenos Aires, Nerinium Foundation, Basel,  
Switzerland and CHELA  
With the support of: the International Art Show  
SESC, Sao Paulo Br.Con Prodanza support

Presented by: Kyoto Experiment

## レビュー

### 昂揚する裸の身体

新進気鋭の振付家がダンス表現の可能性を追求した本作は、ナラティブに頼ることなく、奇抜な空間で展開する極めて実験的な作品だ。演出を手がけるガレーは作品を「ゼロの位置まで削ぎ落としたかった」と語る。

『マネリエス』は、ブエノスアイレス在住、28歳のコロンビア人振付家ルイス・ガレーの新作。身体表現の可能性を追求した本作では、静止した身体、感知できるかできないかのミニマムな動きから、より複雑な動きへと向かい、人間の身体の多様さをつきつける。音楽(DJによるライブ)や照明、音響効果により、ダンサー(フロレンシア・ベシーノ)のむき出しの身体は観客を魅了する。それは、一次元の物語を語るのではなく、自由でオープンな解釈を希求しているかの様だ。

ダンサーの色の白い繊細で筋肉質な身体は、薄暗い光に照らされ、DJマウロAPがラップトップから奏でるミニマルなサウンドを背景に微動だにしない。10分以上が経過し、観客の目の前で、ベシーノの前腕と手のひらがゆっくりと動き出す。その速度にやきもきさえるが、確実に何かが起きている。手のひらが顔に到達すると、動きは全身へと伝播していく。

すると音楽と照明が一転し、ベシーノの身体は予期せぬ動きや一時停止を繰り返しながら、多様な展開を繰り広げる。反復し、加速し、または驚くほどゆっくりと、スイス時計のように、はたまた陸上競技のアスリートの様に正確な動きが連続する。ある種機械的でさえある身体とその記号性は、ダンサーの息づかいを帯びることで突如として新たなフォルムを獲得する。一糸まとわぬダンサーは、真っ白で直線的、曲線的、アスレチック、ロボティック、時として喜劇的で動物的な動きを提示する。

衣装をまとわずにここまで激しく動くのはさぞかし大変だろうと思いきや、「そんなことはない。最も大変なのは冒頭部分。ミリ単位で腕を動かさないといけないので、全神経を集中する必要がある。」とベシーノは言う。

ガレーは、「極限までミニマムさを追求したかった。すべてをゼロの位置まで削ぎ落とすことで、ほんの少しの動きが重要な意味を帯びるように。いったんできるだけ情報を少なくし、そこから徐々に積み上げていく」のだと語る。つまり、冒頭の静寂は単なる観客への挑発ではなく、人間の身体史を顧みる試みということになる。ガレー曰く「ダンサーの身体はグ・ヴィンチが求めた完璧な左右対称、ヴィーナスの身体美、機械化した身体、ロマン主義的な身体観、60年代の広告的な身体といった様々な身体のあり様を1時間20分で走り抜ける。それらを参照することは、即興を後押ししてくれる」そうだ。フォルム、時間、ダンサー、DJ、照明といった作品を構成する要素は、それぞれに独立しつつリンクしている。約7ヶ月の稽古期間を経てチューリッヒで初演を迎えた後(本作はスイスとの共同制作)、ドイツ、ポルトガルでの公演を経て、いよいよブエノスアイレスに上陸。作品タイトルとなる「マネリエス」は、イタリア人哲学者ジョルジョ・アガンベン著書より引用された、原形や源となるものを意味する言葉である。ガレーは、本作品のダンサーを増やしたバージョンへの制作意欲もみせている。

カロリーナ・プリエト「昂揚する裸の身体」(Página / 12 紙、ブエノスアイレス、2009年6月2日付)より抜粋

## Review

### An exaltation of the naked body

This is the work of a young choreographer exploring the expressive possibilities of movement and assembly, and experimenting with unconventional spaces without resorting to the linear narrative. "We wanted to reduce it to zero degrees," says choreographer Luis Garay.

*Maneries* is the latest work by Garay, a 28-year-old Colombian choreographer resident of Buenos Aires, Argentina. He explores the expressive possibilities of the human body and confronts the audiences with its diversity: from the still body or the very simple and imperceptible movements to more complex motions. Along with the music (by a live DJ), and lighting and sound effects, the naked body of the stunning dancer (Florencia Vecino) mesmerizes the viewer. Far from pursuing a linear narrative, *Maneries* yearns for a free and open interpretation.

The delicate yet muscular and very fair-skinned dancer, lit by the dim light, remains almost still against the minimal background of music playing from DJ Mauro AP's laptop. After ten minutes her forearms and hands slowly begin to move. The speed makes us anxious but something is definitely happening. When the palms of her hands reach her face the movement is transmitted to the whole body.

The music and lighting suddenly change, and her body repeats a series of unexpected movements and temporary pauses, unfurling a diverse development. A sequence of movements – reprising, accelerating, or slowing down to an astonishing extent – is executed with the accuracy of a Swiss watch or as if she were a track athlete. Her body perspires and breathes with difficulty, creating an almost mechanical codification that suddenly acquires a new form. The stark naked dancer expresses stark white, rectilinear, curving, robotic, at times animalistic shapes that often border on the comic.

To move so violently like this while naked must be uncomfortable. "Not at all," says the dancer. "The hardest part is the beginning. As I move my arms a millimeter at a time I have to focus every nerve of my body."

Garay, meanwhile, says: "We wanted to take things right to the minimum. Reduce everything to zero degrees so that the very slightest of movements had significance. We reduced the information as much as we could and from there gradually built things up." Garay agrees that the opening was not meant as a provocation. It was a necessary investigation into certain forms the human body has adopted throughout history. "The body of the dancer races through various forms of the body: from the symmetrical perfection of Leonardo da Vinci, the Venus, the machine-man, the ideas of the body during Romanticism, and the body in the advertising of the 1960's." "They are used as a set of references to encourage improvisation," says Garay. Each element that composes the work, from the form to time, the dancer, the DJ and lighting, is independent but well connected. Following around seven months of rehearsal, the work premiered in Zurich (it is a Swiss co-production) and comes to Buenos Aires after performances in Germany and Portugal. The title is taken from the work of Italian philosopher Giorgio Agamben, referring to a type of water spring or source. Garay would like to create a new version of the work with more dancers.

Excerpt from Carolina Prieto, "An exaltation of the naked body" in Página/12 (Buenos Aires, June 2, 2009)



# She She Pop

BERLIN



photo: Doro Tuch

## 春の祭典 — She She Popとその母親たちによる

*THE RITE OF SPRING* as performed by She She Pop and their mothers

🕒 90min (新作 | 日本初演 / New Creation | Japan Premiere)

1 10/4 (Sat) 19:00-  
10/5 (Sun) 14:00-📍

📍 ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

📌 ドイツ語  
(日本語・英語字幕あり)  
Performed in German  
with Japanese and English  
subtitles

「春の祭典」を母と踊る?!

儀式性の中で、現代の女性の姿をアクチュアルに描き出す

*The Rite of Spring* as you've never seen it in this portrayal of female sacrifice today

演出家、脚本家、俳優といった役割をあえておかず、創作は常にメンバー共同で行うユニークなスタイルの女性アーティスト集団、She She Pop。昨年のKYOTO EXPERIMENTでは、手紙、日記、写真などを無造作に取り出し、個人の記憶を紐解きながら、互いの揺れ動く関係性、心情を露わにしていく作品『シュブラーデン(引き出し)』を上演。そこには、激動する20世紀後半のベルリンの政治状況が刻印され、壁の両側で生まれた女性たちの生き様と大文字の歴史が巧みに浮かび上がり、前評判に違わぬ興奮があった。

ストラヴィンスキーの傑作バレエ音楽「春の祭典(原題: La Sacre du Printemps)」に想を得た本作。その音楽に流れる野性的で強烈なリズムを通奏低音に、She She Popとその母親たちが、家族や社会における女性の存在を描き出す。本作のクリエイションのため昨年京都に滞在していた間には日本の神話や家族社会学における女性の自己犠牲について取材、さらに日本の女性たちへインタビューを行った。男女の間そして母と娘の間でしばしば生じる自己犠牲にまつわる現実の問題に、この音楽の主題である神への捧げものとしての「犠牲」といった宗教的な領域を重ね合わせ、She She Popが入り組んだ素材を絶妙にまとめ上げる。

She She Pop is a female performance collective. They have a specific aesthetic and ideological profile. There is no director, and also no author or actors. Texts and concepts are developed collectively. Last year, they introduced *Drawers* (Schubladen) at Kyoto Experiment 2013, in which performers search their memories from letters, journals and photographs in drawers. They gradually reveal their vulnerable relationships and emotions, which are overlapped with by the turbulent political history of late 20th-century Berlin. The work tactfully looks at European history through the lives of women on both sides of the Berlin Wall. This time they are staging their version of *The Rite of Spring* (La Sacre du Printemps), Stravinsky's masterpiece. Against the wild and intense rhythm of a basso continuo, She She Pop and their own mothers focus on the subject of female sacrifice in the family and in society. The company stayed in Kyoto for an artist's residency to research and create this work last year. They looked into Japanese myths about the notion of self-sacrifice in family sociology as well as interviewing Japanese women. She She Pop consciously superimpose the religious sphere of ritual human sacrifice from *The Rite of Spring* with the ethical question of personal self-denial between women and men, as well as between mothers and daughters.



京都府立府民ホール“アルティ”  
Kyoto Prefectural Citizens' Hall ALTI

コンセプト: She She Pop  
クリエイションメンバー: コーネリア&ゼバスティアン・パーク、ハイク&ヨハンナ・フライブルク、ファニ・ハムブルガー、リーザ・ルカセン、ミーケ・マツケ、イレネ&イリア・パパテオドル、ハイディ&ペーリット・シュトゥンプフ、ニーナ・テックレンブルク  
映像: ベンヤミン・クリーグ  
美術: ザンドラ・フォックス  
衣裳: レア・シュブシュ  
音楽協力: ダミアン・レブゲツ  
振付協力: ジル・エマーソン  
アシスタント・ドラマトルク協力: ヴェロニカ・シュタインガー  
照明デザイン・テクニカルディレクター: スヴェン・ニヒターライン  
照明: アンドレアス・クレーアー  
音響: フロリアン・フィッシャー  
グラフィック・デザイン: トビアス・トロースト  
映像アシスタント: アナ・ツェット  
トレーナー: マリアナ・セネ・ドス・サントス  
制作/広報: ehrliche arbeit・freelance office for culture  
カンパニーマネージャー: エルケ・ヴェーバー  
英語字幕制作: KITA  
日本語字幕翻訳: 古後奈緒子  
製作: She She Pop  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT, HAU Hebbel am Ufer, FFT Düsseldorf, Tanzhaus NRW, Künstlerhaus Mousonturm, Kaserne Basel, brut Vienna, German Language Theater Festival of Prague, Archa Theater Prague, Théâtre de la Ville/Festival d'Automne à Paris  
京都芸術センター×KYOTO EXPERIMENTアーティスト・イン・レジデンスプログラム  
特別協力: ドイツ文化センター  
助成: ベルリン州政府文化局、ベルリン首都文化基金  
共催: 京都府立府民ホール“アルティ”  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Concept: She She Pop  
By and with: Cornelia and Sebastian Park, Heike and Johanna Freiburg, Fanni Halm-burger, Lisa Lucassen, Mieke Matzke, Irene and Ilija Papatheodorou, Heidi and Berit Stumpf, Nina Tecklenburg  
Video: Benjamin Krieg  
Set: Sandra Fox  
Costumes: Lea Søvsø  
Musical collaboration: Damian Rebgetz  
Choreographic collaboration: Jill Emerson  
Assistant and Dramaturgical collaboration: Veronika Steininger  
Light design and Technical direction: Sven Nichterlein  
Light: Andreas Kröher  
Sound: Florian Fischer  
Graphic design: Tobias Trost  
Video assistant: Anna Zett  
Trainee: Mariana Senne dos Santos  
Production/PR: ehrliche arbeit・freies Kulturbüro  
Company management: Elke Weber  
Surtitles: KITA  
Japanese subtitles: Naoko Kogo  
A She She Pop Production  
In co-production with: Kyoto Experiment, HAU Hebbel am Ufer, FFT Düsseldorf, Tanzhaus NRW, Künstlerhaus Mousonturm, Kaserne Basel, brut Vienna, German Language Theater Festival of Prague, Archa Theater Prague, Théâtre de la Ville/Festival d'Automne à Paris  
Residency funded by: Kyoto Art Center, Kyoto Experiment and the Goethe-Institut  
Funded by: the City of Berlin-Department for Cultural Affairs and the Hauptstadtkulturfonds Berlin  
Co-presented by: Kyoto Prefectural Citizens' Hall "ALTI"  
Presented by: Kyoto Experiment

## She She Pop 『春の祭典—— She She Popとその母親たちによる』

中島那奈子

いま、日本における既成のジェンダー構築が、問い直されています。日本の社会は、近代化以後も第二次大戦後も、家という単位を壊すこと無く社会変革がなされ、それが政策や精神文化全体に対して大きな影響力を保持しています。その一方で昨今は、都議会を始め公の場において、時代に逆行するような女性差別発言が相次いでいます。いま日本の少子高齢化を進めているのは、実はこういったジェンダー構築を巡る既成の思い込みであり、そのような偏見を取り除き、性別や性向に関係なく社会にアクセスできる開かれた環境を整えることが、求められているのです。

1998年にギーセン大学応用演劇学科を卒業した女性たちを中心に結成されたShe She Popは、ベルリンを拠点に、集団創作や観客参加という手法をとりながら、実験的な作品を第一線で作り続けているパフォーマンス集団です。2010年の作品『Testament (遺言／誓約)』では、メンバーとその父親との関係をシェイクスピアのリア王に引きつけて作品化しましたが、今回はメンバーとその母親との関係を、「春の祭典」の構成にそって作品化しています。デアギレフのパレエリュスによって1913年に初演されたストラヴィンスキー作曲の「春の祭典」は、ピナ・バウシュのタンツテアターをはじめ多くのジャンルで名作を生んでいますが、一貫するその作品のテーマは「犠牲」と「再生」です。She She Popはここで、母と子の関係を、社会と家族における犠牲の主体という視点から、批判的ながらもユーモアを交えたメディアパフォーマンスへと仕立てていきます。

一つの世代が次の世代に遺産を渡し、集団の為に個人が犠牲になるという「春の祭典」のテーマは、女性が母となり子供を自らの身体で再生すること、また国家や家族の名の下に、女性が社会的に責任のある役割から追放されることと重なります。一国の首相を女性が務めるドイツでも、作品内で語られているように、子供や夫の為に女性が仕事や趣味を諦めるといった選択を、どう考えるべきか議論が続いています。映像の中に登場する母のうちの1人は、犠牲という言葉自体が理解できず、舞台上で子供に問いただされます。

母という役割も個人の自由において選択されるものであり、女性だけの責任でも、家族や社会に強制されることでもないのです。また、舞台上で子供たちは母親にコントロールされたことを告白し、母親との依存関係や家族の愛情が、時に個人に対する大きな暴力となる瞬間をも暴き出します。She She Popは、日本の神話や儀式での女性の犠牲の表象、社会での女性の役割について京都でリサーチを行いました。ただそれが作品に具体的には現れていないことこそ、みずからのおかれている状況へと本人たちの意識が逆照射されたことを証明するかのようです。

みずからの状況や作品に対して、一定の批判的距離をもつことは、私たちが何故その対象についてそう「感じる」のか、その感じ方の、政治的な成り立ちについて、もう一度考えてみることです。今回She She Popの『春の祭典—— She She Popとその母親たちによる』を、京都でのみ上演することにも、私は一つの大きな示唆があるように考えています。内向きになっている日本の現在の状況を、首都東京から距離をおいた京都で、作品を通して眺めてみることで、そうすることでこの国で起きている問題を、批判的距離を持って考えることが出来るかもしれない——独立した各州が劇場文化をもってお互いを批判し合う連邦共和国ドイツにおいて、フェミニストであることを公言するShe She Popも、そのようにこの『春の祭典—— She She Popとその母親たちによる』を眺めて見ることを、私たちに望んでいるように感じるからなのです。

中島那奈子

ダンス研究、ダンスドラマトゥルク。日本舞踊宗家藤間流師範名執藤間勸那恵。ベルリン自由大学演劇舞踊学研究所にて、博士号(哲学)取得。ドラマトゥルクとしては、Luciana Achugar『Exhausting Love at Danspace Project』(ニューヨーク・ベッシー賞受賞)、砂連尾理『劇団テイクパ+循環プロジェクト』などがある。2012年にベルリン、2014年に東京で国際ダンスシンポジウム「老いと踊り」を企画・開催。現在、ベルリン自由大学国際リサーチセンター、インターウィービング・パフォーマンス・カルチャーズフェロー。

## She She Pop's *THE RITE OF SPRING* as performed by She She Pop and their mothers

Nanako Nakajima

In Japan today the existing gender constructions are being questioned. Japanese society experienced social change following both modernization and the Second World War without the family unit being torn down, which maintains a large influence over politics, spirituality, and culture in general. On the other hand, as we recently saw in such public a place as the Tokyo Metropolitan Assembly, sexist remarks discriminatory toward women continue to appear. Free from prejudice, Japanese society, with its increasingly declining birth rate and aging population caused by these preconceptions about gender construction, is requested to create an open environment for people with any gender identity and sexual orientation.

Based in Berlin, She She Pop is formed mostly of women who graduated from the Applied Theater Studies program in Gießen in 1998, and has proved itself a performance group at the forefront of experimental work today, developing their productions as a collective and including audience participation. In its 2010 work *Testament*, She She Pop adapted Shakespeare's *King Lear* to the members' relationship with their own fathers, and for this work they are applying their relationships with their mothers to the structure of *The Rite of Spring* (Le Sacre du Printemps). Igor Stravinsky's composition of *The Rite of Spring* was premiered in 1913 for Sergei Diaghilev's Ballets Russes, and has since produced many masterpieces across different genres, including Pina Bausch's Tanztheater. The consistent theme of this piece in all the various interpretations is sacrifice and restoration. She She Pop here turn to the relationship between mother and child from the perspectives of sacrifice in society and the family, creating a media performance both critical and humorous.

The theme of *The Rite of Spring* – one generation passing on its legacy to the next, the individual making a sacrifice for the group – is superimposed with how women become mothers and reproduce children through their own bodies, and how, under the name of the state and the family, women are barred from roles with social responsibility. As we hear in the course of the work, even in a nation like Germany where the political leader is female, the debate continues over whether women should give up their jobs or hobbies for the sake of their children and

husbands. One of the mothers who appears in video footage is unable even to understand the word “sacrifice” and is interrogated by her daughter on stage. The role of motherhood is also a choice of individual liberty, not the responsibility just of the female or something enforced by the family or society. The children on the stage confess to having been controlled by their mothers, exposing moments when dependence on your mother and feelings of family can at times be very violent toward the individual.

She She Pop has spent time in Kyoto researching representations of female sacrifice in Japanese mythology and rituals, as well as the role of women in society. And yet precisely because this is not concretely visible in the work attests to how the consciousness of the performers reflects back onto their own circumstances.

Having a certain critical distance from/to our own circumstances or an artwork means to consider again why we “feel” like this toward it and the political construction of the way we feel. I also think the fact that this Japanese production of She She Pop's *THE RITE OF SPRING* as performed by She She Pop and their mothers is going to be staged only in Kyoto has a large implication for us. By gazing at the current situation in inward-looking Japan in Kyoto, away from the capital of Tokyo, through this work we may likely be able to consider the problems happening today in Japan with critical distance. In the Federal Republic of Germany, with its theatre cultures in each independent state jostling and criticizing each other, the self-professed feminists She She Pop seem to be hoping for us to view *THE RITE OF SPRING* as performed by She She Pop and their mothers in this way.

Nanako Nakajima

Dance researcher and dance dramaturg. A certified traditional Japanese dance master. She received her Ph.D. from Freie Universität Berlin. As a dramaturg her work includes Luciana Achugar's *Exhausting Love at Danspace Project* (New York Dance and Performance Award) and Osamu Jareo's *Thikwa + Junkan Project*. She curated and organized international dance symposia entitled “The Aging Body in Dance” in Berlin in 2012 and Tokyo in 2014. Currently she is a fellow at the International Research Center “Interweaving Performance Cultures” (Freie Universität Berlin).

# 木ノ下歌舞伎 Kinoshita-Kabuki

KYOTO



photo: Ryoichiro Suzuki

## 三人吉三

Sanninkichisa

🕒 4h 30min (休憩含む / with intervals)

🆕 新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere

📅 10/11 (Sat) 16:00-🗄

10/12 (Sun) 13:00-🗄

🗣 日本語

Performed in Japanese

🗣️ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

変貌する時代の足音を聞きながら  
運命と強大な社会の中で抗う人々——  
木ノ下歌舞伎が同時代に問う群像グラフィティ

**Kinoshita-Kabuki's modern re-telling of three men who resist fate and the might of society on the cusp of a new era**

京都を拠点に、歌舞伎の演目を現代の視点で捉え直してきた木ノ下歌舞伎。主宰・木ノ下裕一の指針に基づいて、演目ごとにさまざまな演出家を起用し上演を重ねている。昨年のKYOTO EXPERIMENTでは、架空の「木ノ下歌舞伎ミュージアム」を開館し、開館式典の祝賀の舞として狂言『三番三』と木ノ下歌舞伎『三番叟』を同時上演。形式的な日本の式典そのものをパロディにしながら、演目の持つ祝祭感覚を現代によみがえらせた。

そして今回、近代歌舞伎の基礎をつくった大劇作家・河竹黙阿弥に満を持して挑む。選ばれた演目は、リズムカルで詩情豊かな七五調の台詞や、華やかな様式美など、まさに歌舞伎の魅力が詰まった『三人吉三』。木ノ下歌舞伎版『三人吉三』は、同じ吉三郎という名を持つアウトロー三人の、単なる不遇な物語にとどまらない。近年の上演形式ではカットされる、3人を取りまく2つのコミュニティの物語を復活させ、複雑に絡み合った人間ドラマと戯曲が内包する同時代性に迫る。演出は、昨年の『三番叟』をはじめ数々の木ノ下歌舞伎作品を手がけてきた杉原邦生。木ノ下の綿密な調査と戯曲の丹念な読み込みが『三人吉三』を新たに見出し、批評性と祝祭性を兼ね備えた杉原の手腕が鮮やかに空間化する。黙阿弥を、歌舞伎を、ひいては日本の現代演劇の源流を改めて問いなす。

Kinoshita-Kabuki, a Kyoto-based company, seeks a new understanding of Kabuki. The company collaborates and produces work with different directors under the supervision of Yuichi Kinoshita. For this year, Kinoshita-Kabuki takes on the challenge of the work of Kawatake Mokuami, the great playwright who formed the foundation of Kabuki. The play they chose is *Sanninkichisa*, full of Kabuki allure such as rhythmic lines and a dazzling stylistic beauty. Kinoshita's interpretation of *Sanninkichisa* is not merely a sad story of three outlaws who happen to have the same name, Kichisa. Reviving the narrative of the two communities surrounding the three men, which has been edited out in recent Kabuki performances, the piece captures the complex human drama and contemporaneity of the original work. Directed by Kunio Sugihara who also directed last year's *Sambaso*, Kinoshita's in-depth research and reading of the original texts and Sugihara's critical yet festive direction discover anew *Sanninkichisa*, questioning anew Mokuami, Kabuki, and the origin of Japanese contemporary theater.

京都芸術劇場 春秋座  
Kyoto Art Theater Shunjuza

監修・補綴: 木ノ下裕一  
演出・美術: 杉原邦生  
作: 河竹黙阿弥  
出演: 大村わたる、大橋一輝、堀越涼 / 村上誠基、熊川ふみ、藤井咲有里 / 塚越健一、bale、森田真和、緑川史絵、大寺亜矢子、森一生 / 田中祐気、滝沢めぐみ / 武谷公雄  
舞台監督: 大鹿展明  
照明: 中山奈美  
音響: 星野大輔  
衣裳: 藤谷香子  
所作指導: 史(Chika)  
文芸: 関亜弓  
補綴助手: 稲垣貴俊  
演出助手: 岩澤哲野、鈴木美波  
宣伝美術: 外山央  
制作: 本郷麻衣  
製作: 木ノ下歌舞伎  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT  
協力: あやめ十八番、柿喰う客、急な坂スタジオ、キューブ、KUNIO、劇団しようよ、サウンドウィーズ、青年団、台湾岡崎藝術座、DULL-COLORED POP、TEAM▷りびどー大戦争、花組芝居、PAPALUWA、範宙遊泳、FAI FAI (快快)  
助成: 平成26年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業、公益財団法人セゾン文化財団  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Supervision and revisions: Yuichi Kinoshita  
Direction and stage design: Kunio Sugihara  
Text: Kawatake Mokuami  
Cast: Wataru Omura, Kazuki Ohashi, Ryo Horikoshi / Masaki Murakami, Fumi Kumakawa, Sayuri Fujii / Kenichi Tsukagoshi, bale, Masakazu Morita, Fumie Midorikawa, Ayako Otera, Issei Mori / Yuki Tanaka, Megumi Takizawa / Kimio Taketani  
Stage manager: Nobuaki Oshika  
Lighting design: Nami Nakayama  
Sound design: Daisuke Hoshino  
Costumes design: Kyoko Fujitani  
Carriage adviser: Chika  
Literary advisor: Ayumi Seki  
Revisions assistant: Takatoshi Inagaki  
Assistant direction: Tetsuya Iwasawa, Minami Suzuki  
Publicity design: Hiroshi Toyama  
Production coordination: Mai Hongo  
Production: Kinoshita-Kabuki  
Co-production: Kyoto Experiment  
In co-operation with: Ayamejuhachiban, KAKIKUUKYAKU, Steep Slope Studio, cube inc., KUNIO, gkd-444, Soundwheeze, Seinendan, Taiwan Okazaki Art Theatre, DULL-COLORED POP, TEAM▷Libido Daisenso, Hanagumi Shibai, PAPALUWA, HANCHU-YUEI, FAIFAI (快快)  
Supported by: the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2014, The Saison Foundation  
Presented by: Kyoto Experiment

## 「木ノ下歌舞伎」の座標

茂山あきら

1950年代、狂言役者 故茂山七五三(三世千作)、故茂山千之丞が、東京日生劇場のこけら落としとして武智鉄二演出の歌舞伎の舞台に出演しました。それまで、能楽の世界では他のジャンルの人々と舞台上で共演する事は固く禁ぜられていたのです。能楽の世界ではこの事を苦々しく思い、2人を能楽界から追い出すように画策しました。俗に言う「武智歌舞伎事件」です。世論を味方につけて、七五三、千之丞は結局、旧態とした能楽の世界に勝利をおさめたのですが、文字通り新しい芝居「新劇」の世界でも歌舞伎を演じる事はタブーとされていました。つまり古い世界、新しい世界ともに家元制度を由来とする三角形のピラミッド社会で有った訳です。

木ノ下裕一が目指すものは、そういう旧態然とした舞台芸能への鋭い批判に有るのではないのでしょうか。木ノ下歌舞伎の代表作である『三番叟』の中で、彼は本来古典芸能の持っている神格を見事に否定しています。古典の持つ神の裏に見え隠れしている権力者の思考と思索を痛烈に批判し、新しい芸能の指標を描こうとしているように思うのはボク独りではないように思います。

彼のこれからの事、本当の人間のドラマを描く事ではないのでしょうか。しだいにグローバルとなって来た現在、人種、性別、言語、宗教、そういうものを超えた新しいドラマを画策して欲しいものです。『三番叟』を観ていてダンス(舞踊)の部分では成功をおさめているのですから、これからはドラマとして言語劇を新しく塗り替えるのはどうでしょう? それに成功する時、彼の座標は二次元を飛び出し、三次元のドラマになるでしょう。

「立体の座標」を期待します。

旧態然の役者 茂山あきら

茂山あきら

1952年生まれ。本名・晃。二世茂山千之丞の長男。父および祖父三世茂山千作に師事。3歳のとき『以呂波』のシテで初舞台を踏む。1975年『三番三』および『釣狐』、1994年『花子』を披く。2001年より狂言と新作落語のコラボレーション<落言(らくげん)の会>「お米とお豆腐」を結成し、全国津々浦々で活動中。その他オペラや新劇、パフォーマンスなどの企画・構成・演出なども手がけるほか、1981年に欧米の現代劇と日本の古典芸能を融合した「NOHO(能法)劇団」をジョナ・サルズと共に主宰。ベケットの不条理演劇、英語による海外公演も多数。第31回京都府文化賞功労賞受賞。

## The Coordinates of Kinoshita-Kabuki

Akira Shigeyama

In the 1950's two Kyogen actors, the late Shime Shigeyama (Sensaku Shigeyama III) and the late Sennojo Shigeyama, appeared in a Kabuki play directed by Tetsuji Takechi at the *Kokera-otoshi* opening of the Nis-say Theatre in Tokyo. Until then it had been strictly forbidden in the traditional Noh theater world for performers from different fields to perform together. What the two did was scandalous and it succeeded in having them chased out of the Noh world. In common parlance, it is known as the "Takechi Kabuki Incident". But public opinion was in their favor and in the end the pair were able to secure a victory over the old-fashioned Noh world, though it was also taboo to perform Kabuki in Shingeki, which is literally the "new theater". This is because there was a pyramid hierarchy in both the old and new worlds that can be traced back to the lemoto family system in the arts.

What Yuichi Kinoshita is aiming for is surely a sharp censuring of this kind of old-fashioned performing arts world. In *Sambaso*, one of Kinoshita-Kabuki's major productions, he brilliantly denied the godhead possessed intrinsically by the classical performing arts. I am surely not alone in thinking he is caustically criticizing the ideas of authority lurking behind the god of the classics and attempting to portray a new barometer for the arts.

In the future I want him to create a true drama of humanity, to orchestrate a new drama surpassing race, gender, language and religion for our increasingly global present. When I saw *Sambaso* he achieved success with the dance part, so now I wonder if he should next try giving verbal theater a new coating of paint as drama. And when he succeeds at this then his coordinates will surely jump out from the two-dimensional and become a three-dimensional drama.

I look forward to these "3D coordinates".

Akira Shigeyama (an "old-fashioned" actor)

Akira Shigeyama

Born in 1952, he is the eldest son of Sennojo Shigeyama II, and he was apprenticed with his father and grandfather, Sensaku Shigeyama III. He made his stage debut at the age of three in *Iroha*. In 1975 he performed *Sambaso* and *Tsurigitsune*, and then *Hanago* in 1994. In 2001 he formed Rakugen no Kai Okome to Otofu to create collaborations between Kyogen and new Rakugo performances. The group is active all over Japan. In addition to planning, conceiving and directing opera, Shingeki theater and performances, he co-founded with Jonah Salz the Noho Theatre Group, which fused western contemporary theater with Japanese classical performing arts. He has performed many times overseas in English in Beckett's Absurdist plays. He is the recipient of the 31st Kyoto Cultural Services Prize.

contact Gonzo

OSAKA

PERFORMANCE

ザボックス・ナンナン

## xapaxnannan : 私たちの未来のスポーツ

xapaxnannan: Our future sports

🕒 60min (新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere)

📅 10/15 (Wed) 19:00-

関連イベント: 展覧会「《黒い家》の壁」

Related Event: [Exhibition] Wall of the *Black House* →p.64

会場はまさかの巨大スタジアム!

パフォーマンスと、スポーツの狭間で繰り広げられる

〈スペクタクル=見せ物〉

**Part performing arts, part sports,  
a spectacle unfolds at an enormous stadium**

人と人が殴りあい、肉体を衝突させあうスリリングなパフォーマンスで人々を魅了し、いまや現代アートの領域でも活発に活動するcontact Gonzo。舞台作品としては、写真家のホンマタカシを巻きこんだ作品や、パフォーマンスが発する音のみを多チャンネルスピーカーから聞かせる音響作品など、透徹した思考と大胆なチャレンジで、既存の舞台作品の枠組みを悠然と乗り越えてきた。

KYOTO EXPERIMENT初登場となる彼らは、京都サンガF.C.のホームスタジアムとしてもおなじみ、西京極スタジアムを会場に選び新作を発表する。一定のルールという規範のもと、圧倒的な身体性を見せるスポーツ選手のパフォーマンスに、パフォーマンス・アーツへと通じる可能性を見出したというが、果たして収容規模2万人を超える巨大スタジアムでの作品上演は、いかにして成立するのか。当日は、国内外にその名を知られたバンドにせんねんもんだいが生ライブでバックアップする。

古代ローマで生まれたコロッセウムのスペクタクルから、オリンピックの熱狂まで。スタジアムにまつわる数々の記憶を参照しながら、動きそのものが人々を魅了する仕組みを新たに思考する、彼らの試みの行き着く先は!?

contact Gonzo has fascinated people with their fierce body contact performance and expanded their repertoire to include art installations and more. Collaborating with photographer Takashi Honma or presenting work in which only the sound of their performance is played on multichannel speakers as a performance piece, contact Gonzo deliberately jumps across the boundary of "performance" with their penetrating intellect and bold moves. For their first appearance at Kyoto Experiment, the group presents their new work at Nishikyogoku Stadium, the home of Kyoto Sanga F.C.. Inspired by the performance of athletes who exhibit inordinate physicality within certain restrictions or rules, they see a possible link between sports and performing arts. Even so, how are they going to make their show at such an enormous stadium with over 20,000 seats work? Internationally acclaimed band Nisennenmondai will support them with their live music. Ever since ancient Rome's Colosseum to today's Olympics, people have been fascinated by the activities at stadiums. It is their approach to explore why human movement attracts people so. The outcome is still unknown.

📍 西京極スタジアム (西京極総合運動公園陸上競技場兼球技場)  
Nishikyogoku Stadium



雨天決行、荒天の場合は中止。

Continues in case of rain. Canceled in case of storm

構成: contact Gonzo

出演: contact Gonzo、にせんねんもんだい、ほか

音響: 西川文章

製作: contact Gonzo

共同製作: KYOTO EXPERIMENT

助成: 公益財団法人セゾン文化財団

主催: KYOTO EXPERIMENT

Concept: contact Gonzo  
Performer: contact Gonzo, Nisennenmondai and others

Sound: Bunsho Nishikawa

Production: contact Gonzo

Co-production: Kyoto Experiment

Supported by: The Saison Foundation

Presented by: Kyoto Experiment

## 1-7の悪夢から覚醒するために

今福龍太

サッカーの快楽が完膚無きまでに否定され、消滅させられようとしている……。ワールドカップ準決勝、ブラジル対ドイツ。攻め合い、ゲームの機微を繊細に感じとり、即興に遊び、美しいゴールを奪い合うという、豊かな互酬性(reciprocity=互惠性)のリズムはあとかたもなく消え去り、そこにあったのは抽象化された「1点」という数字的優位をひたすらつくり出そうとするだけの、合理主義的ではあれ、味も素っ気もない勝利至上主義の抑圧だけだった。一方のチームが、このような合理的の原則によって完全武装してしまえば、偶然と機知に信をおくチームの自在な身体が目覚める余地はない。むごい結果はある意味では当然だった。

1-7。だが、これをサッカーのありうべきスコアとして認めるわけには断じていかない。このとき、たしかにサッカーの女神は冒涇されたのである。勝利だけを目ざす徹底した合理主義的戦術と、その戦術を背後で支える「スタッツ」(プレーのなかで選手やチームが示す能力データ)という名のテクノロジーの専制君主によって。戦術を実現する精確な駒となって、ひたすら勝利への貢献をなしとげるプレーヤーの存在は、いま完全にテクノロジーの支配下にある。選手たちのスパイクにはICチップが埋めこまれ、彼らの走破距離や最高速度は瞬時に情報化されて、首脳陣のコンピュータへと伝達される。ミサイル追尾の軍事テクノロジーを応用したハイスピードカメラの監視システムによって、ボールの動きも逐一記録されてデータ化される。今回のドイツは、どのチームよりもコンピュータ・プログラムによる試合分析とスタッツを重視し、それをきめ細かい戦術構築に活用した。もしこの傾向が全世界に導入されれば、サッカーの試合とは結局、より有効なデータと戦術プログラムを持ったチームの方が勝つという、味気ない電脳ゲームに還元されてしまうであろう。偶然の女神が追放されたサッカーの未来は、悪夢以外のなにものでもない。

そんな危機的な状況のなかで、いま、contact Gonzoの面々がサッカーのピッチへと歩み出す。規律化され情報化された現代人の身体的抑圧を逆にとりながら、その関節を自由にはずし、脱臼させつつ、身体奔放な自由を奪還しようとするゲリラたちである。開演の厳かなファンファーレなど必要ない。俊敏な小鳥たちは美声で騒ぎたて、これから起こる事を

すでに直感しているからだ。Gonzoの新たな身体思想を賭けるフィールドがサッカー場であったことは、なによりふさわしい。競技スポーツの枠に収まることから叛乱する原初の衝動によって、サッカーこそ、スポーツがもっとも深く華麗な美学=アートへの通路へと接続されていることを証明してきたからである。

1958年スウェーデン大会決勝のペレのシャベウによる幻惑のゴール。1970年メキシコ大会決勝のカルロス・アウベルトのゴールによって奇蹟のように揺れ、躍り出すゴールネット。1986年メキシコ大会のマラドーナのハーフウェーライン手前からの5人抜き、そして「神の手」……。これらの真に記憶すべきプレーは、サッカーにおける偶然性と即興の女神がまさにその場に顕現したことを示す、特別の瞬間にほかならない。合理性を突き詰めることによっては決してたどりつけない、驚くべき技芸(アルス=クンスト)が、スポーツの場にいまも生きていたことをそれは証明した。中南米の密林のなかで悠々の時間を生きてきたゴムの樹の精霊オルクアイトルの弾力と偶然の運動性が、彼らの技芸の源泉だった。

FUTEBOL—それは簡潔に、「足」と「ボール」の自由な関係性の上にうちたてられた美学だ。関節をもったしなる身体と、ゴムの樹の精霊がもつ偶然性と合体の奇蹟。両者は求めあい、愛撫しあい、からまりあい、いだきあう。ときに離反し、別れ、遠くへと去り、なおも互いを見守りあう。即興という名のボールを前に、足は流体のような可塑性にみちあふれた新しい身体へと変容する。それはやわらかな泡でできている。それは煌めく春のアマゾン・デルタ。それは南風に騒ぐハンパミの葉。それは雨後の太陽を映し出す水たまりの微笑。矩形のピッチが揺れ、歪み、白線はカーブを描き、ゴールポストは伸縮する。千人のクラッキたちが千のボールを頭に戴き、王国のカルナヴァルの幕が静かに開く。

今福龍太

文化人類学者、批評家。1955年東京生まれ。1982年よりメキシコ・キューバ・ブラジルにて人類学調査に従事。現在、東京外国語大学大学院教授。2002年より遊動型の野外学舎「奄美自由大学」を主宰。著書に『クレオール主義』(1991、青土社)、『スポーツの汀』(1997、紀伊國屋書店)、『ブラジルのホモ・ルーデンス』(2008、月曜社)、『書物変身譚』(2014、新潮社)など多数。

## Awakening from the 1-7 nightmare

Ryuta Imafuku

It was an attempt to strip football utterly of pleasure, to wipe it out: the semi-finals of the World Cup, Brazil vs. Germany. Jostling back and forth, sensing the intricate subtleties of the game, the impromptu play, the vying for the beautiful goal... This rich rhythm of reciprocity vanished without a trace, leaving only the oppression of the rationalist, the dry supremacy of victory, which tries single-mindedly to extract the numerical superiority of the abstract "1 goal". When one team is so completely armed with this principle of reason, there is no room for the flexible body of the other team, placing its faith in chance and wit, to awaken. In a sense, it was only natural that the results were so brutal.

1-7. And yet we cannot simply see this as a score theoretically possible in football. This time, the Muse of football was blasphemed by the autocrat of technology – the rational tactics aiming flat-out for victory and the "stats" that support these tactics, that is, the performance data for the players or team in the game. The players become accurate pieces for realizing tactics, devotedly carrying out their contribution towards victory. They are now completely under the control of technology. IC chips are embedded in the boots of the players, with the distance they cover on the pitch and their fastest speeds instantaneously converted into data, to be transmitted to the all-powerful computer. The movement of the ball is also recorded as data by the minute, using high-speed camera surveillance systems utilizing military missile tracking technology. More than other team, Germany in particular placed importance on computerized match analysis and statistics, applying these to constructing detailed tactics. If this trend were to be introduced worldwide, a football match would surely ultimately be turned into an anodyne cyber game where the winner is the team with the more effective data and computer program of tactics. The future of this football where the Muse of wit has been banished is nothing short of a nightmare.

Amidst this crisis, contact Gonzo walk out onto the football pitch. Taking advantage of this physical oppression of modern man by discipline and information, these guerrillas dislocate it and attempt to recapture the wonton liberty of the body. No stately fanfare is needed to mark the start of the performance. Agile small birds clamor with beautiful voices because they already sense intuitively what is about to happen. Most of all, it is appropriate that the field where contact Gonzo's new physical philosophy will be laid

down is a former football pitch. It is proof that sport, football above all, connects to that path toward the deepest and showiest aesthetic (that is, art) by primitive impulses revolting against being placed in the frame of competitive sports.

Take Pelé's dazzling *chapéu* (lobbed) goal against Sweden in the World Cup final in 1958. Or the goal by Carlos Alberto during the Mexico World Cup final in 1970 that seemed to fly miraculously into the net and make it dance the Samba. Or Maradona's "hand of god" in 1986, followed by his dash from behind the halfway line and past five rival players to score again. These examples that truly deserve to be memorialized are none other than special moments showing how the gods of chance and improvisation manifest in the game. They demonstrate how the extraordinary craft (*Ars/Kunst*) that can never be reached by a pursuit of rationality is still alive in sports. The source for their artistry is the motility of chance, the elasticity of *olcuahuitl*, the rubber tree spirits that live eternally in the dense jungles of Central and South America.

*Futebol* (foot-ball): put succinctly, it is aesthetics constructed on top of the free relationship between "foot" and "ball". A miraculous coalescence of the body and its joints with the contingency of the spirits of the rubber trees. They entreat each other, caress, entangle, embrace. Sometimes they are estranged, they part, go far away, watch over each other. Before the ball called improvisation, the foot transforms into a new liquid-like body brimming with plasticity. It is made from soft bubbles. It is the sparkling spring Amazon delta. It is the shrub of hazel roaring in the southerly wind. It is the smile of the puddles reflecting sunlight after the rain. The rectangular pitch shakes, distorts. The white lines paint a curve. The goal posts stretch. A thousand *craque* star players crown their heads with a thousand balls, and the curtain quietly rises on the kingdom of the *carnaval*.

Ryuta Imafuku

Cultural anthropologist and critic. Born in Tokyo in 1955, he was raised in Shonan. He has been undergoing anthropological research in Mexico, Cuba and Brazil since 1982. Currently he is a professor at Tokyo University of Foreign Studies, and since 2002 has presided over Amami Jiyu Daigaku, an outdoor nomadic campus in the Amami archipelago. He is the author and translator of many books.

# 悪魔のしるし Akumanoshirushi

YOKOHAMA



© Akumanoshirushi

## わが父、ジャコメッティ

Mon Père, Giacometti

🕒 60-80min (新作 | 関西初演 / New Creation | Kansai Premiere)

📅 10/16 (Thu) 20:00-  
10/17 (Fri) 20:00-  
10/18 (Sat) 14:00-  
10/19 (Sun) 19:00-

🗨️ 日本語(一部フランス語。  
英語字幕あり)  
Japanese (and French) with  
English subtitles

🗨️ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk ゲスト: 福永信 (小説家)

ジャコメッティになりきった画家の父と、  
矢内原伊作になりきった演劇を志す息子との奇妙な演劇的生活…

The peculiar theatrical life of a father convinced  
he is Giacometti and a son pretending to be Isaku Yanaihara

会場にかりうじて搬入できるような巨大構造物をつくり、参加者と協同作業で運び入れる『搬入プロジェクト』は、行為の単純さからは想像もつかないほど、祝祭性に満ちた劇的なプロジェクト。悪魔のしるしの代名詞ともなったこの作品は、すでに国内外で上演されているが、舞台作品においても、彼らは、演劇にまつわる暗黙の了解や構造を撃つ作品を発表し、怖いもの知らずの活動を展開している。主宰の危口統之をはじめ、建築やファッションなど多分野にまたがる専門家たちによる異色のパフォーマンス集団の成せる技と言えるだろう。

新作舞台作品『わが父、ジャコメッティ』は、かつて画家だった父と舞台芸術を仕事とする息子による物語。痴呆が始まった父は、若い頃、熱烈に憧れた芸術家アルベルト・ジャコメッティと自分を混同している。そんな父に息子は日本人学者の矢内原伊作だと誤認され、彼の妄想につきあって、一日中デッサンのモデルとして椅子に座り続けることに。父と息子の奇妙な演劇的生活が始まった…。

危口本人と実際に画家である彼の父の父親が演じるという虚実入り交じった舞台設定からして、すでに悪魔のしるしの世界が始まっている。主宰によるただの自伝的舞台…であるはずもない「わが父」の物語は、はたして荒唐無稽な喜劇なのか、シニカルな悲劇なのか。

Akumanoshirushi's CARRY-IN-PROJECT creates a huge structure that can barely fit into the exhibition space and carries it in with the help of participants. It is an unexpectedly festive and dramatic event despite the simplicity of the act. This signature project has been executed at various venues in Japan as well as overseas. As fearless as CARRY-IN-PROJECT, the company produces a performing arts piece that aims to deconstruct the structure of theater and its unspoken assumptions. The versatility of the company members, some coming from architectural backgrounds and others from fashion, makes such an attempt possible. Akumanoshirushi is a unique artist collective, led by Noriyuki Kiguchi. Their new theater piece *Mon Père, Giacometti* is a story about a father who used to be a painter and his son who works in performing arts. Father, starting to show signs of dementia, confuses himself with Giacometti, a great artist who he admired when he was young, and his son with Isaku Yanaihara, a Japanese scholar. Playing along with his father's delusion, the son ends up posing for the father for a whole day, which is the beginning of their strange theatrical life. The casting, played by Kiguchi and his own father, adds another dimension to the mixture of fiction and reality. Offering more than a simple autobiographical aspect, is it an absurd comedy or cynical tragedy?

京都芸術センター 講堂  
Kyoto Art Center Auditorium



未就学児入場不可。  
Children under school age not admitted

作・演出: 危口統之  
原案: 『ジャコメッティ』『完本 ジャコメッティ手帖』 矢内原伊作 / みすず書房  
出演: 木口敬三、木口統之、大谷ひかる  
映像: 荒木悠  
音楽: 阿部海太郎  
照明: 大島真 (KAAT 神奈川芸術劇場)  
字幕操作: 木口啓子  
舞台監督: 佐藤恵  
グラフィックデザイン: 宮村ヤスヲ  
企画: 悪魔のしるし、KAAT 神奈川芸術劇場  
制作: 悪魔のしるし、岡村滝尾 (オカムラ&カンパニー)、澤藤歩 (KAAT 神奈川芸術劇場)  
製作: 悪魔のしるし  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT、KAAT 神奈川芸術劇場  
助成: 公益財団法人セゾン文化財団、公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Script and direction: Noriyuki Kiguchi  
Original text: *Giacometti and Giacometti Diaries* by Isaku Yanaihara (Misuzu Shobo, Ltd.)  
Cast: Keizo Kiguchi, Noriyuki Kiguchi, Hikaru Otani  
Video: Yu Araki  
Music: Umitaro Abe  
Lighting: Makoto Oshima (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Subtitle operation: Keiko Kiguchi  
Stage management: Megumi Sato  
Graphic design: Yasuwo Miyamura  
Planning: Akumanoshirushi, KAAT Kanagawa Arts Theatre  
Production management: Akumanoshirushi, Takio Okamura (Okamura & Company), Ayumu Sawafuji (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Production: Akumanoshirushi  
Co-production: Kyoto Experiment, KAAT Kanagawa Arts Theatre  
Supported by: The Saison Foundation, Asahi Group Arts Foundation  
Presented by: Kyoto Experiment

## 「悪魔のしるし」を憐れむ宴

樽沼範久

悪魔のしるし主宰の危口統之は、北山恒・西沢立衛・西田司など著名な建築家を輩出する横浜国立大学建設学科を卒業した。ところが、そうした建築家になることも、建設関連の企業に就職することもなく、作業員として建設現場で働いたあと、この悪魔のしるしを立ち上げた。そしてヘヴィメタル風のポスターで人を集める「写生大会」、巨大化したミニマリズム彫刻のように見える物体を建物に搬入したり、通過させたりする『搬入プロジェクト』、演劇を偽装した演劇である「演劇的演劇」、誰でも参加できる非公開ミーティングと称する宴会などを(今のところ)続けている。横浜界隈の若手建築家たちのあいだで、危口統之は「リーサルウェポン」と呼ばれているらしい。本名の木口を悪魔のしるしでは危口と改名しているところが、まず危ない。建築理論家コーリン・ロウを擁するコーネル大学で建築を学んだものの、建築家になることもなく、レストランを共同運営したり、住居をチェーンソーで切断したり、ビルの壁を大きくハンマーなどでくりぬいたりしたゴードン・マッククラークの系譜に危口統之は位置する。ともに破壊的に見えて、その活動は非常に原理的であり、見通しのよい構築をしている。

悪魔のしるしを知ったのは『搬入プロジェクト』だったが、現場で見たのは『倒木図鑑』(2012、KAAT 神奈川芸術劇場)が最初だった。KAATの建物から演出家＝危口が落下して死亡という設定で演劇は始まる。演出家・脚本の死と役者・観客の誕生をめぐる演劇、あるいは演劇を作ることの不可能性をめぐる演劇という、賞味期限が切れているようなメタ演劇の図式。空振りに終わる危険が高いなか、あえて『倒木図鑑』はメタ演劇を偽装しつつ、恥ずかしいことにならずに、どれだけの時間、劇場での場を成立させられるかという綱渡りを行った。以来、悪魔のしるしを自分の講義で取り上げたくなり、危口氏本人をゲストに呼ぶという解決策を除けば、文脈を捏造しては3回この欲求を実現させている。

アルヴィン・ルシエ《I am Sitting in a Room》と『搬入プロジェクト』を並べ、建築空間の拡張された使用法を考察する講義。『搬入プロジェクト』とウィリアム・フォーサイズ演出のダンスを並べ、予期できるものと予期できないものの共存を観察する講義。観客を上流・中流・下流に分割しつつ、いざさかおぞましい場を分有する『注文の夥しい料理店』を『搬入プロジェクト』とともに、融和的／敵対的な関係性を創出する「関係性の美学」(ニコラ・ブリオー)として導入する講義。

そして今回、京都の宴で『わが父、ジャコメッティ』が上演される。もっとも六月の試演会＋公開ミーティングで、実父の画家・木口敬三を舞台に上げてしまうという危口自身の欲求は達成されてしまった。したがって、あとは観客の欲求が達成されるのを待つだけだ。試演会で危口／悪魔のしるしは観客のあいだに、完成作への期待ではなく煮え切らなさを醸成し、人びとが演劇に何を求めるか、そして今や悪魔のしるしに何を求めるかの二重の意見聴取を行っていた。おそらく危口統之は、すでに山のように思いついているだろう場面の断片から、二つの欲求に応える構成を捏造すると同時に、そうした構成をどこまで破棄し、それでもどこまで「演劇的演劇」を成立させられるかを探っているはずだ。アンディ・ウォーホルは「欲望とは他者の欲望である」(ジャック・ラカン)を文字通り実行したが、それ以上の危うい綱渡りを危口統之／悪魔のしるしは始めてしまったようだ。誰の欲望が描いているのか次第にわからなくなる、ジャコメッティと矢内原伊作の作業を借用しながら。

樽沼範久

1968年生まれ。専攻は表象文化論。横浜国立大学都市イノベーション研究院教授。東京芸術大学・東京大学・武蔵大学非常勤講師。論文「生態学的建築をめざして」(思想1045号、2011年5月)など。訳書ハル・フォスター編『視覚論』(2007、平凡社ライブラリー)、マーティン・コーエン『倫理問題101問』(2007、ちくま学芸文庫)。

## Sympathy for Akumanoshirushi

Norihisa Kurenuma

Akumanoshirushi is led by Noriyuki Kiguchi, who graduated with a degree in architecture studies from Yokohama National University, a college which has produced famous architects such as Koh Kitayama, Ryue Nishizawa, and Osamu Nishida. And yet Kiguchi, far from becoming an architect like this or even making a career in a related business, worked as a construction worker and then founded Akumanoshirushi. Since then he continues (as of present) to create a variety of feasts, such as “Sketch” events which attract people through heavy metal-style posters, or his *CARRY-IN-PROJECT*, where people haul an object that looks like some giant minimalist sculpture and pass it through a building, “theatrical theater” – theater disguised as theater – or “private meetings” which nonetheless anyone can attend. Apparently among young architects around Yokohama Noriyuki Kiguchi is known as “lethal weapon”. And he is one; for his work in Akumanoshirushi he even writes his name with a different Kanji character, using one that means “danger”. Kiguchi’s genealogy can be traced back to Gordon Matta-Clark, who despite studying architecture at Cornell University under architectural theorist Colin Rowe did not become an architect, instead co-running a restaurant, cutting up houses with a chainsaw, and hollowing out a wall in a building with a hammer. While it can be seen as destructive, the work is very principled and clearly constructed.

I first heard about Akumanoshirushi through the *CARRY-IN-PROJECT* but did not see it in action until *Dead Tree, Illustrated* (2012 KAAT Kanagawa Arts Theatre). The play began with the premise that the “director” (Kiguchi) had fallen from the KAAT building and died. Meta-theater like this dealing with the death of the script/director and the birth of the actor/audience, or with the impossibility of making theater, seems well past its expiration date these days. And yet, running this gauntlet of whether it will be a dud or not, *Dead Tree, Illustrated* actually treads a tightrope, camouflaging itself as meta-theater to ask us for just how long theater can take place without becoming embarrassing. Ever since I have wanted to feature the work of Akumanoshirushi in my lectures, and aside from inviting Kiguchi himself to give a guest talk, I have managed to satisfy my appetite by concocting some context on three occa-

sions. I gave a lecture considering the extended usage of architectural space in the Alvin Lucier’s *I am Sitting in a Room* and *CARRY-IN-PROJECT*. Another lecture studied the coexistence of the expected and unexpected through the *CARRY-IN-PROJECT* and the dance of William Forsythe. The third introduced Nicholas Bourriaud’s relational aesthetics, which creates conciliatory or adversarial relationships, alongside *CARRY-IN-PROJECT* and *Restaurant of Abundant Orders*, which divides the audience into upper, middle and lower streams, each possessing part of the somewhat grotesque site.

And now for this Kyoto feast Akumanoshirushi will perform *Mon Père, Giacometti*. At an earlier “rehearsal” event and “public meeting” Kiguchi finally achieved his desire to put his painter father Keizo Kiguchi on the stage. Accordingly, it was then just a case of waiting for the audience’s desire to be satisfied. At the rehearsal, Kiguchi/Akumanoshirushi brewed up in the audience not so much anticipation for the finished work but indifference, conducting a hearing that was double-layered, asking what people demand from theater and what they want from Akumanoshirushi right now. No doubt Noriyuki Kiguchi, while simultaneously fabricating a structure answering these two desires from the mountain of scene fragments he has already dreamed up, is also trying to work out how far to renounce that structure and then, how far “theatrical theater” can be enacted. After all, it was Andy Warhol who literally executed what Jacques Lacan said – man’s desire is the desire of the Other – but Noriyuki Kiguchi/Akumanoshirushi has finally begun walking on that perilous tightrope. And doing so all the while borrowing so much from Giacometti and Isaku Yanaihara that one becomes less and less sure who is the artist.

Norihisa Kurenuma

Born in 1968. A specialist in culture and representation theory. He is a professor at the Institute of Urban Innovation and Yokohama National University and an adjunct lecturer at Tokyo University of the Arts, the University of Tokyo, and Musashi University. A thesis he wrote on ecological architecture was published in the journal *Shiso* in May 2011. His translations include Hal Foster (ed.), *Vision and Visuality* (2007, Heibonsha Library) and Martin Cohen’s *101 Ethical Dilemmas* (2007, Chikuma Gakugeibunko).



# フランソワ・シェニョー & セシリア・ベンゴレア

François Chaignaud & Cecilia Bengolea

PARIS



photo: Emilie Zeizig

## TWERK

altered natives' Say Yes To Another Excess - TWERK

🕒 60 min (関西初演 / Kansai Premiere)

📅 10/18 (Sat) 17:00-  
10/19 (Sun) 17:00-

ナイトクラブを飛び出したような、  
猥雑で凶暴で熱狂的なダンスが炸裂する。

Sensual, violent, passionate dance bursting out of a nightclub

パリ国立高等音楽・舞踊学校(コンセルヴァトワール)に学んだフランソワ・シェニョーと、ブエノスアイレス大学で舞踊や哲学を学んだセシリア・ベンゴレア。2005年よりタグを組むこの2人の飽くなき対話を通じて、知的かつ躍動感あふれる鮮烈な作品を生み出している。

リヨン・ダンス・ビエンナーレ2012で発表された『TWERK(トゥワーク)』は、ナイトクラブの一夜をそっくり持ちこんだような、クレイジーでエネルギー溢れるダンス作品。セクシーな5人のダンサーたちが、退屈な常識を攪乱しながら、強烈にポジティブに惜しげもなく身体を酷使する。ロンドンのストリートを代表するDJデュオ、イライジャ&スキリアムによる爆音グライム・サウンドも、クラブ音楽ファンならずとも楽しみなところ。

鋭敏なジェンダー観をそなえたハイブrouなダンス作品にして、つい踊らずにはいられない五感を刺激するダンスフロアの興奮がそこにある。

François Chaignaud, a graduate of Paris Dance Conservatory and Cecilia Bengolea, a student of anthropological dance and philosophy at the University of Buenos Aires, have worked together since 2005. A steady dialogue between the two choreographers has given rise to a variety of works. Introduced at La Biennale de Lyon 2012, *altered natives' Say Yes To Another Excess - TWERK* is a raving and energetic dance piece, as if a night at a club is taking place on stage. Five provocative dancers are spinning, rotating on their own as they all orbit in a wide circle, extending and retracting their arms from the elbow. It is the first time for the London DJs Elijah and Skilliam to play in a theater and collaborate with contemporary dancers with their fierce set of Grime music. While stimulating the senses and compelling audience to dance along, it is a high-culture piece with a sharp perspective on gender issues.

📍 京都府立府民ホール“アルティ”  
Kyoto Prefectural Citizens' Hall ALTI

構想: セシリア・ベンゴレア、フランソワ・シェニョー  
出演: エリザ・イヴラン、アナ・ピ、アレックス・マグラー、  
フランソワ・シェニョー、セシリア・ベンゴレア  
DJ: イライジャ&スキリアム (Butterz [ロンドン])  
照明クリエーション: ドミニク・バラボー、ジャン＝  
マルク・セガレン、フランソワ・シェニョー、セシリア・  
ベンゴレア

照明: ドミニク・バラボー、シンディー・ネゴス  
舞台監督: ジャン＝マルク・セガレン  
音楽監督: ミゲル・カレン  
監修: アレクサンデル・ロコリ

衣装: フランソワ・シェニョー、セシリア・ベンゴレア  
製作: カンパニー Vlovajob Pru  
共同製作: リヨン・ダンス・ビエンナーレ、ボンビ  
ドゥー・センター舞台芸術部(パリ)、フェスティ  
バル・ドートヌヌ(パリ)、トゥールーズ公立振付振興セ  
ンター(ミディ＝ピレネー)、ベルフォール国立振付  
センター(フランシュ＝コンテ)、グルノーブル国立  
振付センター、Le Vivat d'Armentières - Scène  
conventionnée danse et théâtre (ノール＝パ  
ド＝カレー)、カーン国立振付センター(バス＝ノル  
マンディー)

製作助成: ARCADI(イル＝ド＝フランス)  
助成: FUSED (French U.S. Exchange in Dance)、  
FACE (French American Cultural Exchange)  
協力: la Ménagerie de Verre (パリ)、Chez Bushwick  
(ニューヨーク)、ドリス・デューク慈善財団(ニュー  
ヨーク)、フロレンス・グールド財団(ニューヨーク)  
共催: アンステイチュ・フランセ日本  
助成: アンステイチュ・フランセ 日本本部  
後援: 在日フランス大使館 / アンステイチュ・フランセ  
日本  
共催: 京都府立府民ホール“アルティ”  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Designed by: François Chaignaud, Cecilia  
Bengolea  
Performers: Éliasa Yvelin, Ana Pi, Alex Mugler,  
François Chaignaud, Cecilia Bengolea  
Music: DJ Elijah, DJ Skilliam (Butterz, London)  
Lighting creation: Dominique Palabaud, Jean-Marc  
Segalen, François Chaignaud, Cecilia Bengolea  
Lighting: Dominique Palabaud, Sindy Négoce  
Stage manager: Jean-Marc Segalen  
Music advisor: Miguel Cullen  
Consultant advisor: Alexandre Roccoli  
Costumes: François Chaignaud, Cecilia Bengolea  
Production: Vlovajob Pru  
Co-production: Biennale de la danse de Lyon, Les  
Spectacles Vivants - Centre Pompidou (Paris),  
Festival d'Automne à Paris, Centre de Développe  
ment Chorégraphique Toulouse (Midi-Pyrénées),  
Centre Chorégraphique National de Franche  
Comté à Belfort, Centre Chorégraphique National  
de Grenoble, Le Vivat d'Armentières - Scène  
conventionnée danse et théâtre (Nord-Pas-de  
Calais), Centre Chorégraphique National de Caen  
(Basse-Normandie)  
Production funded by: Arcadi (Île-de-France)  
Supported by: FUSED (French U.S. Exchange  
in Dance), FACE (French American Cultural  
Exchange)  
In cooperation with: La Ménagerie de Verre (Paris),  
Chez Bushwick (NY), Doris Duke Charitable Foun  
dation (NY), the Florence Gould Foundation (NY)  
Co-organised by: Institut français du Japon  
With the support of: Institut français  
Under the auspices of: Embassy of France /  
Institut français du Japon  
Co-presented by: Kyoto Prefectural Citizens'  
Hall ALTI  
Presented by: Kyoto Experiment

## 蒼褪めた野生のダンス——『TWERK』

岡見さえ

間違いなく、フランソワ・シェニョーとセシリア・ベンゴレアはいま欧米のコンテンポラリーダンスシーンで最も注目されるアーティストだ。パリの国立コンセルヴァトワールでダンスを学び、両性具有的な妖しい退廃の香りを放つシェニョー。対して故郷ブエノスアイレスでジャズ、ストリート、伝統的舞踊を身につけたのちフランスでコンテンポラリーダンスを学び、強靱で生命感に満ちたダンスを繰り出すベンゴレア。2人は2008年にカンパニーVlovajob Pru (ヴロヴァジョブ・ブル)を立ち上げ、以来『Pâquerette (バクレット)』『Sylphides (シルフィード)』『Castor et Pollux (カストルとポリュックス)』『Danses libres (ダンス・リーブル)』『(M)IMOSA, Twenty Looks or Paris is Burning at The Judson Church (M)』、そして2012年初演の『TWERK』とほぼ毎年新作を発表し、その都度センセーションを巻き起こしている。強烈なインパクトのメイクや衣装、舞台上の禁忌を軽々と侵犯する過激な振付に、まず衝撃を受ける。だが彼らのダンスはただ奇をてらうポップ・シンガーたちの浅薄さとは一線を画し、じわじわと観客の存在を深いところから揺さぶっていく。

『TWERK』は会場に入った瞬間から観客の感覚を激しく刺激する。大音量のクラブサウンドが耳を聳し(初演時には耳栓が客席に置かれていた!)、無機質なグラフィティが描かれた白いフロアではすでにダンサーたちが高速で回転している。ヒップホップ、ハウス、ガレージ、エレクトロを混合したロンドンのグライム・サウンドを代表するDJ、イライジャ&スキリアムのライブプレイにのせた、5人のダンサーの驚くべきダンスパーティの始まりだ。数十分間続くダンサーの人間離れた旋回は見る者に眩惑を、踊り手に陶酔を招く。やがて真紅に染まった空間で1組の男女が不思議な動きで対話を紡いでいくデュオ、黒いショーツと膝当てのみを身につけ胸まで垂らした黒髪で性差を攪乱した男女が薄闇に浮かび、緩慢な動きと高速のダンスの落差で魅せるクール

なトリオを経て、5人はトランス状態に入ったごとく爆発する。自らの性的魅力を誇示し、欲情を無邪気に明かし、互いに戯れ、欲望を交換し、新たなコードを共有するなかで奇妙な連帯が作り出されていく。その様子はあたかも新たな部族の誕生を見るようだ。

作品タイトル『TWERK (トゥワーク)』とは、両脚を開いて低くしゃがみ、尻を突き出し激しく振るダンスを指す(マイリー・サイラス風、と言えば解り易いだろうか)。ここ一年程で一気に広まったが、起源はブラックカルチャーにあり、アメリカの女性ラップ歌手Ladyの同名曲(2011)にシェニョーとベンゴレアはインスパイアされたという。トゥワーク以外にも、大胆な開脚を複合した高い跳躍“スプリット”のごときクラブダンスのステップやバレエ的ポーズなど、異なる歴史・文化的背景を持つダンスの語彙から引用された動きがアレンジされ用いられている。

洗練や社会規範を無視して踊りの快感に身を委ねる一方、他者の欲望を掻き立てるべく誘惑のコードを忠実になぞり、欲望すること/欲望されることの矛盾を忘我の悦楽に融かし込むナイトクラブのダンスは、ジェンダースタディや舞踊の文化人類学的側面に強い関心を持つシェニョー/ベンゴレアの制作にとって好適な主題だったことは想像に難くない。原初の欲望の発露の場をネオンと電子音が彩る大都市のナイトクラブに見出した、シェニョー/ベンゴレアの蒼褪めた野性のダンス。そのいびつさゆえに魅力的で、見る者の脳髓を直撃する彼らの挑発を、快と捉えるか不快と捉えるかはおそらくその人による。『TWERK』を通して、おそらく私たちは私たち自身に出会うのだ。

岡見さえ

東京都出身、舞踊評論家。上智大学およびトゥールーズ大学(フランス)にて博士号取得(文学)。2004年より舞踊評の執筆を開始し、現在は新書館『ダンスマガジン』、産経新聞を中心に、コンテンポラリーダンスやバレエの公演評、取材記事を寄稿する。JaDaFo(日本ダンスフォーラム)メンバー。

## The pallid, wild dance of altered natives' Say Yes To Another Excess - TWERK

Sae Okami

François Chaignaud and Cecilia Bengolea are without doubt the most prominent artists on the American and European contemporary dance scene today. A dance graduate from the Paris Conservatory, Chaignaud exudes a pungency of dubious androgynous degeneration, while Bengolea, having studied contemporary dance in France following training in jazz, street dance and traditional dance in her hometown of Buenos Aires, suffuses vitality and brawn. In 2008 the pair formed the company Vlovajob Pru and since then have caused sensations with the new work they create almost yearly, from *Pâquerette* to *Sylphides*, *Castor et Pollux*, *Danses libres*, *(M)IMOSA*, *Twenty Looks or Paris is Burning at The Judson Church (M)*, and 2012's *altered natives' Say Yes To Another Excess - TWERK*. Audiences find themselves shocked by the intense make-up, the costumes, and the radical choreography that casually violates on-stage taboos. And yet the dance is a clear departure from the superficiality of those pop singers who like to exhibit their eccentricities, instead gradually agitating audiences from deep inside.

*altered natives' Say Yes To Another Excess - TWERK* violently stimulates the audience's sensations from the moment they enter the venue. Thunderous club music deafens (earplugs were made available on the seats at the premiere!) and on the floor painted white with mechanical graffiti, the dancers are already spinning around at full speed. An extraordinary dance party then kicks off with the five performers dancing to the music played by DJ Elijah and DJ Skilliam, leaders in the Grime music scene in London that mixes hip hop, house, garage and electro. The dancers' superhuman gyration continues for several minutes, making viewers dizzy and fellow dancers intoxicated. Before long the five dancers burst into a trance-like state, following a dialogue woven through mysterious movements by one male-female duo in the dyed stark crimson space, and a cool trio of dancers beguiling through jumps between high-speed dance and languid movements in the dim light by the men and women who, with their black hair draping down to their chests and wearing only black shorts and knee pads, destabilize differences of gender. Out of the flaunting of their sexual

charms, their guileless revealing of arousal, their mutual gallivanting, their exchanging of desire and sharing of new codes, a freakish bond is created. It is like the birth of a new tribe.

The “twerk” in the title refers to a kind of dance where you open your legs, squat down, and furiously shake your protruding rear (think of Miley Cyrus and you can surely visualize what I mean). The term has spread quickly in the last year or so but its roots lie actually in black culture, and it was a song called “Twerk” (2011) by the American female rapper Lady that apparently inspired Chaignaud and Bengolea. Other than twerking, the work also employs movements that reference dance vocabulary's varying histories and cultural backgrounds, including nightclub dance steps like a daring straddle split leap, or ballet-esque poses.

With their strong interests in gender studies and the anthropological side of dance culture, it isn't hard to imagine that nightclub dancing would be a suitable subject for Chaignaud and Bengolea, since on the one hand it ignores sophistication and social norms to devote itself to the pleasure of dance, but also faithfully traces the codes of temptation to invoke the desires of others, dissolving the irreconcilability of “desiring” vs. “being desired” into a self-surrender of ecstasy. In the urban nightclub, with its neon and electronic music, Chaignaud and Bengolea's pallid wild dance discovered a site that manifests primordial desire. Beguiling by its very distortion, it surely depends on individual taste whether the provocations that hammer into the encephalon of the viewer are taken as pleasure or displeasure. In *altered natives' Say Yes To Another Excess - TWERK* what we likely encounter is ourselves.

Sae Okami

Born in Tokyo. A dance critic. She has a doctorate in literature from Sophia University and University of Toulouse. She began writing dance criticism in 2004 and currently contributes reviews and articles on contemporary dance and ballet to Dance Magazine and Sankei Shimbun. She is a member of JaDaFo (Japan Dance Forum).

# 地点 Chiten

KYOTO



photo: Hisaki Matsumoto

## 光のない。

Kein Licht. (No Light.)

🕒 110min (関西初演 / Kansai Premiere)

📅 10/18 (Sat) 19:00-  
10/19 (Sun) 14:00-📍

🗣️ 日本語  
Performed in Japanese

🗨️ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk  
出演: 三浦基、三輪眞弘 司会進行: 小崎哲哉 (編集者)

想像力の臨界へ、  
声と光と身体が織りなす峻厳な風景は、終末なのか希望なのか

**A landscape woven by voice, light and bodies.  
Does it proclaim the end? Or hope?**

京都・北白川に自身のアトリエ、アンダースローをオープンさせ、定期的に作品を発表している劇団、地点。独自の公演スタイルやチケットシステムに加え、ローカルからダイレクトに海外を射程に収めたその活動は、劇場・演劇の公共性を問いかける彼らなりの態度表明ともいえる。そんな地点にとって、4回目の参加となるKYOTO EXPERIMENT。これまでは野心的な新作発表の場としてきたが、今年は、フェスティバル/トーキョー12で上演され、近年の最高傑作と評された『光のない。』を発表する。

『光のない。』は、オーストリアのノーベル賞作家エルフリーデ・イエリネクが東日本大震災と原発事故を受けて執筆した戯曲。地点は既存のテキストを、「地点語」とも評される特異な発話スタイルを駆使し、独自の解釈で上演してきたが、同時代の戯曲をあつかう機会は多くない。現実以上の現実の出来事に対応したこのテキストに対峙し、演劇の声と死者の声を響き合わせながら、「発話する主体」はどこにあるのか、その境界を鋭く問いかける。さらに、音楽家・三輪眞弘による生身の「音声装置」、建築家・木津潤平の空間構成を得て、音・声と身体が拮抗する圧倒的強度をもった空間が立ち上がる。

希望の光が失われた状況と同時に、啓蒙の「光」が文明を進歩させた果ての光景を示す『光のない。』、人々の想像力を越えた風景が広がっている。

Launching their studio UNDER-THROW in Kitashirakawa, Kyoto and presenting their work on a regular basis, Chiten has not only established a distinct style of performance and its own ticketing system, but also speaks to an international audience directly from Kyoto – as if it's their manifesto on the public nature of theater. For their fourth appearance at Kyoto Experiment, instead of premiering new work as it did the last three years, Chiten introduces a piece shown at Festival/Tokyo 12, the critically acclaimed *Kein Licht*. While the original text is written by Elfriede Jelinek, the Austrian Nobel Prize-winner, as an homage to 3.11, Chiten reinterprets it in their own particular theatrical vernacular, a unique style of language which has been described as “Chitenses”. Being a rare example of Chiten working with a contemporary text, the work questions the boundary between the voice of the actors and the voice of the dead – where the agency lies. Together with a live “sound machine” by Masahiro Miwa and space designed by Junpei Kiz, an overwhelmingly intense environment where sound/voice/body counterweigh each other emerges. The light of enlightenment leading to a state in which there is no light of hope. What we see on stage is beyond our imagination.

📍 京都芸術劇場 春秋座  
Kyoto Art Theater Shunjuza



未就学児入場不可  
Children under school age not admitted

作: エルフリーデ・イエリネク  
翻訳: 林立騎  
演出: 三浦基 (地点)  
音楽監督: 三輪眞弘  
出演: 安部聡子、石田大、小原康二、窪田史恵、河野早紀、小林洋平 (以上、地点)  
合唱隊: 朝日山裕子、今井飛鳥、大井卓也、大畑和樹、小村典子、中西重人、野口亜依子、園羽山園、真都山みどり、村田結、好光義也、米津知実  
衣裳: 堂本教子  
照明デザイン: 大石真一郎 (KAAT神奈川芸術劇場)  
照明オペレーション: 岩田麻里 (KAAT神奈川芸術劇場)  
音響デザイン: 徳久礼子 (KAAT神奈川芸術劇場)  
音響オペレーション: 稲住祐平 (KAAT神奈川芸術劇場)  
舞台監督: 山口英峰 (KAAT神奈川芸術劇場)  
舞台監督助手: 足立充章  
技術監督: 堀内真人 (KAAT神奈川芸術劇場)  
制作: 小森あや、田嶋結菜 (以上、地点)  
製作: フェスティバル/トーキョー、地点 (2012年初演)

2014年版共同製作: KYOTO EXPERIMENT  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Text: Elfriede Jelinek  
Translation: Tatsuki Hayashi  
Direction: Motoi Miura (Chiten)  
Music direction: Masahiro Miwa  
Cast: Satoko Abe, Dai Ishida, Koji Ogawara, Shie Kubota, Saki Kohno, Yohei Kobayashi (all for Chiten)  
Chorus: Yuko Asahiyama, Asuka Imai, Takuya Oi, Kazuki Ohata, Noriko Komura, Shigeto Nakanishi, Aiko Noguchi, Hayama, Midori Matsuyama, Yui Murata, Yoshiya Yoshimitsu, Tomomi Yonezu  
Stage design: Junpei Kiz  
Costumes: Kyoko Domoto  
Lighting design: Shinichiro Oishi (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Lighting operation: Mari Iwata (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Sound design: Reiko Tokuhisa (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Sound operation: Yuhei Inazumi (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Stage manager: Eiho Yamaguchi (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Assistant stage manager: Mitsuaki Adachi  
Technical manager: Mahito Horiuchi (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Production coordinator: Aya Komori, Yuna Tajima (all for Chiten)  
Production: Festival/Tokyo, Chiten (premiere)  
Co-production for 2014 version: Kyoto Experiment  
Presented by: Kyoto Experiment

## 地点について

### 空間現代

地点の舞台を初めて観た時、圧倒的な「わからなさ」に直面しながら、完全に興奮していたことを覚えています。

そこには、整理された物語や、観客すべてに共有されるような情感、ひとことで言い切れるような分かりやすい方法論、はありませんでした。ただ、それは観客を置き去りにするためのあからさまな実験や、単に突飛なことを狙っただけの前衛、とは少なくとも全然違うということはその時の私にも感覚的にですが、良く分かりました。『ファッツァー』を通じ制作の作業を共にした今、その思いを強くしています。

しかしながらこの、地点の舞台に感じたわからなさや熱狂は一体なんなのでしょう。

まず言葉。この伝達のユニークさがあります。地点の役者は分断されたテキストを、聞いたことのないやり方で喋ります。ここで言葉は時に意味を伝える線であることを止め、亀裂が入ってはまた結合されるということを繰り返します。そのことによって「わかる」と「わからない」の境界が揺さぶられ、理解すること自体の変質が迫られるような事態が起こります。

そして役者の動き、舞台、音、光。これらが並走しはじめると理解はまた別の濁流へと飲み込まれ、「リズム」とでも呼ぶしかないよううなうねりを生み出していきます。

この時私はうねりに飲み込まれながらもそれでも、ではこれが、物語を完全に脱臼させた全く意味不明のものであるか、と問われればそうではないということは言えます。

滑稽ともいえるユーモラスさも、感涙のシーンさえ、地点の舞台にはあります。ただその全てが、安全な了解の上にあるのでは

なく、危うさと隣合わせにあるのです。爆笑しながら戦慄してしまうような。

それは言葉や音がひとつの情感を表現するために発されるのではなく、あくまで並走しながら、それでも各々が交差してしまう瞬間にこそ生まれます。意味から遠く離れた所に向かってるように見えていた言葉が、長い道のりを経て不意に突き刺さってくるようなその瞬間。そこに私は最も感動します。

地点の舞台を観ること。これはかなりハードな体験であることは間違いないと思います。

集中力を必要としますし、置き去りにされたと感じることもあるかもしれません。しかしそもそもが、言葉を伝えるとは、物語を語るとは、とても複雑で困難な道なのではないでしょうか。

その困難さに付き合うことを、地点は全く諦めていないように思えます。物語の豊かさを、観客の聡明さを、信じているようにも…。

私が感じた地点の「わからなさ」は、こう言って良ければ観客への、言葉への、「敬意」なのではないかと思っています。

少なくとも私は、あの日、あの劇場で『光のない。』の観客のひとりであったことを誇りに思っています。

#### 空間現代

2006年、野口順哉 (gt.vo) 古谷野慶輔 (ba) 山田英晶 (dr) の3人により結成。編集・複製・反復・エラー的な発想で制作された楽曲を、スリーピースバンドの形態で演奏。東京でのライブを活動の中心としつつもECD、船屋法水、大橋可也&ダンサーズなど先鋭的なアーティスト達とのコラボレーションも積極的に行う。2013年、地点と初の共同作業を行い、プレヒト作『ファッツァー』を舞台化。

## Chiten

### kukangendai

I remember when I first saw a Chiten play coming face to face with an overwhelming kind of “non-understanding” and yet also being completely exhilarated.

There was no structured narrative, no emotion being shared with all the audience, nor any easy methodology that could be put into a single word. However, I also clearly saw, or at least sensed it at that time, how this was utterly different to the avant-garde that merely aims for an outright experience leaving the audience high and dry, or for the bizarre. And having now worked together with Chiten on the production of *Fatzer*, I feel that strongly.

However, just what is this non-understanding, this fever that I felt in Chiten's work?

First of all, its language; the communication is unique. Chiten's performers speak a dismembered text, in a way you have never heard before. At times the words give up being lines for conveying meaning and, with fissures intact, are repeatedly joined up. In this way, swaying between understanding and misunderstanding, a situation arises that seems to force the transmutation of understanding itself.

And then there is the movement of the performers, the stage, sound, and light. As these begin to run side by side, our understanding is swept away by another muddy torrent, creating an undulation we can only call “rhythm”.

At this point, while being swept away by this, it can be asked: Is this just utterly nonsensical, something completely dislocating the story? To which we can say no.

Chiten's plays even have a humor we might call jocular, and even scenes that will move you to tears. And yet none of this is understood as safe; it exists hand in hand with peril. While laughing, shivers run down our spines.

This isn't the words or sounds emitted in order to express an emotion, but is born in the moment when they run side by side, each intersecting with the oth-

er. It is that moment when the words that seem to be heading to a place far removed from their meanings, after a long journey, abruptly come thrusting back at you. This is what most moves me.

Watching a Chiten play... No mistake about it, it can be quite a tough experience. You need to concentrate and likely you will feel like you have been dumped to one side of the road. And yet, isn't conveying words and telling stories a complex and difficult road to start with?

Chiten never stops rubbing shoulders with that difficulty. As if it believes in the richness of narrative and the intellect of audiences.

I think that Chiten's “non-understanding” that I felt could be called respect for audiences and for language.

At the very least, I am proud on that day in that theater to have been a member of the audience for *Kein Licht*.

#### kukangendai

Formed in 2006 with Junya Noguchi on guitar and vocals, Keisuke Koyano on bass guitar, and Hideaki Yamada on drums. Performing as a three-piece, its tracks are made through a process of editing, replicating, and deliberate error. Alongside its live shows in Tokyo, it also works with other leading artists across a range of genres, including ECD, Norimizu Ameya, and Kakuya Ohashi and Dancers. In 2013 it collaborated with Chiten for the first time on the theater company's staging of Brecht's *Fatzer*.

# 金氏徹平

Tepei Kaneuji

KYOTO



Model of Unknown Stage #18 ©Tepei Kaneuji



©Tepei Kaneuji

INSTALLATION + PERFORMANCE + MUSIC

## 四角い液体、メタリックなメモリー

Cubed Liquid, Metallic Memory

10/4 (Sat) - 11/3 (Mon) 10:00-20:00

※10/4のみニュー・ブランシュのため22:00まで延長。10/18のみイベントのため14:00-20:00オープン。  
※会期中無休

京都芸術センターギャラリー北・南  
Kyoto Art Center North and South Gallery

あらゆるものが生成される「舞台」としての作品、  
琳派の歴史を参照しながら、総合芸術としての場所へ——

Inspired by Rimpa, this “stage” where everything is  
created evolves into a place for Gesamtkunstwerk

京都在住の美術家、金氏徹平は、横浜美術館での個展「溶け出す都市、空白の森」(2009)をはじめ、北京での個展やエルミタージュ美術館での企画展などの国内外での発表のほか、近年は舞台作品の美術も手がけている。プラスチック製品やキャラクター人形、金属、木材、雑誌の切り抜き、シール…主に日用品を素材として、ささやかに手を加えたり、接合、変形、組み合わせたりすることで、見たこともないのに既知感のある奇妙な世界へ誘う。

今回の『四角い液体、メタリックなメモリー』は、パフォーマンスアーツ、さらに日本の美術の一大流派「琳派」との結節点を探る大胆な試み。京都芸術センターギャラリー北では、虚構の舞台を思わせる「Model of Unknown Stage」シリーズの最新作などを展示予定。ギャラリー南では会期中に、美術作家、ミュージシャン、役者らの参加を得て、金氏自身が企画した4つのイベントが予定されている。

「出会うはずのなかった物や出来事や人がそれぞれのままの状態に出会う場として設定されること」とかつて自ら書き記した金氏徹平の世界。予想外の出会いに、未知の世界が広がるような開放感を味わうことが出来るだろう。

Tepei Kaneuji is a Kyoto-based artist who has shown his work in Japanese museums as well as in overseas exhibitions such as “Melting City / Empty Forest” (Yokohama Museum of Art, 2009), a solo show in Beijing, a group show in the Hermitage Museum and more. Recently, Kaneuji has been working in stage design and by combining and reshaping everyday items such as plastic goods, dolls, magazine cut-outs, stickers etc., he invites us to a world that feels somewhat familiar even though we have never seen it before. In this work, the artist boldly explores to seek a node between performing arts and Rimpa, one of the major historical schools of Japanese painting, exhibiting new work from his “Model of Unknown Stage” series at Kyoto Art Center’s North Gallery and hosting four different events with other artists, musicians and actors at the South Gallery. “A place where things and people that were not supposed to encounter each other do encounter each other as they are,” says Kaneuji. An unexpected encounter may take us to the world of the unknown and liberate us.

琳派400年記念祭事業 展示照明:高田政義 (RYU) 協力:透明堂 主催:KYOTO EXPERIMENT  
Part of The Celebration of 400 Years of The Rimpa School of Japanese Painting program Exhibition  
lighting: Masayoshi Takada (RYU) In cooperation with: Tomeido Presented by: Kyoto Experiment

展示、ライブペインティング:無料 ライブ、パフォーマンス:¥2,000(要申込)  
\*申込:KYOTO EXPERIMENT 事務局まで、お電話(075-213-5839)もしくは公式ウェブサイト  
(www.kyoto-ex.jp)内申込フォームにてお申込みください。

Exhibition, Live Painting: Free Admission Live Music, Performance: ¥2,000 (Reservation required)  
\*Reservation: Call Kyoto Experiment office (075-213-5839) or send application form at the official  
website (www.kyoto-ex.jp).

### 会期中イベント

ライブペインティング「トレースのヨーカイ」  
板垣賢司(美術家)+森千裕(美術家)  
+横山裕一(マンガ家/美術家)+金氏徹平  
日時:10/4 (Sat) 19:30-21:00  
会場:京都芸術センター ギャラリー南

ライブ「ミュージックのユレーイ」  
オオルタイチ(ミュージシャン)+金氏徹平  
+西川文章(サウンドエンジニア/音楽家)  
日時:10/11 (Sat) 20:00-21:00  
会場:京都芸術センター ギャラリー南

パフォーマンス「レクチャーのオバケ」  
青柳いづみ(俳優)+金氏徹平+山田晋平  
(舞台映像デザイナー)  
日時:10/18 (Sat) 12:00-13:00、20:00-21:00  
会場:京都芸術センター ギャラリー南  
音楽:蓮沼執太  
照明:吉本有輝子  
衣裳:藤谷香子  
レクチャー(映像出演):天野一夫

クロージングパーティー「パーティーのマボロシ」  
ゲスト:日菓(和菓子ユニット)  
日時:11/3 (Mon) 19:00-  
会場:京都芸術センター ギャラリー南  
※お菓子がなくなり次第終了します。

Live Painting: “Specter of Trace”  
Kenji Itagaki + Chihiro Mori + Yuichi  
Yokoyama (+Tepei Kaneuji)  
Date: 10/4 (Sat) 19:30-21:00  
Venue: Kyoto Art Center South Gallery

Live Music: “Ghost of Music”  
OORUTAICHI + Tepei Kaneuji  
+ Bunsho Nishikawa  
Date: 10/11 (Sat) 20:00-21:00  
Venue: Kyoto Art Center South Gallery

Performance: “Phantom of Lecture”  
Izumi Aoyagi + Tepei Kaneuji  
+ Shimpei Yamada  
Date: 10/18 (Sat) 12:00-13:00,  
20:00-21:00  
Venue: Kyoto Art Center South Gallery  
Sound: Shuta Hasunuma  
Lighting: Yukiko Yoshimoto  
Costume: Kyoko Fujitani  
Recorded lecture: Kazuo Amano

Closing Party: “Mirage of Party”  
Guest: Nikka  
Date: 11/3 (Mon) 19:00-  
Venue: Kyoto Art Center South Gallery  
The event continues until the food is  
gone.

## 金氏徹平について

岡田利規

三年前につくった舞台作品で、金氏徹平氏に美術を手がけてもらった。金氏氏にとって、はじめての、舞台芸術のフィールドでの仕事だった。でも彼にやってもらえたら絶対うまくいくと僕は強く信じていた。そのセンスがものすごくいいと思っていたから。

家電製品を模したものをつくってほしい、というのが彼に対してそのとき僕がリクエストしたことだった。なんとと言っても、その舞台作品は『家電のように解り合えない』というタイトルだったのだ。

作品の構想をさぐる、ごくごく初期段階のワークショップを覗きに来てくれていた金氏氏に、すでにこのタイトルをぼんやり思いついていた僕は、どう思いますこのタイトル？と尋ねてみた。ピンときますね、だったか、しっくりきますね、だったか、そんなことを言ってくれた。金氏徹平氏がそう言うなら、と僕は自信を持ってこのタイトルで行くことに決められた。僕は彼のセンスを信頼していたから、その一言は太鼓判みたいなものだったのだ。ところで、センスということ言えば、これはずっとあとのことだが、センスのある若手の作り手たち（僕よりも若手のことです念のため）のことを話題に金氏氏と飲んでいたとき、彼の拠点である京都では「センスがいい」というのはアーティストに対するほめ言葉どころかむしろ一種のイヤミだ、みたいなことを彼が言っていた。それを聞いたとき僕は、逆説的な言い方になってしまうけど、金氏徹平のセンスが信頼できるものである所以がわかった気がした。

金氏徹平のセンスは、センスのよさ・悪さという判断軸が機能できない場所にある。そういうのが本当にセンスがいいってことだと思うんだけど、こんなふうに話をすすめていくと、センスが悪いことがセンスがいいってことなんだ、みたくややこしくならざるを得なくて、だったらもうセンスなんて言葉は使わないほうが賢明だと思う。

『家電のように解り合えない』のときは、家電製品を模したものを、ということと、ダンスシーンの多い作品になるので、踊るためのスペースを広く

欲しいから、舞台一面に細かいものをごちゃごちゃと置くようなものにはしないほしい、というふたつのリクエストを、僕はした。後日人づてに、岡田さんからのリクエストがほとんどなかったもので困ったと金氏さんが言ってましたよ、と聞いた。僕はそのふたつのリクエストだけでじゅうぶんだと思っていたので、あれでは足りなかったのかな、と意外に感じたけれど、いくら考えても、あのふたつのリクエストだけでやっぱりじゅうぶんだったと思う。だって、とても面白い舞台美術になったし。

そのとき彼は、テレビ、洗濯機、電子レンジ、FAX、炊飯器、などなど、大小十二個の家電製品をつくってくれた。それを舞台の奥にずらっと並べて配置した。

あれはとでもうまくいったと思っている。なによりあの作品をつくるのは楽しかった。それに、あれ以来彼は、舞台の仕事を継続してくれている。その事実は、あのときの仕事が楽しかったことの産物だと思う。しかも今回、彼は舞台美術に携わるだけでは飽き足らなくなったのだろう、ついに演劇作品をつくることにしてみた。最高だと思う。美術（ヴィジュアルアーツ）の人が舞台芸術（パフォーマンスアーツ）のフォーマットを面白がってくれてる様子を見ると、うれしい。うれしいし、そのさまは、舞台芸術の人である僕に、舞台芸術をあらたにとらえ直す契機を与えてくれもする。外側にいる人が本質を、遠回りしないでドスンと突いてきたりするものだから。

岡田利規

1973年横浜生まれ。演劇作家／小説家／チェルフィッチュ主宰。従来の演劇概念を覆すとみなされ国内外で注目される。『三月の5日間』で第49回岸田國土戯曲賞受賞。デビュー小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』（新潮社）で第二回大江健三郎賞受賞。2012年より岸田國土戯曲賞審査員を務め、2013年『遊行 変形していくための演劇論』（河出書房新社）刊行。

## Teppeï Kaneuji

Toshiki Okada

Teppeï Kaneuji did the stage design for a play I made about three years ago. It was his first time to design for the theater. But I believed very strongly that he would do a good job because I felt he had very good taste.

My request to him was to make things that looked like household appliances. After all, the title of the play was *We cannot understand home appliances, nor can we each other*.

Kaneuji came to see the workshops in the very first stages where we were exploring the concept of the play and I asked him about the title I was then vaguely considering. "It works well," he told me, "it fits." Or something like that. Well, if Teppeï Kaneuji thinks so... It gave me the confidence to go with that title. I trusted in his taste so his words were like a seal of approval.

By the way, if we're talking about sense of taste, well, this came up much later, but when I was drinking with Kaneuji we got talking about young artists with good taste (FYI when I say young, I mean younger than us), and he said something about how in Kyoto where he's based, being told you have good taste is for an artist, far from being praise, it's actually kind of sarcasm. When I listened to this, well, this sounds a bit paradoxical, but I felt like I then understood the roots for why I can trust Kaneuji's tastes.

Teppeï Kaneuji's taste is in a place where judgment about whether taste is good or bad does not function. This is what I think actually makes taste good. But if we carry on like this, we will run the risk of insinuating that bad taste is actually good taste and otherwise needlessly complicating things. As such, it would be wise not even to use the word "taste".

For *We cannot understand home appliances, nor can we each other* I had two requests for him, to make things that looked like household appliances – but as the play had lots of dance scenes, I wanted a big space for dancing, so I also didn't want him to clog up the stage with lots of objects. Later I heard through the grapevine that Kaneuji had been saying he was having trouble because I had given him

so few instructions! I'd thought those two requests had been enough and I didn't think that could be too little, and no matter how much I thought about it, I really did feel that those two requests were enough. Hey, the stage design was really interesting, you know.

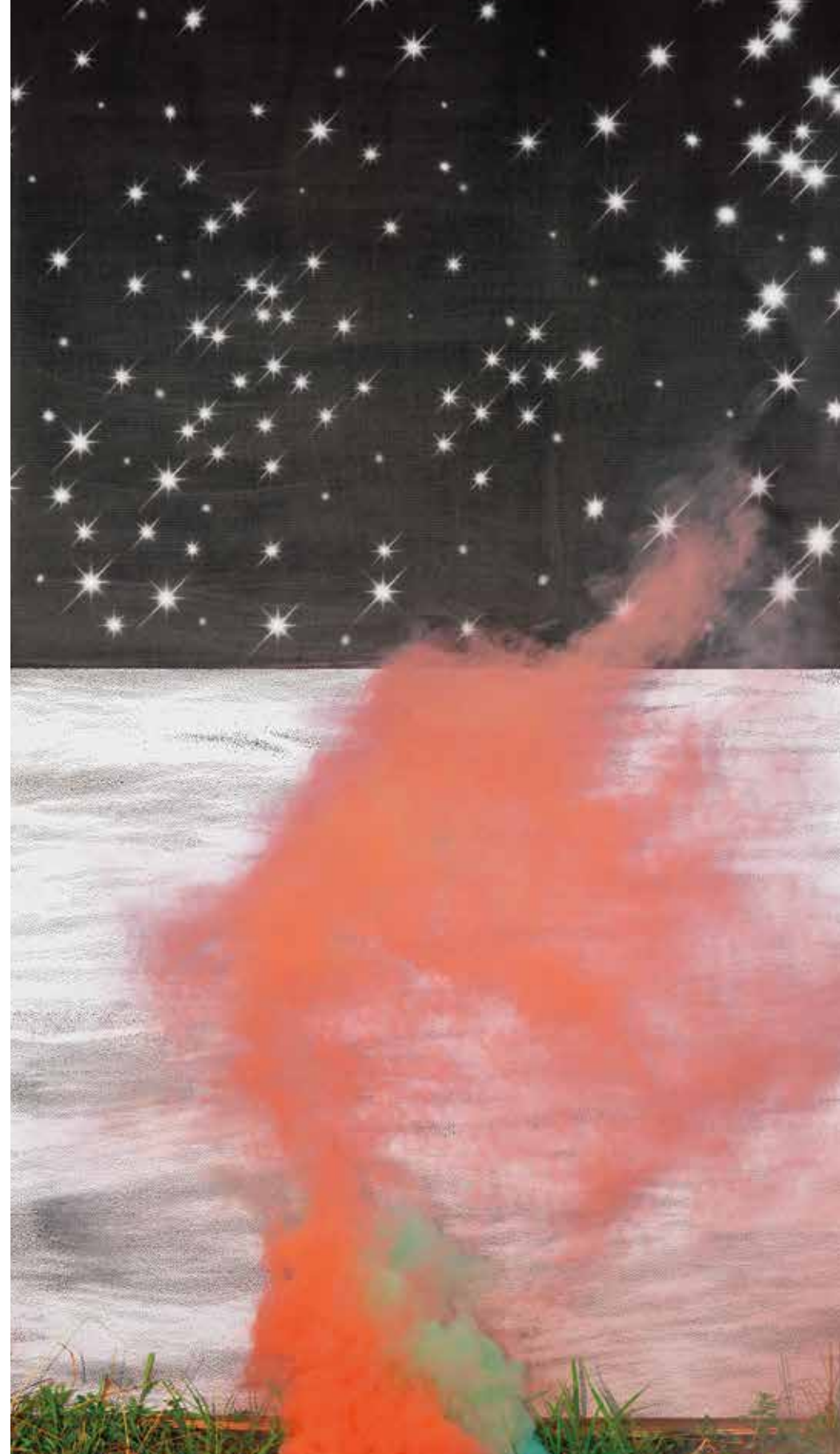
Kaneuji made twelve large and small household appliances for me (television, washing machine, microwave, fax machine, electric rice cooker, etc.). These were lined up at the back of the stage.

That really worked well. More than anything, making that play was fun. And since then, he's continued to do stage design. This fact is the product of how working together that time was such fun. And now it's like he's become dissatisfied with only being involved with stage design and has finally made his own theater work. That's great.

I'm so happy to see someone from the visual arts get interested in the format of the performing arts. I'm happy about it and it's also something that gives me, someone in the performing arts, the opportunity to re-interpret the performing arts again. Because people on the outside can take hold of the real essence and without digressing, just wham right into it.

Toshiki Okada

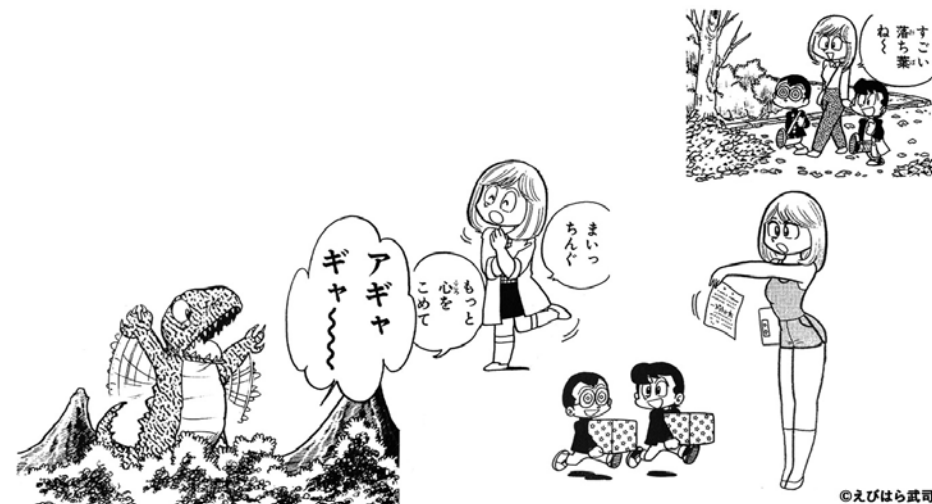
Born in Yokohama in 1973. A playwright, director and novelist, and head of chelfitsch. His radical overturning of existing ideas about theater has garnered attention both in Japan and overseas. *Five Days in March* (2004) won the 49th Kishida Kunio Drama Award, while his debut novel, *The End of the Special Time We Were Allowed*, won the 2nd Oe Kenzaburo Award in 2007. He has served on the jury for the Kishida Kunio Drama Award since 2012 and he published his first book on theaterology in 2013.



## FRINGE企画「使えるプログラム」/Fringe: The Useful Program

9/27(Sat)-10/19(Sun)

■ Bijuu Gallery、京都芸術センター、京都市青少年科学センター  
Bijuu Gallery, Kyoto Art Center, Kyoto Municipal Science Center For Youth



「劇は使える」をコンセプトとする「使えるプログラム」。普段の会話で用いられてもいるこの「劇」という語は何なのか、何で出来ているのか？そして「使える」とはどういうことか？がさまざまな企画を通して、見えてきます。

ゲスト参加者による[上演系]企画はすべて「インストラクション(指示)」を含んで構成されており、それが作用することによって劇が成立します。いかなる意味でもショーケースではなく、別な場所へ持ち出され、上演されること、使われることをも企図しています。加えて、[ワークショップ系]において彼らの制作方法・思考に触れることで、構想をさらに超えて展開していく可能性も拓かれるでしょう。そしてまた、[記録集]において公開されるワークショップのプランは、[上演系]のインストラクションとともに、コンセプトを検討する有効な事例となっていきます。

今年度は、上掲の『まいっちゃんマチコ先生』が示すようなさまざまなテーマが扱われ、彼女の出身地でもある京都を見つめなおします。2012年10月の公開プレゼンテーションを経て演出家・羽鳥嘉郎の企画立案により昨年始動、異質さまざま際立つプログラムにぜひ、ご参加ください。

羽鳥嘉郎

With the concept of "Theater is useful", the program aims through various kinds of activities to examine what "theater", a word we use in everyday conversation means, what it is made of, and what it means to be "useful". Each of the performances in the program includes instructions and by implementing them, "theater" comes about. The instructions are also intended to be able to be performed by different people in different contexts. The performance program is in no sense a showcase merely to be appreciated. It is something to be disseminated and used. Each idea has the potential to be developed further when audiences encounter the artists' concepts and artistic strategies through the workshops in the program. The documents to be published after the festival period will include the plans for the workshops. Along with the instructions, the plans will form clues for audiences to understand what is happening behind each work. This year will deal with various themes shown in *Miss Machiko*, a Japanese manga series (see above), and reexamine the eponymous character's hometown of Kyoto. Proposed by Yoshiro Hatori and selected as a Fringe program at the Open Presentation event in October 2012, this is the second year of the program. Come and enjoy these challenging works.

Yoshiro Hatori

[上演系/Performance]

山内朋樹 / Tomoki Yamauchi  
『仮止めされた風景』  
/ *Temporary Sustained Landscape*

9/27 (Sat)-10/5 (Sun) 12:00-19:00  
¥500

神楽パフォーマンス / Kagura Performance

9/27 (Sat), 10/4 (Sat) 13:00-  
¥1,500

■ Bijuu Gallery 京都市下京区木屋町通四条下ル船頭町194 村上重ビル5F / 5F, 194 Sendo-Cho, Shimogyo-ku, Kyoto

[ワークショップ系/Workshop]

山内朋樹 / Tomoki Yamauchi  
『舞台としての庭。その生態系を探る』  
/ *Garden as a stage. And its Ecosystem*

9/28 (Sun), 10/3 (Fri) 13:00-(一回のみの参加可)

■ 京都市内各所の庭園 / Gardens in Kyoto City

¥1,000(別途拝観料が必要 / Admission for each garden is required separately)

要申込(当日朝10:00まで受付。集合場所は予約完了時にお知らせ) / Reservation required. Till 10:00am on the day of the tour.

庭とは何で出来ているのか、という思考から庭師の山内朋樹は、植物を排した「石庭」をつくりだす。また、庭というものはどんな管理がなされているのか、オリジナルが維持されるとはどういう事態なのか、彼とともに市内の庭園を巡り考えるワークショップも実施する。

In an attempt to understand what exactly defines the concept of garden, Tomoki Yamauchi, a gardener, creates a "stone garden" with no plants in it. In his workshop, Yamauchi tours gardens in the city aiming to explore the idea of managing a garden and what it means to maintain something in its original state.

山内朋樹 / Tomoki Yamauchi

庭師(草木の使代表)。美学、庭園史研究。在学中に庭師をはじめ、研究の傍ら独立。京都を中心に関西圏で庭をつくる。主な仕事に嵐山のカフェギャラリー、論考に「火の風景——庭、あるいは遷移の傍らへ逸れる」(現代思想2013年10月号)などがある。



Gardener. President of Somoku no Tsukai. Researcher in aesthetic and garden history. Started his career as a gardener while in school and became independent while working as a researcher. His works are mainly in Kansai, including a café gallery in Arashiyama and more. His "Landscape of fire: Garden or deviating on the side of transition" was published in *Gendai Shiso*, in October 2013.

神楽パフォーマンス ゲスト / Guest Kagura performer

高安美帆 / Miho Takayasu

俳優(エイチエムビーシアターカンパニー所属)、巫女(堀上愛宕神社所属)。8歳から浪速神楽をはじめ。2012年takayasu kaguraとして個人活動を開始しドイツ・ポーランド・イタリア・アメリカ・日本で神楽パフォーマンスを発表。

Actor with Hmp theater company. Female attendant at Horikami Atago Shrine. Started to dance Naniwa Kagura from the age of 8. Established Takayasu Kagura in 2012 and has performed in Germany, Poland, Italy, the U.S and Japan.

[上演系/Performance]

武藤大祐 + 国内ダンス留学@神戸  
/ *Daisuke Muto + Dance Exchange @Kobe*  
『国内ダンス留学@神戸「ポストコロナル振付理論&実践」成果発表』  
/ *Dance Exchange @Kobe*  
『*Post-colonial Choreographic Theory & Practice*』  
Final Presentation

9/29 (Mon) 18:00-

■ 受付場所 / Sign-up Desk: 京都芸術センター / Kyoto Art Center

¥500

振付とは「人を動かすこと」である、と、シンプルな前提のもとに立つなら、振付の領域はきわめて広い。例えば都市計画も、広告も、ウェブデザインも振付である。神戸で実施するワークショップから、どんなアイデアが生まれて来るか、その結果を共有しつつ議論に供す。

If you define choreography simply as a "way to move people", its spectrum is pretty broad. You could even say urban planning, advertising and web design are choreography. This workshop in Kobe will gather more ideas and discuss the possibilities of choreography.

武藤大祐 / Daisuke Muto

群馬県立女子大学文学部准教授(美学、ダンス史・理論)。現在の研究課題は、20世紀のアジアを軸とするダンスのグローバル・ヒストリー、および新しい振付の理論。韓国のダンス月刊誌で時評を連載。Indonesian Dance Festival(ジャカルタ)共同キュレーター。国内ダンス留学@神戸で講師を務める。



Associate professor at Faculty of Literature, Gunma Prefectural Women's University. His recent research is on the global history of dance focused on Asia and new choreographic theory. Writes a column for a Korean dance magazine, MOMM. Co-curator at Indonesian Dance Festival. He is a lecturer at Dance Exchange @Kobe

国内ダンス留学@神戸 / Dance Exchange @Kobe

NPO法人DANCE BOXが企画制作を行う、プロの振付家・ダンサー・制作者として活動していくことを目標に、作品づくりと上演までのプロセスを学ぶプログラム。2014年7月末から始まった第三期では、計9人が学んでおり、2015年1月と3月に成果上演を予定している。

Presented by NPO Dance Box, the program, in which one can learn the whole production process from creating a piece to organizing a stage performance, aims to foster professional choreographers, dancers and producers. For its third term, starting in July 2014, nine participants enrolled in the program will perform in January and March, 2015.



【上演系 / Performance】

遠藤水城 × 橋本聡

/ Mizuki Endo × Satoshi Hashimoto  
(タイトル未定) / \*TBD

10/10 (Fri) - 10/12 (Sun) 受付時間: 9:00-18:00  
受付場所: 詳細は当日「使えるプログラム」ウェブサイト [www.kyoto-ex-useful.jp] にてご確認ください。

■ 京都市青少年科学センター 京都市伏見区深草池ノ内町13 / Kyoto Municipal Science Center For Youth  
13 Fukakusaikenouchi-cho, Fushimi-ku, Kyoto  
9:00-17:00 (入館は16:30まで / Admission until 16:30)  
※他会場あり

¥500 (京都市青少年科学センターなどの入場料は別途必要 / Admission for the Science Center is required separately)

科学館の展示・美術の展示・演劇・ダンスなどへの鑑賞の態度のみならず、ひろく人々のアプローチを変えるようなインスタレーションが構想され、発表される。当日に「使えるプログラム」ウェブサイトにて告示される受付場所にてインスタレーションを受け取り、新たなアクセスをなしてみてください。

In this program, participants explore broader ways of approaching the audience, crossing the boundaries of science museum, art museum and theater. To begin, instruction is given at the Sign-up Desk, which is announced on 10/10.

遠藤水城 / Mizuki Endo

インディペンデント・キュレーター。2005年、若手キュレーターに贈られる国際賞 Lorenzo Bonaldi Art Prizeを受賞。現在、東山アーティスト・プレイズメント・サービスマネジメント・ディレクター、国東半島芸術祭レジデンスプログラム・ディレクター。



Independent Curator. In 2005, he received Lorenzo Bonaldi Art Prize, an international prize for young curators. Executive Director at Higashiyama Artists Placement Service. Residence Program Director at Kunisaki Art Festival.

橋本聡 / Satoshi Hashimoto

1977年生まれ。2012年より基礎芸術 Contemporary Art Think-tank。最近の発表に2010年「行けない、来て下さい」ARCUS、グループ展「もっと動きを一振付師としてのアーティスト」広島市現代美術館。



2012年「独断と偏見: 観客を分けます」国立新美術館、14のタブ「偽名」東京国立近代美術館。2017年「未来芸術家列伝IV」など。Born in 1977. Member of Contemporary Art Think-tank since 2012. Recent work includes the solo show "Can't Go, Please Come" (2010, ARCUS), and the group shows "More of an activity: the artist as choreographer" (2010, Hiroshima City Museum of Contemporary Art), "Arbitrary Decisions and Prejudices: I Divide the Audience" (2012, The National Art Center, Tokyo), "14 EVENINGS" (2012, National Museum of Modern Art, Tokyo), "Lives of the Future Artists IV" (2017) and more.

【上演系 / Performance】

『祝日: 体育の日』 / A National Holiday: Sports Day

10/13 (Mon)

ハッピーマンデー制度適応前の本来の日付は10/10、東京オリンピックの開会式の日を、記念し毎年祝っているのは、どういうことなのか? 何をしていることになるのか?

The original date for Sports Day was 10/10, before "Happy Monday" was enacted, commemorating the day of the opening ceremony for the Tokyo Olympics. What is it that we commemorate? What is the real meaning of Sports Day?

【上演系 / Performance】

米光一成 / Kazunari Yonemitsu

『想像と言葉』 / Imagination and Word

10/18 (Sat) 18:00-  
■ 京都芸術センター フリースペース  
/ Kyoto Art Center Multi-purpose Hall  
¥1,000

米光一成 / Kazunari Yonemitsu

1964年生まれ。ゲームデザイナー、立命館大学映像学部教授。代表作『ぶよぶよ』『パロック』。近年は雑誌連載や宣伝会議の教育講座などにて表現や編集の講師を務めるほか、様々なイベントのオーガナイズが注目を集める。「使えるプログラム」2013では『思考ツールとしてのタロット』などを実施。



Born in 1964. Game designer. Professor at College of Image Arts and Science, Ritsumeikan University. Creator of "Puyo Puyo", "Baroque" and more. Writes columns for magazines and lectures at educational programs hosted by Sendenkai. Also organizes various kinds of events. In 2013, he hosted Tarot as a "Thinking Tool" as a part of "The Useful Program"

40枚の言葉チップから選ばれた3つの言葉がプレイヤーの想像力を刺激し、さらなる言葉を生み出すゲーム。予想を超えたイメージネーションと、「あ、それだったか!」という驚きと、一致したときの共感と歓喜。発想が発火する体験をぜひ。

A game in which three words chosen from 40 word-chips stimulates players' imagination and generates more words. Enjoy your unexpected imagination, surprise and delight when you find a match.

各プログラムのお申込:

・使えるプログラムウェブサイト www.kyoto-ex-useful.jp/ticket  
・E-mail info@kyoto-ex-useful.jp  
・Tel 075-213-5839 (KYOTO EXPERIMENT事務局)  
Reservation: www.kyoto-ex-useful.jp/ticket or mail to info@kyoto-ex-useful.jp

プログラムの詳細はこちら  
www.kyoto-ex-useful.jp  
(Japanese only)

使えるプログラム

プロジェクトメンバー: 印牧雅子、江口正登、ササキユイチ、佐藤小実季、西澤諭志、羽鳥嘉郎、茂木秀之  
支援系B参加者: 小田嶋裕太、杉本真理江、中川和子、浜上真琴

The Useful Program

Project members: Masako Immaki, Masato Eguchi, Yuichi Sasaki, Komiki Sato, Satoshi Nishizawa, Yoshiro Hatori, Hideyuki Mogi  
Support B: Yuta Odashima, Marie Sugimoto, Sawako Nakagawa, Makoto Hamagami

FRINGE企画: オープンエントリー作品 / Fringe: Open Entry Performance

KYOTO EXPERIMENT 2014では、好評をいただいた昨年に引き続き、FRINGE企画「オープンエントリー作品」としてKYOTO EXPERIMENT 2014開催期間中に京都府下で発表される作品を一挙に紹介します。条件を満たせば、ジャンル不問・審査なしで登録可能。エントリーされたのは前回の20作品を越える25作品! 拠点・ジャンルも多彩なラインナップ。京都のどこかでなにかに必ず出会う秋が、再び。

Following last year, Kyoto Experiment 2014 introduces various works performed in Kyoto during the festival as a part of our Fringe program. As long as it meets the terms for entry, any work, regardless of genre, can enroll without screening. For this year, a total of 25 works, larger than last year's 20, are enrolled. A variety of venues and genres await you. Enjoy autumn days with the arts in Kyoto.

01

● Tokyo | Theater  
富士山アネット / Manos.

Fujiyama Annette / Manos.

『醜い男』

The Ugly One

9/26 (Fri) 19:30-  
9/27 (Sat) 15:00-, 19:30-  
9/28 (Sun) 11:00-, 15:00-  
■ アトリエ劇研  
atelier GEKKEN

9/28 (Sun) 14:00-, 17:00-  
9/29 (Mon) 19:30-  
■ P-act

04

● Kyoto | Music  
中川裕貴、バンド

Yuki Nakagawa, band

『音楽とたたかうこと / たたかわないこと / その廻りの賭け事』  
Struggle against "music" / not work for / gambles around it

9/29 (Mon) 19:30-  
■ UrBANGUILD

02

● Kyoto | Dance  
蛇香

Jakow

『蛇香祭』

Jakow Festival

9/27 (Sat) 19:30-  
■ UrBANGUILD

05

● Kyoto | Theater  
P-act企画 (ドラマ組合)

P-act project [Dramakumiai]  
『ミーム・コーポレル・ドラマティック研究会 (ドラマ組合) 成果発表会』  
Corporeal Mime recital by study group [Dramakumiai]  
10/1 (Wed) 19:00-  
■ P-act

03

● Kyoto | Reading  
猫会議

Nekokaigi

〜シリーズ〜日本の美味しいことば  
たち〜その舌〜『日本ノ<sup>フシギ</sup>靈異ナ話』  
nihon no fushigi na hanashi

06

● Tokyo + Nagoya | Theater  
Theatre Company shelf  
『shelf volume 18 [deprived]』

10/2 (Thu) 19:00-  
10/3 (Fri) 15:00-, 19:00-  
■ ARTZONE

07

● Kyoto | Tryout  
KAIKA 『gate#12』

10/2 (Thu) 19:30-  
10/3 (Fri) 19:30-  
10/4 (Sat) 14:00-, 19:30-  
10/5 (Sun) 11:00-, 16:30-  
※日時によりプログラムが異なります。  
■ KAIKA

08

● Kyoto | Reading+Music+Live  
Painting  
ryotaro + 火田詮子 + ヨコヤマ 茂未  
ryotaro + sennko hida + shigemi  
yokoyama  
『おはなしビュービュー』  
ohanashi-byu-byu-  
10/3 (Fri) 19:30-  
■ UrBANGUILD



01



02



03



04



05



06



07



08

09

● Kyoto | Theater  
**ドキドキぼーいず**  
**Dokidoki Boys**  
**ドキドキぼーいずの大進撃 #04**  
『ハムレットみたいなもの』  
*dokidokiboys's large attack #04*  
*A thing like Hamlet*  
 10/3 (Fri) 19:00-  
 10/4 (Sat) 14:00-, 19:00-  
 10/5 (Sun) 14:00-, 19:00-  
 10/6 (Mon) 14:00-  
 ● 元・立誠小学校 音楽室  
 Former Rissei Elementary School

10

● Kyoto, Berlin | Performance  
**schatzkammer feat. Aiko Okamoto**  
『おなか』  
**Onaka**  
 10/4 (Sat) 14:00-  
 10/5 (Sun) 14:00-  
 ● a・room

11

● Paris | Music  
**Hugues Vincent**  
『cello night』  
 10/6 (Mon) 19:30-  
 ● UrBANGUILD

12

● Kyoto | Dance  
**ミズモノ**  
**MIZUMONO**  
『ミズモノ + Hugues Vincent』  
**MIZUMONO + Hugues Vincent**  
 10/8 (Wed) 19:30-  
 ● UrBANGUILD

13

● Munich | Installation  
**仲島香 / 岡本愛子 / ビーター・ケルス**  
**テン**  
**Kaori Nakajima / Aiko Okamoto**  
**/ Peter Kersten**  
『車輪の道』  
*The Way of the Wheel*  
 10/9 (Thu)-12 (Sun) 12:00-20:00  
 ● 三谷さんの家  
 Mitani House

14

● Kyoto | Music + Video art  
**Ensō Watt**  
『The Sanka's Autumn Ritual』  
 10/10 (Fri) 19:30-  
 ● UrBANGUILD

15

● Kyoto | Theater  
**こみかさ**  
**comikasa**  
『恋愛戯曲』  
*play of love*  
 10/10 (Fri) 18:30-  
 10/11 (Sat) 13:00-, 18:30-  
 10/12 (Sun) 13:00-, 18:30-  
 10/13 (Mon) 14:00-  
 ● KAIIKA

16

● Kyoto | Theater  
**THE GO AND MO'S**  
『山方の森』  
**Yamagata's Forest**  
 10/11 (Sat) 19:00-  
 10/12 (Sun) 13:00-, 18:00-  
 10/13 (Mon) 13:00-, 17:00-

● 香坪シアタースワン  
 Hitotsubo theater swan

17

● Tokyo | Theater  
**武田力**  
**Riki Takeda**  
『わたしたちになれなかった、わたしへ』  
*Dear myself who could not be "Us"*  
 10/12 (Sun) 17:00-  
 10/13 (Mon) 17:00-  
 ● 法雲寺  
 Houn-ji Temple

18

● Kyoto | Dance+Music  
**今村達紀**  
**Tatsunori Imamura**  
『First of all, as the story goes..』  
 10/15 (Wed) 19:30-  
 ● UrBANGUILD

19

● Kyoto | Theater  
**Hauptbahnhof BUS**  
『こいばかり』  
**Selected Songs of Love**  
 10/16 (Thu) 16:00-, 19:00-  
 ● 恵文社COTTAGE  
 Keibunsha COTTAGE

20

● Osaka | Mime  
**岡村渉 / 尾上一樹 / 黒木夏海 / 谷啓吾**  
**Wataru Okamura / Kazuki Onoue / Natsumi Kuroki / Keigo Tani**  
『r』  
 “

10/16 (Thu) 15:00-, 19:30-  
 10/17 (Fri) 13:00-, 18:00-  
 ● KAIIKA

21

● Kyoto | Theater  
**笑の内閣**  
**laugh cabinet**  
**福島第一原発舞台化計画**  
『超天晴! 福島旅行 - 黎明編』  
*Fukushima No.1 nuclear power plant the stage plan: Super admirable! Trip to Fukushima*  
 10/16 (Thu) 19:00-  
 10/17 (Fri) 19:00-  
 10/18 (Sat) 14:00-, 19:00-  
 10/19 (Sun) 11:00-, 18:00-  
 10/20 (Mon) 14:00-, 19:00-  
 10/21 (Tue) 14:00-, 19:00-  
 ● アトリエ劇研  
 atelier GEKKEN

22

● Tokyo | Theater  
**劇団ドクトベツバズ**  
**Dctpeppers Theatre**  
『ヒュプリス』  
**Hybris**  
 10/17 (Fri) 19:00-  
 10/18 (Sat) 14:00-, 19:00-  
 10/19 (Sun) 14:00-  
 ● 人間座スタジオ  
 Ningen-za studio

23

● Kyoto | Performance  
**ユリイカ百貨店+サギノモリラボ**  
**Theatrical Company Yuriika**  
**Hyakkaten + Saginomori Lab.**  
『TWO』  
 10/18 (Sat) 15:00-, 18:00-  
 10/19 (Sun) 11:00-, 14:00-  
 ● 元・立誠小学校 音楽室  
 Former Rissei Elementary School

24

● Kyoto | Dance  
**Lulu + ヤザキタケシ + 由良部正美 + Anthony Hutchinson**  
**Lulu + Takeshi Yazaki + Masami Yurabe + Anthony Hutchinson**  
『クロスの刹那』  
**Kurosunosetsuna**  
 10/19 (Sun) 14:00-, 18:00-  
 ● KAIIKA

25

● Kyoto | Art festival  
**京都銭湯芸術祭実行委員会**  
**Kyoto Sento Art Festival Executive Committee**  
『京都銭湯芸術祭2014』  
**Kyoto Sento Art Festival 2014**  
 9/27 (Sat) - 10/26 (Sun)  
 ● 紫野温泉、門前湯、加茂湯、若葉湯、大徳寺温泉、龍宮温泉、京極湯、長者湯  
 Murasakino Onsen, Monzen Yu, Kamo Yu, Wakaba Yu, Daitokuji Onsen, Ryugu Onsen, Kyogoku Yu, Choja Yu

Notes:

※詳細は、KYOTO EXPERIMENT公式ウェブサイトおよび各主催団体のウェブサイトをご参照ください。

※KYOTO EXPERIMENTでは、オープンエントリー作品のチケットを取り扱っておりません。チケットに関しては、直接主催団体にお問合せください。

\* For more information, see the website [www.kyoto-ex.jp] or each company's website.

\* Tickets only available from each company.



09



10 image by Aiko Okamoto



11



12 photo: Kinumi Yabumoto



13



14 image by Samuel Andre



15



16 photo: Ai Nakagawa



17

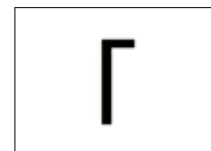


18

photo: Koichiro Kojima



19



20



21



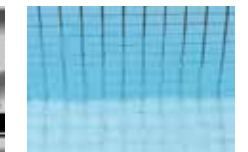
22 illustration: Ryo Taniguchi



23



24



25 photo: Yuki Moriya

## 関連イベント / Related Events

### contact Gonzo:《黒い家》の壁

□ 9/18 (Thu) - 9/28 (Sun) 月曜休

11:00 - 19:00 (金曜日は20:00まで)

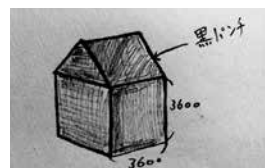
黒い壁から聞こえてくるのは、今回のプロジェクトに向けて生成されていくGonzoの身体論。2014年4月に発表した《黒い家》からさらに展開した新作を展示します。

◆ Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・バルク]

京都市中京区三条通御幸町弁慶石町48 三条ありもとビル

¥ 無料

協力: Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・バルク]



### 『ジャパン・シンドローム』アーティストトーク

□ 9/29 (Mon) 15:00-16:30

◆ 元・立誠小学校 職員室

¥ 無料

申込: お電話 (075-213-5839) もしくは公式ウェブサイト内申込フォーム (www.kyoto-ex.jp) にて KYOTO EXPERIMENT 事務局までお申込みください。

### 村川拓也アーティストトーク

□ 10/6 (Mon) 19:00-

◆ 京都芸術センター ミーティングルーム 2

¥ 無料

申込: お電話 (075-213-5839) もしくは公式ウェブサイト内申込フォーム (www.kyoto-ex.jp) にて KYOTO EXPERIMENT 事務局までお申込みください。

### 「京都の暑い夏 / Dance Scape」OPEN WS

ルイス・ガレー ダンスワークショップ

□ 10/12 (Sun), 10/13 (Mon)

◆ 京都市東山いきいき市民活動センター

京都市東山区三条通大橋東2丁目下る巽町442-9

¥ ¥2,500 / クラス (要申込)

申込・お問合せ: 一般社団法人ダンスアンドエンヴェイロメント Tel 070-6500-7242 E-mail info@hotsummerkyoto.com  
主催: 一般社団法人ダンスアンドエンヴェイロメント、文化庁 (平成26年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業)  
共催: KYOTO EXPERIMENT

□ 10/12 (Sun) 18:30- レクチャー

10/13 (Mon) 17:00- シンポジウム

タデウシュ・カントル生誕100周年記念事業イベント「レクチャー&シンポジウム」

20世紀後半に前衛演劇の革命を巻き起こしたポーランドの異才タデウシュ・カントルを改めて読み直す記念事業 (2015年10月-11月開催予定) に先駆け、貴重な映像資料を交えたレクチャーとシンポジウムを開催します。

講師: 鴻英良 ほか

◆ 京都芸術センター 講堂

¥ 各¥500 (要申込)

企画: 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

主催: 京都市立芸術大学

共催: KYOTO EXPERIMENT

申込・お問合せ: 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

Tel 075-253-1509 Fax 075-253-1510

E-mail gallery@kcua.ac.jp



タデウシュ・カントル (撮影: 安齊重男)

### 小劇場レビューマガジン「ワンダーランド」

劇評を書くセミナー KYOTO EXPERIMENT 2014 編

□ 11/3 (Mon) 14:00-16:30

「観客が観る、観客が書く」をモットーに、2004年より活動してきた小劇場レビューマガジン「ワンダーランド」による劇評セミナー。KYOTO EXPERIMENT 2014で上演される作品 (フリンジを含む) を対象に参加者が劇評を書いて持ち寄り、講師を交え合評会を行います。

講師: 森山直人 (演劇批評家、京都造形芸術大学舞台芸術学科教授、京都国際舞台芸術祭実行委員長)

◆ 京都芸術センター 和室「明倫」

¥ ¥2,000 (聴講は¥1,500) ※公演チケット代は含みませんので各自ご購入ください。

定員: 20名 (先着順、聴講者含む)

申込: ワンダーランドサイト (www.wonderlands.jp) よりお申込みください。

お問合せ: ワンダーランドセミナー係 info@wonderlands.jp  
Tel 042-422-5219

主催: ワンダーランド (小劇場レビューマガジン)

共催: KYOTO EXPERIMENT

### contact Gonzo: Wall of the Black House

□ 9/18 (Thu) - 9/28 (Sun) 11:00-19:00

Closed on Mondays. Open until 20:00 on Fridays

What you can hear from the black wall is a Gonzo-esque body theory, created for this project. This new work will be exhibited that is a development from their previous work *Black House*, first shown in April 2014.

Venue: Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.]

48, 2F Benkeishi-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

Admission: Free

Co-organized by: Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.]

### “Japan Syndrome” Artist Talk

□ 9/29 (Mon) 15:00 - 16:30

Venue: Former Rissei Elementary School Teachers' room

Admission: Free

Reservation: Call Kyoto Experiment Office (075-213-5839) or send application form at the official website [www.kyoto-ex.jp]

### Artist Talk by Takuya Murakawa

□ 10/6 (Mon) 19:00-

◆ Kyoto Art Center Meeting room 2

¥ Free

Reservation: Call Kyoto Experiment Office (075-213-5839) or send application form at the official website [www.kyoto-ex.jp]

### Hot Summer in KYOTO / Dance Scape

“Dance Workshop by Luis Garay”

□ 10/12 (Sun), 10/13 (Mon)

◆ Higashiyama Communication Design Studio

¥ ¥2,500 (Reservation required)

Reservation inquiry: Dance & Environment

Tel 070-6500-7242 E-mail info@hotsummerkyoto.com

Presented by: Dance & Environment, the Agency for Cultural Affairs

Co-presented by: Kyoto Experiment

### Tadeusz Kantor Retrospective : Lecture & Symposium

□ 10/12 (Sun) 18:30- Lecture

10/13 (Mon) 17:00- Symposium

Prior to the commemorative exhibition for Tadeusz Kantor, the Polish painter renowned for his revolutionary theatrical performances in the late 20th century (Oct. - Nov. 2015), the lecture and symposium includes rare video archive materials.

Lecturer: Hidenaga Otori

◆ Kyoto Art Center Auditorium

¥ ¥500 each event (reservation required)

## 提携プログラム / Affiliated Event

### 日米ニュー・コネクション・プロジェクト / JP-U.S. New Connection Project

アメリカ人振付家、アリソン・オアと日本人アーティストグループ、hyslom (ヒスロム) が、「コミュニティの変容」をテーマに、パフォーマンスや展示を行います。

アリソン・オア×日本女子プロ野球チーム「フローラ」

ダンスパフォーマンス『PLAY BALL KYOTO』

□ 9/23 (Tue) 18:00以降随時開場、

ダンス作品は19:00頃より

◆ わかさスタジアム京都 (京都市右京区西京極新明町)

¥ 無料 (最大1万人)

協力: 日本女子プロ野球リーグ (JWBL)

hyslom 展覧会「美整容—(例えば)を巡る」

□ 9/5 (Fri) - 9/28 (Sun) 10:00-20:00 会期中無休

◆ 京都芸術センター ギャラリー北・南

¥ 無料

※ 10/18 (Sat)、10/25 (Sat) にパフォーマンスを実施

主催: 京都芸術センター

Allison Orr (choreographer) × Flora (Japan Woman's Baseball Team)  
DANCE PERFORMANCE PLAY BALL KYOTO

Produced by: Kyoto City University of Arts Art

Gallery @KCUA

Presented by: Kyoto City University of Arts

Co-presented by: Kyoto Experiment

Reservation inquiry: Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA Tel 075-253-1509 Fax 075-253-1510

E-mail gallery@kcua.ac.jp

### Theater Review Magazine Wonderland

Review Writing Seminar / KYOTO EXPERIMENT 2014

□ 11/3 (Mon) 14:00-16:30

With “Viewed by the audience, Written by the audience” as its motto, Wonderland, a theater review magazine, has hosted review writing seminars since 2004. For this event, participants can bring their own reviews on the works at Kyoto Experiment 2014 and discuss with the instructor and other participants.

Instructor: Naoto Moriyama (Theater Critic / Professor at Kyoto University of Art and Design / Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Chairman)

◆ Kyoto Art Center Japanese-style room “Meirin”

¥ ¥2,000 / ¥1,500 for auditing

\*Ticket for the performance is required separately.

Up to 20 participants

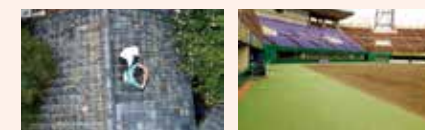
\* First come, first served including auditors.

Reservation: www.wonderlands.jp

Inquiry: info@wonderlands.jp Tel 042-422-5219

Presented by: Wonderland

Co-presented by: Kyoto Experiment



## フェスティバル・ミーティングポイント / Festival Meeting Point

各会場近辺のカフェと提携した、参加アーティストと観客とのコミュニケーションのためのスポット、ミーティングポイントが登場。観劇前後に食事をする休憩場所として、フェスティバルのインフォメーションスペースとしてご利用ください。

In partnership with neighborhood cafes, the festival's "meeting points" offer a spot to enhance communication between artists and spectators of Kyoto Experiment. Enjoy food and drinks before and after performances. You can learn more about the festival as well.

→MAP p76

### ミーティングポイント四条烏丸 Meeting Point Shijo-Karasuma

#### K620 (ケーロクニーマル)

お昼はパスタやピザのランチ、夜はバルとして一日中楽しめるタパスバー。豊富なメニューの中に、フェスティバルのロゴをあしらった期間限定スイーツが登場!

Serving pasta and pizza for lunch and turning into a bar at night, you can enjoy this tapas restaurant around the clock. A special dessert is on the menu during the festival!



京都市下京区烏丸通四条下  
水銀屋町 620  
COCON KARASUMA2F  
COCON KARASUMA2F, 620  
Suiginya-cho, Shimogyo-ku, Kyoto  
営業時間 Open Hours: 11:00-23:00  
(日・祝は22:00まで / Sun. and  
holiday until 22:00)  
Tel 075-353-5644  
www.k620.net

### ミーティングポイント三条木屋町 Meeting Point Sanjo-Kiyamachi

#### Bar Lowo=Tar=Voga

VOGA脚本・演出・音楽家の近藤和見氏がオーナーの深夜まで舞台を語るのに最適な隠れ家的Bar。公演チケットの半券を持参でチャージ(席料)が無料に! 限定メニューもあり。Run by Kazumi Kondo, the director of the theater company VOGA, it is a nice hideaway bar for a late-night discussion on the performing arts. No cover charge for people with a ticket stub from a Kyoto Experiment performance! Special food will be on the menu.



京都市中京区西木屋町通六角下  
北車屋町271-4 森川ビル1F  
1F Morikawa Building, 271-4  
Kitakurumaya-cho, Nakagyo-ku,  
Kyoto  
営業時間Open Hours:  
20:00-翌2:00  
Tel 075-251-2810

### ミーティングポイント北白川 Meeting Point Kitashirakawa

#### prinz

カフェレストラン、ギャラリー、アパートホテル、ブックショップの複合施設。観劇前後、特製スイーツと共に美術や書籍に触れるのはいかがでしょう。

An art complex building with a café, restaurant, gallery, hotel and bookstore. How about stopping by for an art show or checking out the bookstore before or after a performance?



京都市左京区田中高原町5  
5 Tanakatahara-cho, Sakyo-ku,  
Kyoto  
営業時間 Open Hours:  
11:30-23:00  
Tel 075-712-3900  
www.prinz.jp

### ミーティングポイント今出川 Meeting Point Imadegawa

#### Social Kitchen

「21世紀型の公民館」を掲げ2010年にオープン、1Fのカフェは曜日によってお店が変わるユニークなスペース。公演チケットの半券を持参すると素敵な特典が受けられるかも! Embodiment of the idea of a "Community Center for the 21st century", this unique space, opened in 2010, offers a different tenant in the cafe everyday. Bring the ticket stub from a performance and you may / get a special bonus offer!?



京都市上京区相国寺門前町 699  
699 Sokokujimonzen-cho,  
Kamigyo-ku, Kyoto  
営業時間 Open Hours:  
月 Monday: 喫茶文九 / Kissa  
Bunkyo 18:00-23:00 火 Tuesday:  
mitopehica 11:30-17:00 水-日  
Wednesday-Sunday: 精進ごはん  
和香 / Waka 11:30-22:00 (日曜  
のみ17:00まで / Sun. until 17:00)  
hanareproject.net

営業時間や特典の詳細、当日のイベント情報は公式ウェブサイト[www.kyoto-ex.jp]をご覧ください。

## KYOTO EXPERIMENT 2014 チケット+ホテル宿泊プラン

アートを応援する京都の個性豊かなホテルが、公演チケット付きのお得な宿泊プランを企画しました。フェスティバル観劇や京都観光を楽しんだ後は宿でゆっくりとお過ごしいただけます。

### Bijuu 京都市下京区木屋町通四条下船頭町 194



四条木屋町、高瀬川沿いに2013年にオープンしたレジデンス。国内外多数のデザイナーが手がけたインテリアやアメニティを備え、鴨川や東山への眺望を有す、さながら別荘のようなプライベート空間。1日1組限定で宿泊できる114平米のお部屋(5F)と本格的なキッチンのあるファミリー向けのお部屋(3F)(※3Fは10/6オープン予定)を特別価格でご利用いただけます。

● 501(114㎡) デザイナーズルーム  
1泊2日+公演チケット1枚(お1人様あたり)付特別プラン  
¥75,000(1室2名様料金。税別、サービス料込)  
内容:チケット1演目(2枚)+宿泊(朝食付)  
対象期間:9/27-10/18[\*1]

● 301(68㎡) 本格的キッチンを備えたファミリー向けルーム  
1泊2日+公演チケット1枚(お1人様あたり)付特別プラン  
¥60,000(1室2名様料金。税別、サービス料込)  
内容:チケット1演目(2枚)+宿泊(朝食付)  
対象期間:10/6-10/18[\*1]  
※エキストラベッドの追加も可。詳細はお問合せください。

● 501(114㎡) デザイナーズルーム  
2泊3日+公演チケット2枚(お1人様あたり)付特別プラン  
¥145,000(1室2名様料金。税別、サービス料込)  
内容:チケット2演目(4枚)+宿泊(朝食付)  
対象期間:9/27-10/18[\*2]

ご予約・お問合せ: Tel 075-353-0802 www.bijuu.jp  
※チェックイン15:00-19:00、チェックアウト12:00

### ホテルモントレ京都 京都市中京区烏丸通三条下船頭屋町604



京都芸術センターからとても近く、内装にウィリアム・モリスといったアーツ&クラフツのデザイナーズを取り入れ、過去にはアートフェア会場になるなど、アートに造詣が深いホテル。京都観光の拠点として、便利にご利用いただけます。

● 1泊2日+公演チケット1枚(お1人様あたり)付プラン  
・シングル ¥10,000~(1室1名様利用、税込・サービス料込)  
・ツイン ¥9,500~(1室2名様利用、税込・サービス料込)  
上記はお1人様1泊あたりの料金です。  
内容:チケット1演目(1枚)+宿泊(朝食付)  
対象期間:9/27-10/18[\*1]

ご予約・お問合せ: Tel 075-251-7111  
www.hotelmonterey.co.jp/kyoto  
※チェックイン14:00、チェックアウト12:00

### prinz 京都市左京区田中高原町5



大学が多い学生の街、左京区にあり、カフェ・ギャラリー・レストラン・ホテル・BOOKSHOP等の複合施設。デザイナー西堀晋が手がけたアパートのようなホテルで、京都に暮らしているかのような、自分だけの特別な過ごし方をお楽しみいただけます。京都芸術劇場春秋座まで徒歩5分のアクセスも魅力です。

● 木ノ下歌舞伎プラン  
10/11 (Sat) M room(¥23,902/1室2名様)  
L room(¥27,367/1室2名様)  
10/12 (Sun) M room(¥22,275/1室2名様)  
L room(¥25,425/1室2名様)  
内容:木ノ下歌舞伎『三人吉三』公演チケット+ご宿泊プラン  
対象期間:10/11 (Sat), 12 (Sun)

● 地点プラン  
10/18 (Sat) M room(¥23,902/1室2名様)  
L room(¥27,367/1室2名様)  
10/19 (Sun) M room(¥22,275/1室2名様)  
L room(¥25,425/1室2名様)  
内容:地点『光のない。』公演チケット+ご宿泊プラン  
対象期間:10/18 (Sat), 19 (Sun)

ご予約・お問合せ: Tel 075-712-3900 prinz@prinz.jp www.prinz.jp

※宿泊プランの詳細は公式ウェブサイト[www.kyoto-ex.jp]をご覧ください。  
※公式プログラム公演で、宿泊プラン特典チケットを使ってご覧いただける演目がないため、以下日程での宿泊プランはご用意しておりません。  
\*1 1泊:10/6、10/7、10/13 \*2 2泊:10/1-2、10/6-7、10/7-8、10/8-9、10/12-13、10/13-14、10/14-15

NXTSTPは、欧州の舞台芸術フェスティバル間での共同製作およびその巡回公演を促進することを目的に、2007年に発足したパフォーミング・アーツのためのネットワークである。第二期は2012年11月1日から始動。2012年から2017年にわたって、EUの認定文化プログラムとして、5年間の財政サポートが決定している。

第二期の特徴は、ネットワークの更なる飛躍とより幅広い交流を求めて、国境を超えて異なる文化圏から4つのアソシエイト・パートナーを迎えたことにある。その4つである、KYOTO EXPERIMENT、On Marche(マラケシュ)、Panorama Festival(リオデジャネイロ)、Dense Bamako Dance(マリ)は、それぞれ世界から注目されるフェスティバルである。

こうしてネットワークを拡張していくことで、NXTSTPはグローバル化と文化的アイデンティティの相克について再考するきっかけをネットワークの核にもたらさう。アソシエイト・パートナーは、NXTSTPがサポートする作品だけでなく、NXTSTPそのものの機能についても見出ししていくことになる。「外」からの視点を得ることで、ヨーロッパのアイデンティティに関する実り豊かな議論が繰り広げられることを期待している。

NXTSTP is a network European performing arts festivals that came into being in 2007 to provide an extra shot of energy to the co-production and circulation of the performing arts in Europe. The first term of NXTSTP ran from 01 November 2007 to 31 October 2012. The network consisted of 8 of highly established performance arts festivals in Europe.

The second term of NXTSTP (/The Second Generation/) kicked off on 01 November 2012 and has been awarded a five-year funding from the Culture Programme of the European Union (2012-2017).

To extend the exchange of competence and artistic dimension of Next Step even beyond Europe's borders they have selected 4 associated partners from different cultural backgrounds, active in strategic regions of the world, which includes Kyoto Experiment (Kyoto) as well as Festival On Marche (Marrakech), Panorama Festival (Rio de Janeiro) Dense Bamako Dance (Mali).

By opening up the network in this way, Next Step can be an ambassador for the European arts scene of tomorrow, and simultaneously bring the reflection on globalisation versus identity to the core of our own network. The associated partners will discover the functioning of Next Step as well as the productions it supports. They will nourish the debate on European identity with a view from the "outside".

パートナー

Kunstenfestivaldesarts(ブリュッセル)  
Alkantara Festival(リスボン)  
Baltoscandal Festival(ラクヴェレ)  
Dublin Theater Festival(ダブリン)

Göteborgs Dans & Teater Festival(ヨーテボリ)  
Noorderzon(フローニンゲン)  
steirischer herbst festival(グラーツ)  
Théâtre National de Bordeaux en Aquitaine(ボルドー)



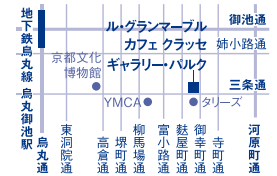
**NXTSTP**



ル・グランマーブル カフェ クラッセ  
Tel: 075-257-6877



ギャラリー・バルク  
Tel: 075-231-0706



京都市中央区三条通御幸町北西角三条ありもとビル  
1F・2F  
阪急河原町駅より徒歩15分 / 三条京阪駅より徒歩15分 / 地下鉄東西線京都市役所前駅より徒歩5分

# ロームシアター京都

ROHM Theatre Kyoto

2016年1月オープン!

1960年の開館以来、多くの方に愛されてきた京都会館は、2016年1月、「ロームシアター京都」としてリニューアルオープンします。音楽、演劇、伝統芸能等、幅広い舞台芸術の拠点として生まれ変わる新しい劇場に、どうぞご期待ください!

施設概要

|   |   |  |
|---|---|--|
| <b>メインホール</b><br>2005席                      | <b>サウスホール</b><br>716席                     | <b>ノースホール</b><br>フラットスペース<br>約200席(仮設)       |
| <b>パークプラザ</b><br>レストランやブック&カフェが併設された賑わいスペース | <b>プロムナード</b><br>待ち合わせ等にも便利で、通り抜け可能な共通ロビー | <b>ローム・スクエア</b><br>野外イベントが開催可能な、ロームシアター京都の中庭 |

【お問合せ】ロームシアター京都 開設準備室(公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団)  
TEL.075-746-3355(平日9:00~17:00) <http://www.kyoto-ongebun.jp/rohmtheatrekyoto/>

# NUIT BLANCHE KYOTO 2014

ニュイ・ブランシュ KYOTO 2014  
~パリ白夜祭への架け橋~ 現代アートと過ごす夜

10月4日(土) 18:00~ 入場無料

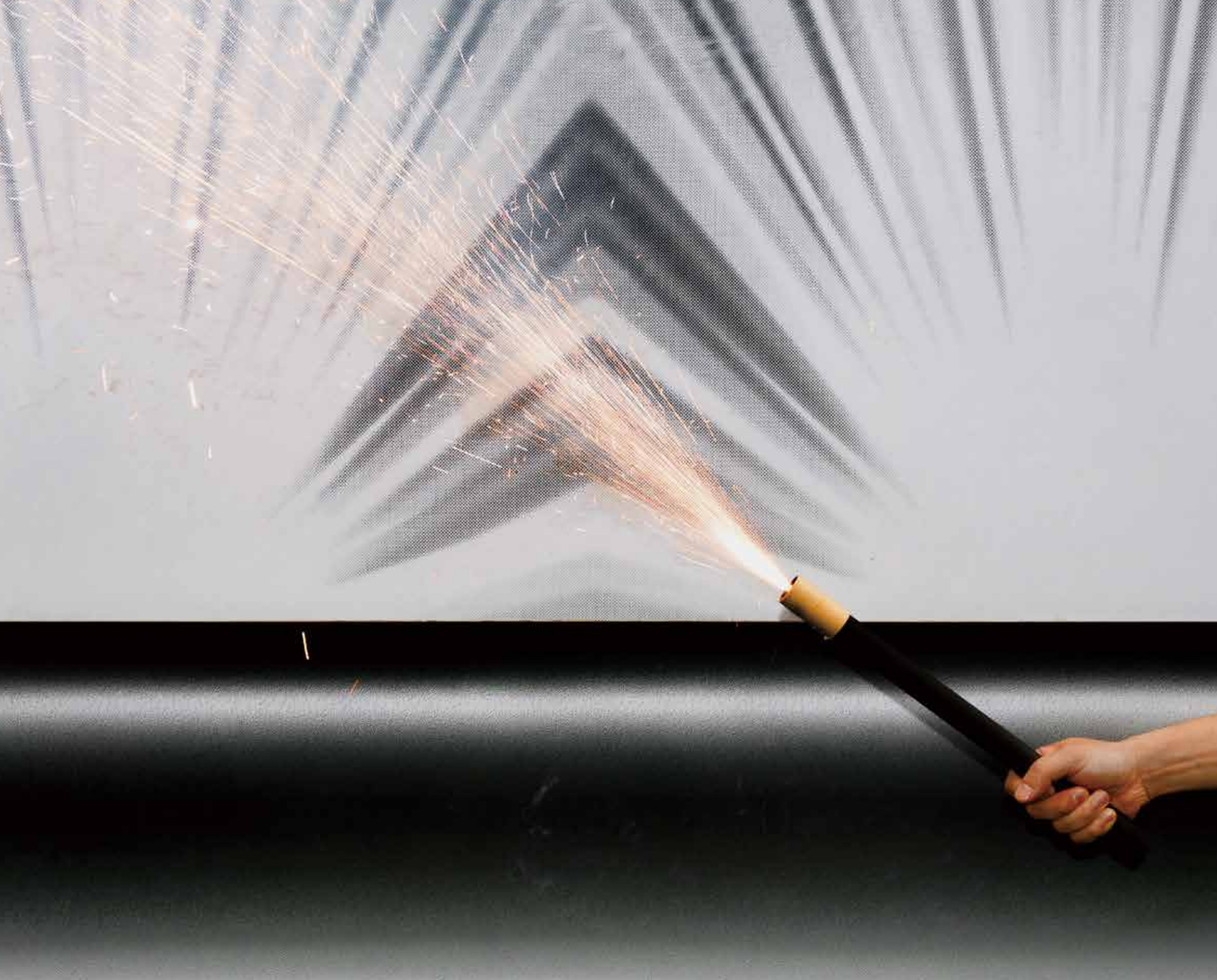
[www.nuitblanche.jp](http://www.nuitblanche.jp)

「ニュイ・ブランシュ(白夜祭)」は、パリ市が毎秋行なう一夜限りの現代アートの祭典。パリの姉妹都市・京都では、日仏の現代アートを無料で楽しめる「ニュイ・ブランシュ KYOTO」を開催します。パフォーマンス、ライブ、プロジェクト・マッピング、展示、ダンスなど、多彩なプログラムが京都の夜を彩ります。



会場: 京都国際マンガミュージアム / アンスティチュ・フランセ関西 / ヴィラ九条山 / 京都芸術センター / 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA / 地下鉄烏丸御池駅構内 / 閑臥庵 / 元藤平陶芸 / 大西清右衛門美術館 / かも添 / Sfera / 清課堂ギャラリー / Gallery C.A.J. / ホテル アンテルーム 京都 / 京都伝統工芸館 / 京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab アネックス / 東山アーティスト・プレシメント・サービス(HAPS) / 京都造形芸術大学 ARTZONE / 三条インテリアサロン+唐長11代目ギャラリー / 愛染工房 / 京都デザインハウス、他

主催: 京都市、アンスティチュ・フランセ関西(旧 関西日仏学館)



**主催**  
京都国際舞台芸術祭実行委員会(京都市、京都芸術センター、公益財団法人京都市芸術文化協会、京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)

**共催**  
立誠・文化のまち運営委員会、京都府立府民ホール“アルティ”

**協力**  
株式会社エクザム、Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・バルク]、K620、四条紫栄会商店街振興組合、Social Kitchen、Bar Lowo=Tar=Voga、prinz、株式会社村上重本店 / Bijuu、ホテルモントレ京都、八坂神社参道 祇園商店街振興組合

**協賛**  
HI/EIDO Asahi アサヒビール株式会社

**助成**  
平成26年度文化庁国際芸術交流支援事業 

**認定**  
公益社団法人企業メセナ協議会 

**京都国際舞台芸術祭実行委員会**

**委員長**：森山直人(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター主任研究員/京都芸術センター運営委員)

**副委員長**：富永茂樹(公益財団法人京都市芸術文化協会業務執行理事/京都大学人文科学研究所教授)

**委員**：  
天野文雄(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター所長・教授)  
篠原資明(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)  
畑律江(毎日新聞大阪本社学芸部専門編集委員)  
山本ひとみ(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団事務局長)  
吉岡久美子(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課担当課長)  
吉田真稚恵(公益財団法人京都市芸術文化協会専務理事)

**監事**：  
秋山正俊(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課長)  
長谷川昌史(公益財団法人京都市芸術文化協会事務局長)

**顧問**：  
太田耕人(演劇評論家/京都教育大学副学長)  
茂山あきら(狂言師/NPO法人京都アーツミーティング理事長)  
千宗室(裏千家家元)  
建畠哲(公益財団法人京都市芸術文化協会理事長/京都市立芸術大学学長)  
平田オリザ(劇作家・演出家/劇団「青年団」主宰)  
渡邊守章(演出家/京都造形芸術大学客員教授/東京大学名誉教授)

**京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局**

プログラムディレクター：橋本裕介  
事務局長：垣脇純子  
事務局：門脇俊輔、村上翔子、和田ながら  
広報：多胡真佐子、西谷枝里子  
制作：飯川恭子、井出亮(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)、岩村空太郎(京都芸術センター)、小倉由佳子、川崎陽子、川原美保(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)、芝田江梨(京都芸術センター)、長野夏織(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、西尾咲子(京都芸術センター)  
テクニカル・コーディネーター：大鹿展明、尾崎聡、夏目雅也  
インターン：海原悠花、山本彩織、李善姫  
翻訳：ウィリアム・アンドリュース、板井由紀、オリヴィエ・クリシャ、ジャスティス・ウォーレン  
ドキュメントコーディネーター：竹内厚  
アートディレクション：原田祐馬(UMA/design farm)  
デザイン：山副佳祐(UMA/design farm)  
Webディレクション：UNGLOBAL STUDIO KYOTO  
Webデザイン：TRACE  
Webプログラム・Webコーディング：FLAM(桐谷典親)

京都国際舞台芸術祭アドバイザーボード：  
井手上春香(NPO法人子どもとアーティストの出会い理事長)  
小崎哲哉(編集者/REALTOKYO、REALKYOTO発行人兼編集長)  
古後奈緒子(舞踊研究・批評/dance+)  
萩原麗子(京都芸術センター)

**Organized by:**  
Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee (Kyoto City, Kyoto Art Center, Kyoto Arts and Culture Foundation, Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design, Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation)

**Co-organized by:**  
Rissei Cultural City Steering Committee, Kyoto Prefectural Citizens' Hall ALLT

**In cooperation with:** ekzm Co., Ltd, Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.], K620, Shijo Han'eikai Shopping Street Promotion Association, Social Kitchen, Bar Lowo=Tar=Voga, prinz, Murakamiju Honten/Bijuu, Hotel Monterey Kyoto, Gion Shopping Street Promotion Association

**Sponsored by:**  
Shiseido Co., Ltd., Asahi Breweries, Ltd.

**Supported by:**  
the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2014

**Approved by:**  
Association for Corporate Support of the Arts

**Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee**

**Chairman:** Naoto Moriyama (Theater critic / Senior Researcher of Kyoto Performing Arts Center)

**Vice Chairman:** Shigeki Tominaga (Executive Board Member of Kyoto Arts and Culture Foundation / Professor at Institute for Research in Humanities, Kyoto University)

**Committee Members:** Fumio Amano (Director, professor of Kyoto Performing Arts Center)  
Motoaki Shinohara (Professor at Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University)  
Ritsue Hata (Editorial committee member of Arts and Cultural News Department, Osaka head office of The Mainichi Newspapers)  
Hitomi Yamamoto (Secretary-General of Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation)  
Kumiko Yoshioka (Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City, Culture and Art Planning Section Unit Head)  
Machie Yoshida (Senior Director of Kyoto Arts and Culture Foundation)

**Supervisors:** Masatoshi Akiyama (Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City, Culture and Art Planning Section Head)  
Masashi Hasegawa (Secretary-General of Kyoto Arts and Culture Foundation)

**Advisors:** Kojin Ota (Theater critic / Vice President of Kyoto University of Education)  
Akira Shigeyama (Kyogen artist / President of NPO Kyoto Arts Meeting)  
Soshitsu Sen (Urasenke Grand Tea Master)  
Akira Tatehata (President of Kyoto Arts and Culture Foundation / President of Kyoto City University of Arts)  
Oriza Hirata (Playwright, theater director / Director of Seinendan)  
Moriaki Watanabe (Theater director / Visiting professor at Kyoto University of Art and Design / Professor Emeritus, University of Tokyo)

**Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office**

**Program Director:** Yusuke Hashimoto  
**Executive Director:** Junko Kakiwaki  
**Office:** Shunsuke Kadowaki, Shoko Murakami, Nagara Wada  
**Public Relations:** Masako Tago, Eriko Nishitani  
**Production Coordinators:** Kyoko Iikawa, Ryo Ide (Kyoto Performing Arts Center), Sorataro Iwamura (Kyoto Art Center), Yukako Ogura, Yoko Kawasaki, Miho Kawahara (Kyoto Performing Arts Center), Eri Shibata (Kyoto Art Center), Kaori Nagano (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation), Sakiko Nishio (Kyoto Art Center)  
**Technical Coordinators:** Nobuaki Oshika, So Ozaki, Masaya Natsume  
**Interns:** Haruka Umihara, Saori Yamamoto, Lee Soni  
**Translation:** William Andrews, Yuki Itai, Olivier Krischer, Justus Wallen  
**Document Coordinator:** Atsushi Takeuchi  
**Art Direction:** Yuma Harada (UMA/design farm)  
**Design:** Keisuke Yamazoe (UMA/design farm)  
**Web Direction:** UNGLOBAL STUDIO KYOTO  
**Web Design:** TRACE  
**Web Programming / Web Coding:** FLAM (Norichika Kiriya)

**Kyoto International Performing Arts Festival**

**Advisory Board:** Haruka Idegami (President of NPO KIDS MEET ARTISTS)  
Tetsuya Ozaki (Editor / Publisher and Editor-in-Chief of REALTOKYO and REALKYOTO)  
Naoko Kogo (Performing arts researcher / critic / dance+)  
Reiko Hagihara (Kyoto Art Center)

## 公式プログラムチケット料金 / Tickets

|    | アーティスト・演目<br>Artist, Title  | 前売券 Advance Tickets   |   |  | ペア<br>Pair | 当日券<br>Day Tickets   | 席種<br>Seating    |
|----|---|---|---|--|------------|--|------------------|
|    |   | 一般<br>Adult   | ユース(25歳以下)<br>学生<br>シニア(65歳以上)<br>Youth (Up to 25)<br>Student<br>Senior (65 & Up) | 高校生以下<br>High School<br>Student &<br>Younger |            |  |                  |
| 1  | ティナ・サッター / ハーフ・ストラドル<br>Tina Satter / Half Straddle<br>House of Dance   | ¥2,500  | ¥2,000  | ¥1,000                                       | ¥4,000     |  | 自由<br>Unreserved |
| 2  | 高嶺格<br>ジャパン・シンドローム ~ step3. "球の外側"<br>Tadasu Takamine<br>Japan Syndrome -step.3 "Outside of the ball"                               | ¥3,000  | ¥2,500  | ¥1,000                                       | ¥5,000     |  | 自由<br>Unreserved |
| 3  | 村川拓也<br>エヴェレットゴーストラインズ<br>Takuya Murakawa<br>Everett Ghost Lines  | ¥2,500  | ¥2,000  | ¥1,000                                       | ¥4,000     |  | 自由<br>Unreserved |
| 4  | ルイス・ガレー<br>マネリエス<br>Luis Garay<br>Maneries  | ¥2,500  | ¥2,000  | ¥1,000                                       | ¥4,000     |  | 自由<br>Unreserved |
|    | ルイス・ガレー<br>メンタルアクティビティ<br>Luis Garay<br>Mental Activity   | ¥2,500  | ¥2,000  | ¥1,000                                       | ¥4,000     | 前売料金<br>+¥500<br>(高校生以下<br>は同額)  | 自由<br>Unreserved |
| 5  | She She Pop<br>春の祭典——She She Popとその母親たちによる<br>THE RITE OF SPRING as performed by<br>She She Pop and their mothers                   | ¥3,500  | ¥3,000  | ¥1,000                                       | ¥6,000     | Advance<br>ticket price<br>plus ¥500<br>(High School<br>Students<br>& Younger<br>tickets are a<br>fait ¥1,000) | 自由<br>Unreserved |
| 6  | 木ノ下歌舞伎<br>三人吉三<br>Kinoshita-Kabuki<br>Sanninkichisa   | ¥3,500  | ¥3,000  | ¥1,000                                       | ¥6,000     |  | 指定<br>Reserved   |
| 7  | contact Gonzo<br>xapaxnannan (ザパックス・ナンナン) :<br>私たちの未来のスポーツ<br>xapaxnannan: Our future sports  | ¥2,500  | ¥2,000  | ¥1,000                                       | ¥4,000     |  | 自由<br>Unreserved |
| 8  | 悪魔のしるし<br>わが父、ジャコモメッティ<br>Akumanoshirushi<br>Mon Père, Giacometti   | ¥2,500  | ¥2,000  | ¥1,000                                       | ¥4,000     |  | 自由<br>Unreserved |
| 9  | フランソワ・シェニヨー & セシリア・ベンゴレア<br>TWERK<br>François Chaignaud & Cecilia Bengolea<br>altered natives' Say Yes To Another Excess<br>- TWERK | ¥3,500  | ¥3,000  | ¥1,000                                       | ¥6,000     |  | 自由<br>Unreserved |
| 10 | 地点<br>光のない。<br>Chiten<br>Kein Licht. (No Light.)  | ¥3,500  | ¥3,000  | ¥1,000                                       | ¥6,000     |  | 指定<br>Reserved   |
| 11 | 金氏徹平<br>四角い液体、メタリックなメモリー<br>Teppe Kaneuji<br>Cubed Liquid, Metallic Memory  | 展覧会、ライブペインティング、クロージングパーティ：入場無料<br>Free Admission (Exhibition, Live Painting, Closing Party) |   |  |            |  | -                |
|    |   | ライブ、パフォーマンス：各¥2,000<br>¥2,000 each (Live Music, Performance)<br>※各種セット券の対象外です。              |   |  |            |  |                  |

### Notes:

- ペアは2枚分の料金です。同一演目・日時の公演を2人で観劇する場合のみ有効です。
- ユース・学生・シニア、高校生以下チケットをご購入の方は公演当日、証明書のご提示が必要です。
- 各公演の受付開始は開演の1時間前です。
- 車椅子でお越しのお客様は、各料金の¥500引き(介助者1名無料)となります。(お席をこちらで指定する場合がございます。問合せはKYOTO EXPERIMENT チケットセンターまで)
- 団体割引(10名以上)を設けております。詳細はKYOTO EXPERIMENT チケットセンターまで。
- 年齢により入場を制限させていただく場合がございます。詳細は各公演ページをご覧ください。
- 主催者の都合による公演中止の場合をのぞき、ご購入後のキャンセル、日時の変更はできません。
- 演出の都合上、開演時刻を過ぎると入場できない場合がございます。その際払い戻しはいたしません。

### Notes:

- \* The price of Pair tickets is for two seats. Pair tickets are valid for two persons for the same performance only.
- \* ID required for Youth, Student, Senior and High School Student & Younger tickets.
- \* The theater reception and box office opens 60 minutes prior to a performance.
- \* Accessible Tickets are available at a ¥500 discount from regular priced tickets and include one complimentary ticket for a helper. We may guide you to specific seats. Please contact the Kyoto Experiment Ticket Center.
- \* Group rates are available for groups of more than 10 people. Please contact the Kyoto Experiment Ticket Center for details.
- \* Some performances have age restrictions. Please refer to the specific performance information for details.
- \* No refunds are offered after a ticket has been purchased, except in the case of the cancellation of a performance for unforeseen reasons. Ticket dates and times may also not be changed after purchase.
- \* Entrance to some performances may be refused after the performance has started. Please note that refunds are not available for latecomers.

## チケット取扱 / Ticket Information

### KYOTO EXPERIMENTチケットセンター

(11:00-20:00、9/21まで日曜日)

オンライン(要事前登録) | [www.kyoto-ex.jp](http://www.kyoto-ex.jp) [セブン-イレブン引取、要事前登録(無料)]

電話予約 | 075-213-0820 [セブン-イレブン引取]

窓口 | 京都芸術センター2F

### 京都芸術センター(10:00-20:00)

窓口販売のみ | 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2

### チケットぴあ

オンライン | <http://t.pia.jp>

電話予約 | 0570-02-9999

### セット券

KYOTO EXPERIMENT チケットセンターではお得な各種セット券を取り扱っています。

※金氏徹平のパフォーマンス作品は、各種セット券の対象外です。  
※当日購入不可 ※1演目につき1回 ※本人のみ有効

#### ペア | 料金は左表を参照

同一演目・日時の公演を2名分まとめて購入することで  
お得に観劇できるチケットです。

#### フリーパス/学生フリーパス【枚数限定】

フリーパス | ¥22,000 学生フリーパス | ¥12,000

公式プログラム有料公演11演目すべてをご観劇いただけます。

#### 3 演目券/学生3 演目券

3 演目券 | ¥7,500 学生3 演目券 | ¥6,000

公式プログラムからお好きな3 演目を選び、すべて同時に購入することでお得に観劇できるセット券です。

#### ルイス・ガレー 2 演目券 | ¥4,000

ルイス・ガレー『マネリエス』『メンタルアクティビティ』の2 演目をお得に観劇できるセット券です。

取扱 = KYOTO EXPERIMENT チケットセンター

### KEX 半券割引

当日受付で、対象公演の観劇済み公演チケットの半券  
をご提示いただくと、公式プログラムの当日券が¥500  
OFF(前売料金)でご入場いただけます。

[対象公演: KYOTO EXPERIMENT 2014 公式プログラム/フリンジ企画「使えるプログラム」作品/オープン  
エントリー作品]

※半券1枚につき1名、1回のみ有効。当日券のみの  
取扱で、残席がある場合に限ります。

### Kyoto Experiment Ticket Center

(11:00-20:00, Closed on Sundays until 9/21)

Online | [www.kyoto-ex.jp](http://www.kyoto-ex.jp)

Tel | 075-213-0820

Box Office | Kyoto Art Center 2F

### Kyoto Art Center (10:00-20:00)

Box Office only | 546-2 Yamabushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

### Ticket Pia (Japanese only)

Online | <http://t.pia.jp>

Tel | 0570-02-9999

### Tickets Sets

Our ticket sets offer great deals for audiences who would like to attend more than one performance.

\* Admission to Tepei Kaneuji's performance is not included in any set (including the Free Pass).

\* Available for advance tickets only. Cannot be used to purchase tickets on the door.

\* Limited to one use per performance.

\* May only be used by the purchaser of the set.

#### Pair Tickets | See ticket prices chart (left)

Available when purchasing two tickets for the same performance.

#### Free Pass / Student Free Pass

(limited availability)

Free Pass | ¥22,000

Student Free Pass | ¥12,000

With a Free Pass you can enjoy all the performances in our official program.

#### 3 Performance Set / 3 Performance Set

(Students)

3 Performance Set | ¥7,500

3 Performance Set (Students) | ¥6,000

You can choose 3 performances of your preference and get a discount when you purchase the tickets together.

#### Luis Garay Set Ticket | ¥4,000

A special set is available for Luis Garay's two performances (Maneries and Mental Activity).

### Repeater's Discount

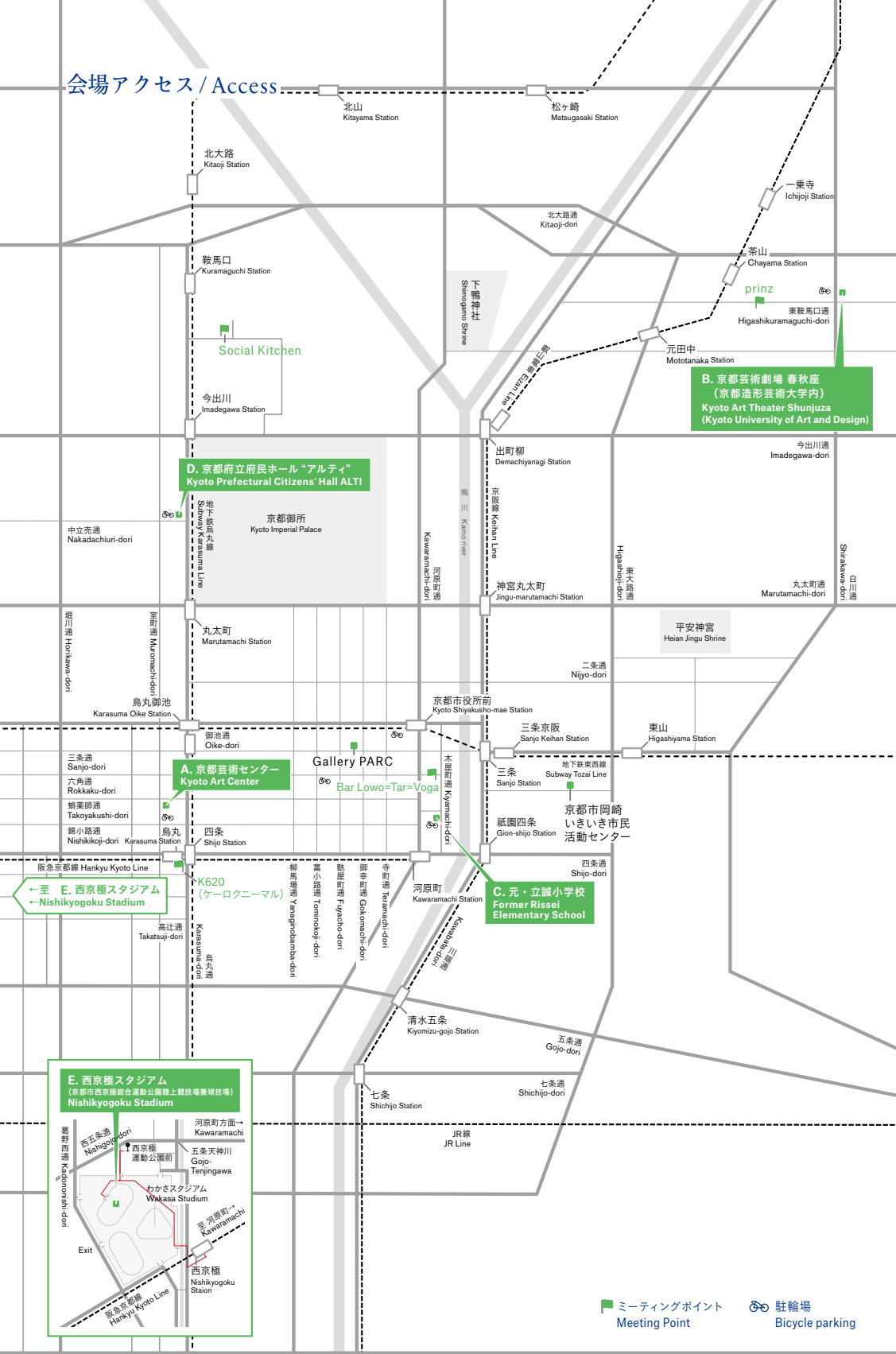
Show your ticket stub from a previous performance at the box office and receive a ¥500 discount on a full price ticket for any performance in the official program!

Available for: Kyoto Experiment 2014 official program performances, Fringe program (The Useful Program, Open Entry Performance)

Limited to a one-time discount per ticket stub, one per person. Only valid for full price tickets on the day of the performance when the venue is not sold out.



会場アクセス / Access



A 京都芸術センター / Kyoto Art Center

京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2  
546-2, Yamabushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto  
Tel: 075-213-1000 E-mail: info@kac.or.jp  
Website: <http://www.kac.or.jp>

・地下鉄烏丸線「四条」駅、阪急京都線「烏丸」駅下車、22・24番出口より徒歩5分  
※駐車場なし・駐輪場あり



B 京都芸術劇場 春秋座 (京都造形芸術大学) / Kyoto Art Theater Shunjuza (Kyoto University of Art and Design)

京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学内  
2-116, Uryuyama Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto  
Tel: 075-791-8240 E-mail: k-pac@kuad.kyoto-art.ac.jp  
Website: <http://www.k-pac.org>

・地下鉄烏丸線「北大路」駅(北大路バスターミナル)より、市バス204系統「高野・銀閣寺」ゆき「上終町京都造形芸大前」下車すぐ  
・阪急「三条」駅より、市バス5系統「岩倉」ゆき「上終町京都造形芸大前」下車すぐ  
・阪急「河原町」駅(四条河原町)より、市バス5系統「岩倉」ゆきまたは、市バス3系統「百万遍」上終町京都造形芸大前ゆき「上終町京都造形芸大前」下車すぐ  
・京阪「出町柳」駅から叡山電車に乗り換え、「茶山」駅下車 徒歩約10分  
※駐車場なし・駐輪場あり(原付・バイクはご遠慮下さい)



photo: Toshihiro Shimizu

C 元・立誠小学校 / Former Rissei Elementary School

京都市中京区蛸薬師通河原町東入備前島町310-2  
310-2, Bizenjima-cho, Nakagyo-ku, Kyoto  
Tel: 075-708-5318

・阪急「河原町」駅下車、1a出口より北へ徒歩3分  
・京阪「祇園四条」駅下車、4・5号出口より北西方向へ徒歩5分  
※駐車場・駐輪場なし(駐輪は市営先斗町駐輪場[有料]をご利用ください。)



photo: Shunsuke Yamashita

D 京都府立府民ホール「アルティ」 / Kyoto Prefectural Citizens' Hall ALTI

京都市上京区烏丸通一条下る龍前町590-1  
590-1, Tatsumae-cho, Kamigyo-ku, Kyoto  
Tel: 075-441-1414 E-mail: hall@alti.org  
Website: <http://www.alti.org>

・地下鉄烏丸線「今出川」駅下車、6番出口より南へ徒歩5分  
・京阪「出町柳」駅2番出口より、市バス201系統「千本今出川・みぶ」ゆき、または、203系統「北野天満宮・西大路四条」ゆき、「烏丸今出川」下車、烏丸通を南へ徒歩5分。  
※駐車場なし・駐輪場あり



E 西京極スタジアム (西京極総合運動公園陸上競技場兼球技場) / Nishikyogoku Stadium

京都市右京区西京極新明町  
Nishikyogokushinmeicho, Ukyo-ku, Kyoto

京都駅から  
・地下鉄烏丸線「京都」駅より「四条」駅乗り換え、阪急「烏丸」駅から「西京極」駅下車、徒歩10分  
・京都駅バスターミナルC5番乗り場から京都市営バス73号、バス停「西京極運動公園前」下車、徒歩5分  
大阪方面から  
・阪急「梅田」駅から「桂」駅で普通もしくは準急に乗り換え「西京極」駅下車、徒歩10分  
※駐車場あり(有料)・駐輪場あり



photo: Takuya Matsumi

カレンダー/Calendar

|   |  | 9/September |                            |             |           | 10/October |                     |          |                   |             |                           |          |                                    |          |                 |             |           |           |           |           |           |             | 上演時間<br>Duration |             |                            |        |        |
|---|--|-------------|----------------------------|-------------|-----------|------------|---------------------|----------|-------------------|-------------|---------------------------|----------|------------------------------------|----------|-----------------|-------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------|------------------|-------------|----------------------------|--------|--------|
| アクセス<br>ACCESS                          |  | 27<br>sat   | 28<br>sun                  | 29<br>mon   | 30<br>tue | 1<br>wed   | 2<br>thu            | 3<br>fri | 4<br>sat          | 5<br>sun    | 6<br>mon                  | 7<br>tue | 8<br>wed                           | 9<br>thu | 10<br>fri       | 11<br>sat   | 12<br>sun | 13<br>mon | 14<br>tue | 15<br>wed | 16<br>thu | 17<br>fri   | 18<br>sat        | 19<br>sun   |                            |        |        |
| 1                                       | ティナ・サッター/ハーフ・ストラドル<br>Tina Satter / Half Straddle<br>House of Dance  | A           | 17:00<br>◎                 | 17:00<br>□◎ | 20:00     | 20:00      |                     |          |                   |             |                           |          |                                    |          |                 |             |           |           |           |           |           |             |                  |             | 70<br>min                  |        |        |
| 2                                       | 高嶺格<br>Tadasu Takamine<br>ジャパン・シンドローム ~step3. “球の外側”<br>Japan Syndrome ~step3. “Outside of the ball”                           | C           | 19:00                      | 14:00<br>□◎ | 19:00     |            |                     |          |                   |             |                           |          |                                    |          |                 |             |           |           |           |           |           |             |                  |             | 未定                         |        |        |
| 3                                       | 村川拓也<br>Takuya Murakawa<br>エヴェレットゴーストラインズ<br>Everett Ghost Lines   | A           |                            |             |           |            |                     | 20:00    | 20:00             | 14:00<br>◎  | 17:00<br>◎                |          |                                    |          |                 |             |           |           |           |           |           |             |                  |             | 70<br>min                  |        |        |
| 4                                       | ルイス・ガレー<br>Luis Garay<br>マネリエス*1   メンタルアクティビティ*2<br>Maneries   Mental Activity   | A           |                            |             |           |            |                     |          | マネリエス<br>Maneries | 16:00<br>◎  | 19:00                     |          | メンタル<br>アクティビティ<br>Mental Activity | 20:00    | 20:00<br>□      | 13:00<br>◎  |           |           |           |           |           |             |                  |             | 70*1<br>min<br>45*2<br>min |        |        |
| 5                                       | She She Pop<br>春の祭典—She She Popとその母親たちによる<br>THE RITE OF SPRING as performed by She She Pop and their mothers                  | D           |                            |             |           |            |                     |          | 19:00             | 14:00<br>□◎ |                           |          |                                    |          |                 |             |           |           |           |           |           |             |                  |             | 90<br>min                  |        |        |
| 6                                       | ホノ下歌舞伎<br>Kinoshita-Kabuki<br>三人吉三<br>Sanninkichisa  | B           |                            |             |           |            |                     |          |                   |             |                           |          |                                    |          | 16:00<br>□◎     | 13:00<br>□◎ |           |           |           |           |           |             |                  |             | 4.5<br>h                   |        |        |
| 7                                       | contact Gonzo<br>xapaxnannan (ザパックス・ナンナン): 私たちの未来のスポーツ<br>xapaxnannan: Our future sports                                       | E           |                            |             |           |            |                     |          |                   |             |                           |          |                                    |          |                 |             |           |           | 19:00     |           |           |             |                  |             | 60<br>min                  |        |        |
| 8                                       | 悪魔のしるし<br>Akumanoshirushi<br>わが父、ジャコモメッティ<br>Mon Père, Giacometti  | A           |                            |             |           |            |                     |          |                   |             |                           |          |                                    |          |                 |             |           |           |           | 20:00     | 20:00     | 14:00<br>□◎ | 19:00            |             | 60<br>min<br>80<br>min     |        |        |
| 9                                       | フランソワ・シェニョー&セシリア・ベンゴレア<br>François Chaignaud & Cecilia Bengolea<br>TWERK<br>altered natives' Say Yes To Another Excess - TWERK | D           |                            |             |           |            |                     |          |                   |             |                           |          |                                    |          |                 |             |           |           |           |           |           | 17:00<br>◎  | 17:00<br>◎       |             | 60<br>min                  |        |        |
| 10                                      | 地点<br>Chiten<br>光のない。<br>Kein Licht. (No Light.)   | B           |                            |             |           |            |                     |          |                   |             |                           |          |                                    |          |                 |             |           |           |           |           |           |             | 19:00            | 14:00<br>□◎ | 110<br>min                 |        |        |
| 11                                      | 金氏徹平<br>Teppeï Kaneuji<br>四角い液体、メタリックなメモリー<br>Cubed Liquid, Metallic Memory  | A           |                            |             |           |            |                     |          |                   |             |                           |          |                                    |          |                 |             |           |           |           |           |           |             |                  | 14:00<br>□◎ | -                          |        |        |
| フリッジ 使えるプログラム The Useful Program        |  |             | ■ 2 ■                      | ■ 3 ■       | ■ 4 ■     | 1          |                     |          |                   | ■ 2 ■       |                           |          |                                    |          | ■ 5 ■           |             | ■ 6 ■     |           |           |           |           |             |                  |             |                            |        |        |
| フリッジ オープンエントリー作品 Open Entry Performance |  |             | ■ 1 ■                      | ■ 2 ■       | ■ 3 ■     | ■ 4 ■      | ■ 5 ■               | ■ 6 ■    | ■ 7 ■             | ■ 8 ■       | ■ 9 ■                     | ■ 10 ■   | ■ 11 ■                             | ■ 12 ■   | ■ 13 ■          | ■ 14 ■      | ■ 15 ■    | ■ 16 ■    | ■ 17 ■    | ■ 18 ■    | ■ 19 ■    | ■ 20 ■      | ■ 21 ■           | ■ 22 ■      | ■ 23 ■                     | ■ 24 ■ | ■ 25 ■ |
| 関連イベント                                  |  |             | contact Gonzo 展示 9/18-9/28 |             |           |            | 高嶺格アーティストトーク        |          |                   |             | ニューイ・フランシュ 村川拓也 アーティストトーク |          |                                    |          | ルイス・ガレー ワークショップ |             |           |           |           |           |           |             |                  |             |                            |        |        |
| 提携プログラム                                 |  |             | 日米ニューコネクションプロジェクト          |             |           |            | hyslom 展覧会 9/5-9/28 |          |                   |             | hyslom パフォーマンス            |          |                                    |          |                 |             |           |           |           |           |           |             |                  |             |                            |        |        |

※ 各演目「□」がついた回は終演後ポスト・パフォーマンス・トークを予定しております。 □ Post-Performance Talk  
 ※ 各演目「◎」がついた回は託児サービスがご利用いただけます(有料:1,500円、要事前予約)。予約申込みの締切は各公演の4日前となります。予約・問合せ: KYOTO EXPERIMENT 事務局 075-213-5839 (平日11:00-19:00)

ロゴについて

KYOTO EXPERIMENTのキーワードである「出会い / 衝突 / 対話」がぶつかり合い、外へ広がろうとする様子をビジュアル化したロゴ。600種類を越えるパターンがあり、進化する創造の場を表現している。

Kyoto Experiment's logo is a visual representation of the confrontation and expansion of its three keywords: encounter, collision, and dialogue. It is a design with more than 600 forms, which stand for the evolution of the creative spaces.

logo design: UMA/design farm



KYOTO EXPERIMENT | 京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局  
Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office

京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2 京都芸術センター内  
Kyoto Art Center, 546-2, Yamabushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

Tel | +81(0)75-213-5839

E-mail | [info@kyoto-ex.jp](mailto:info@kyoto-ex.jp)

[www.kyoto-ex.jp](http://www.kyoto-ex.jp)

発行日 | 2014年8月30日

Published: August 30, 2014

アートディレクション: 原田祐馬 (UMA/design farm)

デザイン: 山副佳祐 (UMA/design farm)

編集: 多胡真佐子、西谷枝里子、和田ながら

翻訳: ウィリアム・アンドリュース、板井由紀、オリヴィエ・クリシャー、

ジャスティス・ウォーレン

作品提供 (p1, p10-11, p56-57, p70-71): 金氏徹平

写真 (p1, p10-11, p56-57, p70-71): 守屋友樹

印刷・製本: 柏村印刷株式会社

Art direction: Yuma Harada (UMA/design farm)

Design: Keisuke Yamazoe (UMA/design farm)

Editing: Masako Tago, Eriko Nishitani, Nagara Wada

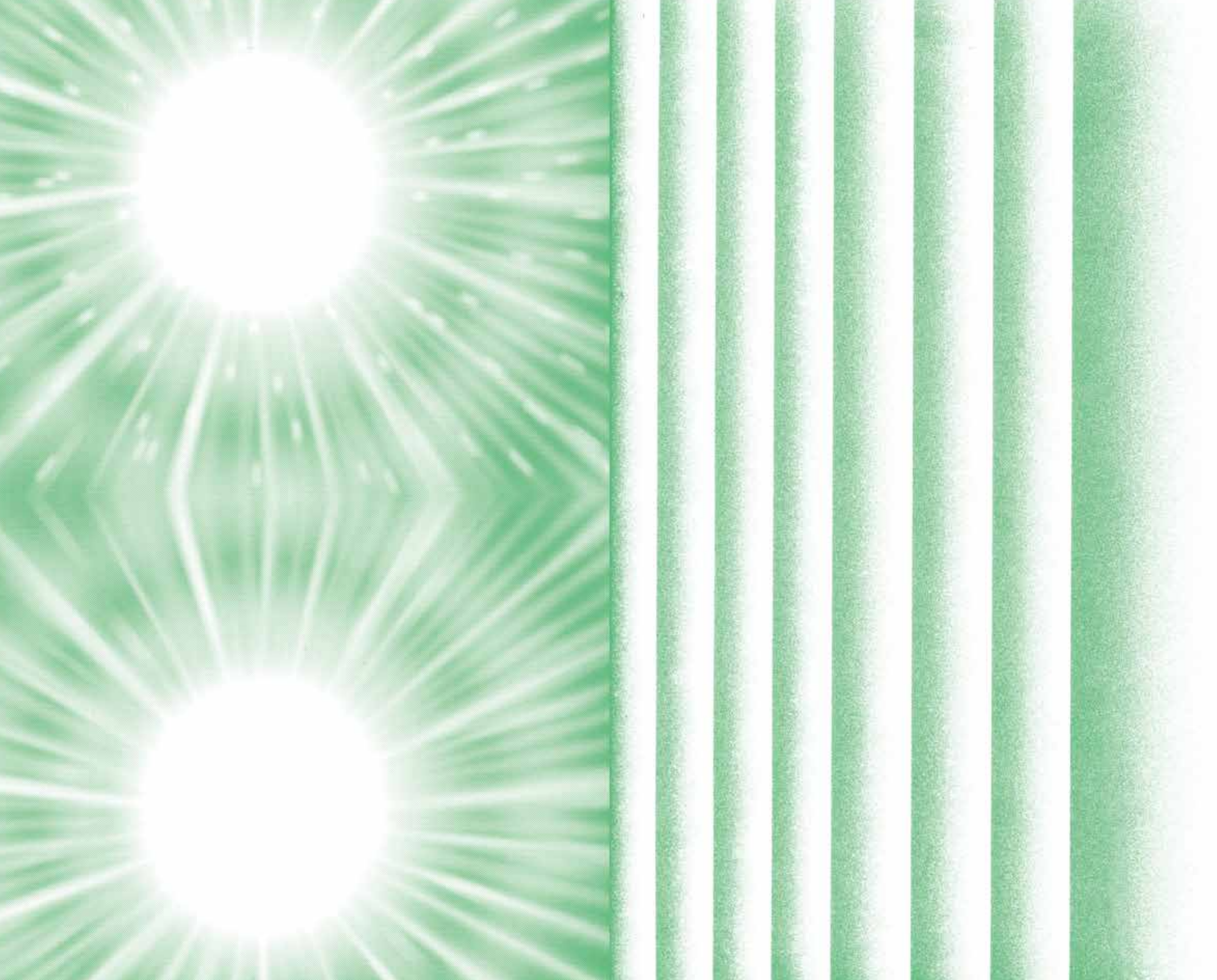
Translation: William Andrews, Yuki Itai, Olivier Krischer, Justus Wallen

Art work (p1, p10-11, p56-57, p70-71): Teppei Kaneuji

Photography (p1, p10-11, p56-57, p70-71): Yuki Moriya

Printing: KASHIMURA CO., LTD.

©KYOTO EXPERIMENT



**KYOTO EXPERIMENT 2014**

京都国際舞台芸術祭